

## 第七回 古田武彦古代史セミナー 講演録

日時 2010年11月6日、8日  
場所 八王子大学セミナーハウス  
演題 日本古代史新考 自由自在(3)  
文責 平松健

### おことわり

開会の挨拶、事務連絡等は省略させていただいた。

内容については、その時点で古田先生がお話になったとおりのことを再録することに努めた。ただし、明らかに言い間違いのような個所は、先生に確認の上訂正した。なお、この記録は、ご発表の時点での先生のお考えであることを付言したい。

また質問等につき、本文に関連してされたものも一切本文の後に掲載し、また、その順序も、関連事項になるべくまとめるように配置したことをご了承願いたい。

### 邪馬台国問題 壹と臺

邪馬台国問題については、私は解決済みと思っていますが、現在の理解を簡単に触れることとします。決着したとする、第一点は、三国志倭人伝には邪馬「壹」国と書いてあるわけです。紹熙本、紹興本いずれも邪馬「壹」国と書いていて、中には「一」と書いてあるものもあります。

それに対して何故邪馬台国かと言うと、何とかして「ヤマト」と読みたい、邪馬壹国ではヤマトと読めない。だから後漢書にある邪馬「臺」国というのを持ってきて、これを取り替えて倭人伝に邪馬「臺」国があったことにしようということで、これは動機不純な話です。無理矢理ヤマトと読んで、それを奈良県の大和に当てはめるわけです。松下見林という江戸の学者がその始まりです。

その後新井白石が九州にもヤマトがある、と言って筑後の山門に持って行き、九州説のヤマトが生まれます。それで結局奈良県大和の方は京大、九州山門の方は東大が支持して、東大京大が手を結べば天下無敵ということで、これが定説になって今日に至ったわけです。

しかし私はどちらにもとられる立場じゃありませんので、やはり本来の邪馬壹国で考えるべきだと考えます。当たり前すぎる考え方です。

### 邪馬壹国 里程

第二点は、場所が大変わかりやすく書いてあるということです。私はこれを里程列伝と呼んでいるのですが、今の韓国ソウル近辺の帯方郡を出発して女王国に到着するまで方角と里程が次々書いています。ところが部分の里程を足してみても一万数百里しかならないで千四百余里足りないわけです。

ある暑い夏の日にその答えが出ました。それは対海国(対馬)と一大国(壹岐)について里程の中に書いてあるのに足していなかったわけです。対海国は方四百余里、一大国

は方三百里となっています。4回算入すると元に戻りますので、2倍の半周を足しますと八百と六百、合わせてぴったり千四百里になります。裸に近い格好でアパートの二階でやっついて、見つかったとあって、下にいた妻の所に飛び降りるように走って行ったことを昨日のように覚えています。それが『邪馬台国』はなかった』を書くに至った最大の動機です。要するに部分を全部足したら全体になる、ということがはっきりしたわけです。

里程の最後は不彌国です。これは博多湾岸です。博多湾岸のどの辺かという議論は、今日は省略します。その博多湾岸に入ったところで、里程列伝はストップしています。そこで女王に会うわけですから、女王国は博多湾岸を中心とする国になります。

要するに里というのは中国の使いが通った路を里で書いています。ですから、帯方郡から不彌国まで中国の使いがやっついてきているわけです。それで女王に会っていますから、不彌国が女王国の入り口ということになります。

### 邪馬壹国と考古学

これは考古学的分布にも裏付けられています。今度ミネルヴァから出した「邪馬壹国の論理」とか「ここに古代王朝ありき」（副題が「邪馬一国の考古学」）で、考古学問題を詳しく書いております。要するに三種の神器、現在の皇室も三種の神器をシンボルにしているのですが、記紀でもまた倭人伝でも三種の神器がクローズアップされています。そのポイントは鏡です。曲玉と剣については、曲玉は縄文からあるわけですし、剣は権力者で剣を持たない権力者はいませんので、当然あるわけです。問題は鏡を加えて三つをワンセットにするのが独特のスタイルです。（以下当会ニュース135号7頁と同趣旨であるため省略）

魏志得倭人伝に魏の明帝が卑弥呼に送った長文の詔書が載っていますが、その中で一番注目されるものは絹と錦です。大量の絹と錦をプレゼントする、また卑弥呼個人にプレゼントする、ということを麗々しく、細かく書いてあります。あの詔勅の中心は絹と錦を与えることだと言えるほどの表現です。（以下当会ニュース129号28頁と同趣旨であるため省略。要旨、本来絹・錦は禁制品。王昭君の話。北九州から発見。布目順郎氏の説の修正。3世紀。なお『邪馬台国』はなかった」新版395頁以下に詳しい）。

### 3世紀後の邪馬壹国

以上は3世紀の女王国の話です。次のテーマはその後はどうかということです。

邪馬台国近畿説の人は、弥生時代から近畿と言っているのですから、その後もずっと近畿ということになります。

私以外の九州説の人は、なぜか3世紀末ごろに東遷、即ち九州から大和へ移ったと言います。近畿説も九州説も一緒になって、4世紀以後は近畿が中心だ、天智、天武も、元明元正まで大和にいたのだと、私以外のほとんど全ての学者の説になっています。教科書にも、邪馬台国問題は近畿説九州説両方あると書いてあるから、教科書も迷っているところがありますが、4世紀以後はほとんどの学者が一致して近畿だと言っていますから、それ以外は問題外だと思っているわけです。

### 多利思北孤

明治以後の学校教育を受けた人は全員がそう思われて来ていたわけですが、大変な間違いです。これを決めるのは「日出ずる処の天子」という有名な言葉、明治以後、教科書で愛用されてきた言葉です。その出ている文献は隋書倭国伝です。一般には倭国伝と直されていますが、倭と似て非なるものが倭です。

結論から言いますと大倭（たいゐ）と日本側で書いていたものを、向こう側が弱い国だと卑しめて倭と書き直しています。ここに有名な「日出ずる処の天子、日没する処の天子に書を致す、恙無きや」という名文句が出てくるわけです。

それを明治以後の天皇家中心の教科書が大変愛用して130年国民に教えて今日に至ったわけです。ところがこれは考えてみれば間違いであることはすぐ解るわけです。この日出ずる処の天子と言ったのは多利思北孤という、男性の王者、雞彌という奥さんがいるわけですから男性に決まっているわけです。その男性の王者が言った言葉です。それを大和の推古天皇の言葉にして明治以後使ってきているわけです。推古天皇は言うまでもなく女性で、男性と女性がイコールだなんて世界中何処へ出しても通用できる話ではないわけです。（以下当会ニュース131号4頁以下と同趣旨であるため省略）

さらにもっと簡単なことは日出ずる処の天子の言葉の直前と言っていいところに、

有阿蘇山、其石無故火起接天者

という文章があります。（中華書局版1827頁）。

非常に名文句が書いてあるわけです。他に例えば大和三山有りとか瀬戸内海ありとか言う文章はないわけです。もし阿蘇山を通過して、その後で瀬戸内海を通り大和に行ったのであれば当然「瀬戸内海有り。海有り湖水のごとし」などと書くはずですが、簡単で明瞭な表現をするはずですが、山々有り、山迫りて天狭し等名文句で書くはずですが、全然書いていません。

## 神籠石

この点はさらに神籠石という問題で私は決定的な答えを見いだしました。

（以下当会ニュース130号神籠石の証明、134号神籠石の史料批判等と同趣旨であるため省略）

## 斉明天皇の陵墓

（当会ニュース135号17頁以下に詳述しているため省略）

## 唐の高祖の大義名分

隋書が書かれている大きな目的について、はっきり書かれているには、帝紀の最後の恭帝で、最後の天子の記録です。その中に

十二月癸未薛舉自稱天子、寇扶風。秦公爲元帥、擊破之。

という文があります。（中華書局版100頁）

薛舉という人物が自分は天子であるということを勝手に称したわけですが、これは許世ぬということでこれを攻めて滅ぼしたという記事です。（以下当会ニュース131号11頁、135号8頁と同旨であるため省略）

隋書の大目的が、私の論証では、日出ずる処の天子の問題によって唐の高祖の反乱を美化する、ということです。それは全体の文脈です。さらにこの問題は続きがありまして、

隋書の今の箇所では、「此の後ついに絶つ」（此後遂絶〈中華書局版1828頁〉）という言葉で結ばれています。

この場合日本側が絶交したのだと解釈する人がいるようですが、全くの間違いです。隋書が、日本側が書いた文章なら、それは日本側が絶ったと理解できますが、日本側でなく書いたのは中国側ですから、唐が、そういうけしからぬ日本と絶交したと書いているのです。

しかもここで改めて確認したのはこの隋書というのは、最後は唐に至っているわけです。反乱軍を正義の兵とし、隋の天子を殺して高祖が天子になったというところまで書いています。唐になっていた段階が現在の段階で、「この後ついに絶つ」というのは唐まで絶っているということです。これは仲良くしたという日本書紀の言うこととは全然合わないわけです。

### 日中関係の実体

さらにその後の話があります。旧唐書に、

貞観五年、（631年舒明天皇3年）遣使獻方物。太宗矜其道遠、勅所司無令歲貢、又遣新州刺史高表仁持節往撫之。表仁無綏遠之才、與王子爭禮、不宣朝命而還。至二十二年、又附新羅奉表、以通往起居。日本國者、倭國之別種也。以其國在日邊、故以日本爲名。（中華書局版5340頁）

この中で重要なことは、「王子と礼を争い朝命を宣べずして帰る」とあります。大事件です。ところが岩波文庫の注では、「礼を争ったことは日本の記録にないが当時の実情としてありそうなことである」とあります（文庫36頁）。日本書紀に仲良しばっかり書いてあるのに、礼を争うということは最高の表現ですから大変なことです。身分上の大義名分で衝突したということですから、これだけひどい衝突はないわけです。それで帰ったというわけです。（新唐書は與王禮不平とあり〈中華書局版6208頁〉、王子でなく王となっている。また岩波文庫36頁は王子〈王〉とは聖徳太子であったかもしれないと説明している）

さらに「二十二年にいたりまた新羅に附し表を奉じて持って起居を通ず」とあります。要するに、この時点までは、隋書が言うように絶交状態に陥っているわけで、非常に貴重な資料です。

### 万世多系論

次は、万世多系論という歴史テーマです。明治以後使われた言葉に「万世一系」という有名な言葉がありますが、とんでもない話で、記紀をよく見ますと「万世多系」というのが記紀の示す王朝の姿です。

まず古事記に不思議な文章があります。石長比売と木花之佐久夜毘売の話で、木花之佐久夜毘売は非常な美人で石長比売は非常に醜かった。それで瓊々藝尊は醜い石長比売を避けて美人の木花之佐久夜毘売を自分の奥さんにした。そこで「故、これを以ちて今に至るまで、天皇命等の御命長くまさざるなり」（岩波古典文学大系古事記祝詞133頁）とあります。だから天皇は現在に至るまで長生きできないのだと書いてあります。

記紀では天皇の命は120、130才がやたらにある。平均して90才ぐらい生きていくわけです。90才というのはいわゆる2倍年暦で、要するに100才を越えるのが珍

しくないのが記紀の示している年齢です。それなのに天皇は石長比売問題以来長生きできないという話になっています。これは話として合いません。

これも全体を読み直してみたら直ちに理解ができるわけです。それは古事記上巻の最後の段近くに「故、日子穗穗手見命は高千穂の宮に伍佰捌拾歳坐しき。御陵は即ちその高千穂の山の西にあり」（岩波古典文学大系古事記祝詞147頁）とあり、日子穗穗手見命というのは高千穂の宮で580才まで生きていたが、現在ではせいぜい110とか120才ぐらいまでしか生きないのは石長比売問題のたたりだという解釈です。

私はかつて糸島郡の手塚誠さんという方にお会いして意外な系図を見せていただきました。（以下「盗まれた神話」新刊158頁以下にくわしい）。その系図（現在福岡市の博物館に寄託）はなんと明治の初めまで代々同じ名前でした。

これはいわば襲名で、歌舞伎のように江戸時代に始まったものではなく、ずっと古い淵源を持つわけです。明治以後でも襲名の風習はかなり各地にあります。

日子穗穗手見命の場合も580才生きたという意味ではなく日子穗穗手見命という名前を580年間襲名したということです。問題はそういう襲名の寿命であるということ。古事記の作者は理解せず、昔は580年も生きたのに、今はわずか120才までしか生きられないのは石長比売のたたりだというように解説しているわけです。要するに王朝が断絶している証拠です。王朝が続いていればそんなことを知らないはずはないのです。

この誤りのもとには倭人伝です。陳寿の唯一の誤りは、倭人が百年から八、九十年生きるという聞いて、彼には二倍年暦という理解がなく、まともに信用したから倭人は長生きだと書いてある（其人壽考、或百年、或八九十年）。

陳寿の唯一の失敗を記紀、特に日本書紀の著者は知らず、三国志という中国の信用すべき歴史書に書いてあるのだから、昔は百何十才まで生きたものだと思ひ込んだわけです。手元に九州王朝による二倍年暦で書かれた歴史書を手に入れて、それをそのまま当てはめたわけです。倭人伝を妄信した結果、日本書紀のようなべらぼうなものになりました。ということは元明元正の王朝の人たちは、二倍年暦を知らなかった、つまり王朝は違う王朝だったということです。現に古事記と日本書紀を比べると継体のところではっきり二対一の落差が出ているわけです。古事記の方では四十何歳が日本書紀では九十何歳となり、そこまで二倍年暦が続いていたことが解るわけです。

## 武烈天皇

さらに重要なことは武烈です。（以下当会ニュース129号30頁以下と同旨であるため省略 要旨 日本書紀では武烈天皇は悪逆の権化。津田左右吉も歴史事実と関係なく、中国の悪王伝説を日本書紀もまねしたものとす。日本書紀が書いた理由は神武から武烈に至る王朝はここで断絶したことを示す。継体が天皇になるのは前代の非理をただす意味。津田左右吉の造作説というのは天皇家のために取られた）。

記紀は一言で言えば「九州王朝はなかった」と言いたいわけです。それには磐井の乱があったということにしなければなりません。磐井の乱があったのなら九州年号など全くナンセンスになります。失われた九州王朝で論じたのは間違いになります。あそこであれだけの敗北をしておりながら九州年号だけ続く、また、日出ずる処の天子を九州で言い始めることはあり得ないわけです。それを消すのが津田左右吉の目的なのです。

要するに明治政府が万世一系ということを行うのは、徳川300年は終わったのだ、今まで徳川を最良のものとして尊重してきたが、あれはたかだか300年に過ぎない、それに対して我が天皇家は万世一系だと言って、それを政治上の旗印に使ったのです。明治政府はその立場を明治以後の公的な教科書にし、学者も御用学者、学会を作らせて今日に至っているわけです。三代も四代も経って、もう国民の常識のようになったように見えますが、しかし、いくら常識になっても嘘は嘘です。

### 三国志序文

次は三国志序文の発見というテーマであります。いま私は「日本評伝選俾弥呼」を書いています、そのとき私に取っては思いがけない大発見がありました。三国志の序文を発見したわけです。三国志の第三〇巻に烏丸鮮卑東夷伝というのがあり、この中に序文が二つあるのです。

つまり先頭に烏丸鮮卑伝というのがあります。これはちゃんとした序文です。これを書く目的は四夷、つまり周辺の蛮族が軍事的な変化を今後起こして行くそれに対応するためにこれを書いた、これは単なる記録ではなく、あくまで軍事的な目的で、中国の周辺の、彼等の言う夷蛮が軍事的に変化を起こすのに対応するために書いたのだという立派な序文です。

その後烏丸鮮卑伝というのが三つほど続き、もう一回序文が現れます。それが東夷伝序文です。これはちょっとおかしいのです。三国志の先頭に序文がないのは、我慢するとして、巻三〇という魏志の最後に、二つ序文が入るといのは本来おかしいです。

親鸞は序文の好きな人で、親鸞の教行信証には三つの序文があります。總序、信巻序、後序と三つ序文があります。(注 古田武彦著 親鸞思想542頁参照)。三国志の場合は巻三〇に二つも序文があるのです。

結論から言えば一つの序文はよそから持ってきてはめ込んでいるわけです。当然本来の序文は烏丸鮮卑伝に、周辺の軍事的変化に備えてと言っているのですから、堂々たる烏丸鮮卑伝の序文です。それに対してもう一つ東夷伝序文なるものはその内容を見れば、堂々たる三国志全体の序文なのです。

### 序文読み下し

原文（中華書局版八四〇頁）は紙面の都合で省略し、読み下し文のみ掲載します。

「書に称す。東は海に漸（いた）り、西は流沙に被（およ）ぶ。其の九服之制、得て言うべきなり。然るに荒城之外、重譯して至る。車軌の及ぶ所、未だ其の国俗殊方を知る有らざる者なり。

虞より周に暨（いた）り、西戎に白環之獻有り。東夷に肅慎之貢有り。皆世を曠（むな）しうして至る。其の遐遠（かえん）なるや、此の如し。

漢氏の張騫を遣わし、西域に使し、河源を窮（きわ）めしむるに及び、諸国を経歴し、遂に都護を置き、以てこれを總領せしむ。しかる後西域之事具（つぶさ）に存す。故に史官得て焉（これ）を詳載するを得たり。

魏興り、西域と與に尽くす能わずと雖も、其の大国に至りては龜茲、于賓、康居、烏孫、疎勒、月氏、鄯善、車師之屬、歳として朝貢奉らざること無し。略漢氏の如し。

而して公孫淵、父祖三世に仍りて遼東を有す。天子其の絶滅の爲に委ぬるに海外の事を

以てす。遂に隔斷し、東夷、諸夏に通じることを得ず。

景初中、大いに師旅を興し、淵を誅す。又軍を潜め、海に浮び、樂浪帯方の郡を収め、而る後海表謐然、東夷屈服す。其の後高句麗背反す。又偏師を遣わして討窮を致す。(注＝中華書局版では討と窮の間で切っている)。極遠に追ひ、烏丸の骨都を越え、沃沮を過ぎ、肅慎の庭を踐(ふ)み、東大海に臨む。長老説くに異面之人有り。日の出ずる所に近しと。遂に諸国を周觀し、其の法俗を采り、小大區別、各名號あり。得て詳紀するを得可し。

夷狄之邦と雖も、俎豆之象存す。中国礼を失うも之を求むるに、四夷猶信ざるがごとし。其の国を撰次し、其の同異を列し、以て前史の未だ備えざる所に焉を接せしむ」。

### 序文の意味するもの

この序文の内容としては、先頭は「書に称す、東は海に漸り」から始まっています。これは要するに周公の時に倭人が初めて行ったこと、これも周は周辺から信用がなかったこと、それは、周が匈奴に追われて、殷に亡命を求め、殷の許可を得て西安、長安に来ていた。その大恩人の殷に対して反乱を起こし、殷の紂王を殺したわけです。忘恩の国周ということが周辺にとどろいていました。だから誰も周へは国交を求めてこなかった。ところが初めて倭人が国交を求めて来たことが論衡に書かれている。

「周時天下太平、越裳獻白雉、倭人貢鬯草」(論衡卷八中華書局版375頁)

「成王之時越常獻雉、倭人貢暢」(論衡卷十九中華書局版832頁)

これを前提に、尚書周書に出てくる、「海隅日を出たす、卒俾せざるはなし」(全釈漢文大系尚書432頁)は、太陽の出る所から軍隊の長と使者がやってきたと周公が喜んでいる文章と解釈できます。周公は兄から依頼されて子供を助け摂政としてきたが周辺の国からは相手にされなかった。それが晩年になってやっと倭人が国交を求めて来た。自分の生涯の念願が叶ったのです。

この「卒俾」の俾は、倭人伝に普通書かれている卑弥呼の卑ではなく、三国志帝紀に最初に出てくる俾弥呼の俾です。倭人伝はその省略形で人偏が無いだけです。本来は倭人側は俾弥呼と書いてきている。書いた方は当然尚書に書いてあることを知って、それを背景に俾弥呼という署名で来ているわけです。

当然、これは陳寿はちゃんと知っているわけです。だから俾弥呼の話から東夷序文は始まっているわけです。最後に行きますと有名な「異面之人有り。日の出ずる所に近し」と長老が説いている訳です。漢書の西域伝には「長老傳聞」となっています。

(以下当会ニュース130号35頁と同旨のため省略。要旨 史記の場合は西域の入り口のところで止まっている。班固はそれを越えて張騫が西に行つて安息国の話を聞き、「日没する処近し」と書く。(中華書局版漢書3888頁))。

これを当然漢書を陳寿は読んでいるわけです。それに対して今度は東の方です。いわゆる周公の頃には、日が出るところが日本だなどと簡単に言いますが、三世紀の倭人伝の時は違うわけです。つまり、魏の使いが行つて女王に会っているわけですから、今更女王国から太陽が出るなんて思うはずはありません。ではどこから出るか。当然倭人の住む倭国からさらに東南水行一年の所に国がある。裸国黒齒国である。「日の出るところに近し」と。

倭人の長老は二つあって、一つは卑弥呼のいる女王国の長老、もう一つはさらにその先

に侏儒国の長老です。里程列伝は不彌国でストップしていますが、女王に会ったあと再び里程が始まるわけです。それが東へ千里。南へ3千里。合わせて4千里です。そこの侏儒国の長老に東南水行一年と国名を聞いてここに記録できたのです。

序文と言うものは本文を書いた後に最後に序文を書きます。陳寿は黒齒国裸国のことを知っているわけで、今更日本列島から太陽が出るなんて言うはずは無いわけで、黒齒国裸国の近い所から太陽がでる。これは司馬遷の史記も及ばなかった、班固の漢書も及ばなかったところですが。しかも漢書は日の没するところの国名を書いていない。ところが陳寿は国名が書いてある。黒齒国、裸国である。それを序文の最後の華にしているわけです。

これは東夷伝の中に於けるちっぽけなプラスアルファでは全然ないわけです。三国志が司馬遷の史記や班固の漢書を上回るすばらしい歴史書を我々は作ることができたのだという、言ってみれば大きな序文です。

それでは何故それを先頭に置かなかったのか。すぐ推察できるわけですが、陳寿は魏の時からいたのですが、西晋の歴史官僚として三国志を完成した。それは張華という、魏の天子の下の最高実力者でしたが、彼が、蜀から洛陽に来ていた青年陳寿に目をつけてそれを非常にかわいがり、スポンサーになって三国志を書かせたわけです。負けた国の貧しい青年に、本来そんな大事な事ができるわけではないのですが、張華のおかげで、陳寿は願いを叶えて三国志を完成したわけです。

ところが完成する直前張華が失脚するわけです。荀勗（じゅんきょく）というライバルと争って敗北して失脚します。敵の荀勗派の西晋朝になったわけです。だから完成したけれどそれを晴れがましく提出することはできなかった。それで彼は死んで行きました。ところが再び荀勗が政局で敗れて張華派が再び権力を握ったわけです。四世紀の初めです。それで陳寿の失われていた三国志を再び献上させて、それを西晋の正史に認定した、という有名な事件があります。

そういう事情で三国志を作ったけれど正式に序文をつけて晴れがましく公の場で天子に報告できなかった。だからこの序文を東夷伝の所にはめ込んだわけです。百パーセント同じか東夷伝らしく手直ししたかは解りませんが、本質的には東夷伝の枠を越えたものであるし、巻30に二つの序文があるなどと言うのは異例中の異例です。何かおかしいと思わない方がおかしいのです。今度気がついてみるとこれは全体の序文の性格を持っていました。しかもその内容は倭国の卑弥呼の問題が三国志のハイライトであることを宣言しているわけです。

## 短里の証明

それだけではありません。中身を見るといろんな内容が出ています。例えば前の訓読の中で「車軌の及ぶ所、未だ其の国俗殊方を知る有らざる者なり」とあります。ここで殊方という言葉があります。こういう言葉は辞書を引いてもありません。諸橋の大漢和にもどこの辞書にもありません。あるのは殊俗という言葉があります。国によって皆風俗が違うと言うことです。その一般的な言葉を元にして陳寿が新しく造語をしているわけです。（注 漢字源によれば、殊方とは故郷などと全く風土の異なった地方とあり、杜甫・九日の「殊方日落玄猿哭 殊方に日は落ちて玄猿哭す」が例として載っている。陳寿の造語を杜甫が使ったということか）

「方」と言うのは何かというと方法のことで、方法というのは現在のメソッドの意味ではなくて、中国に「周髀算経」などの天文算術の本が出ていますが、そこですでに、正方形で距離を表す言葉として使われているわけです。一般の図形は正方形ではないですから、これを含む正方形で示すことが方法です。いろいろ余りの部分はありますが、比較の問題としては正確にキャッチできる。現代のグラフと同じ考えで、それと同じ考え方が古代の中国で発見されて使われているわけです。方という言葉は、例えば、方何々里という、里数で表しています。

三国志の中に対海国方四百里、一大国方三百里、とか方法で書いてある。これは三国志が始まりではなく、中国では歴史書が、例えば漢書でも、「方法」で書かれていわけです。（以下古田武彦著「邪馬壹国の方法」53頁以下に詳しい）

有名な例を挙げますと、項羽が漢の四面楚歌の垓下を逃れて故郷の領地に引き揚げるときに、烏江に來ます。そこで渡しの船主が「江東雖小地方千里、衆數十万人、亦足王也」（中華書局版史記336頁）と言います。「だからあなたは再び故郷の呉越に帰って再起を期しなさい」と言われます。そうすると項羽は「わしはどんな顔をして父や年寄りに会うことができるだろうか。戦に敗れ多くの青年たちを殺した。ここで戦って死ぬ」。有名な名場面ですが、そこで誰でも知っている、司馬遷は「江東（中略）方千里」と書き、三国志では「江東方数千里」と書いてある。（注 原文は「割據江東地方數千里、兵精足用」＝中華書局版三国志呉書1261頁）。

と言うことは司馬遷に史書に使われている方何里と、私が三国志で使った方何里とは一対五、六の比率で里数が違うということ自分で宣言しているわけです。

三国志では、いわゆる里数を表すもう一つ大事な場所があります。それは、倭国は、会稽東冶の東に当たる、簡単に言うと会稽山の東に倭国があたると言っているわけです。倭人伝の方は帯方郡から女王国までが一万二千里です。洛陽から会稽山までの距離とほぼ等しい距離であると言っているわけです。会稽山は司馬遷の史記にも出てくる有名な山ですから、洛陽と会稽山の距離は当然よく知っているわけです。歴史的にもよく知られているし、あの当時魏は呉と戦っていたから、呉の距離を知らないで戦うということはありません。短里と長里を間違えていたら、六倍とすると三六倍の範囲で戦ったということになり、そんなことはあり得ないです。当然呉の面積は知っているわけです。洛陽から会稽までの距離も当然知っているわけです。その距離と、帯方郡から女王国までの距離は相対応していると言っている。この一事を見ても本文の中身が短里である事は間違いないです。

後漢書の范曄はここで大きなミスを犯して、これを東冶という県名に直してしまいました。東冶というのはたいていの人は知りません。そういう所を洛陽からの距離と比較しても意味がないし、仮に東冶だったとしても、今の長里では対応できるはずがないのです。

三国志の内部を、あれを長里だとがんばっている人がいますが、それは間違いで、やはり三国志の中は短里です。倭人伝と同じだということを示すのがこの大事な言葉です。三国志の里程と司馬遷の史記の漢代の里程は1対5ないし6の比率で違っている。方何里と言っても違っているということを序文でちゃんと示しているわけです。こういうことを今まで意識せず議論せずきたのがおかしいのです。

もう一つだけ今の序文の終わりの辺に「遂に諸国を周觀し、其の法俗を采り、小大區別、

各名號あり。得て詳紀するを得可し」とあります。詳は「詳しく」で、「紀」は本来糸で筋道をつけることで、日本書紀の紀と同じですが、中国から黒齒国裸国へ行く道筋を詳しく書くことができたと言う意味になります。東南に、二倍年暦の船行一年です。何気ない表現で全体をにらみつける、堂々たる序文です。

## 京都と闕と臺

次は京都と闕と臺という三つの関係の問題です。

臺という字は魏の代に魏臺という言葉があるように魏の天使のいるところを臺と呼んだ、ということを含めて繰り返して論じて来ました。

倭人伝の最後にも「因詣臺、献上男女生口三十人、(以下省略)」とあります。これに対して、魏の時代に闕という言葉も使っています。鮮卑伝に「至黄初五年、歩度根詣闕貢獻」というのがあります(歩度根はボスの名前)。また濊伝でも、「正始六年、樂浪太守劉茂、帶方太守弓遵、以領東濊屬句麗、興師伐之。不耐侯等舉邑降。其八年、詣闕朝貢」というのがあります。ここでは臺ではなくて闕を使っています。

さらに、倭人伝では「景初二年六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝獻、太守劉夏遣吏將送詣京都」とあります。京都というのと闕というのと臺というのと、どんな関係になっているのか、という問題です。

結論から言いますと臺というのは天子の住んでいる場所、宮殿そのものです。それに対して闕というのは宮殿の周りを城壁が取り囲んでいますが、その城壁の入り口が闕です。城壁で都ができているわけではなく、都はもっと広いわけです。それが京都です。東京都の中に宮城があり、そこにいろいろの門があります。それが闕です。東京都に入ったからと言って闕に入ったわけではありません。闕に入ったからと言って天子の住んでいる所に入ったわけではありません。天子の住んでいる場所と、闕と京都は全部別なのです。

最初は天子に詣らんことを求めたとありますが、京都しか行っていません。つまり京都の入り口から中に入れてくれないわけです。それは明帝が病気だったからです。景初二年の最後に急病を発して翌年死にます。一行は天子に会いたいのですが京都から中には入れてくれないわけです。ここからも「景初二年」でなければダメであることが解ります。景初三年なら新しい天子に代わっているわけですから、倭人伝を正確に読んでいない証拠です。

そのほかの場合は、京都に行ったけれど闕までしか行けてないと言うことです。今まで蛮族であったものが、いきなり臺まできたら包囲されて、天子に危害が及ぼされる可能性だってあります。だから、闕止まりで、そこに従者を待たして、ボスが何人か連れて天子の面謁をこうむるようなものでしょう。ですから、闕と臺とどちらでもよいものではなく、闕と書いてあるのが正しいわけです。

それに対して壹与が倭人伝の最後で臺に至ったということはすごいことです。つまり天子のすぐそばまで(臺に詣り)壹与の使いは行ったわけです。(注 岩波文庫では臺を洛陽の中央官庁としている)。壹与は二心なくて忠実ですから、天子の宮殿の下まで行ったわけです。あえて言うならば魏の及ばなかった交流が西晋とは行うことができたわけです。陳寿はそういう筆法で書いています。

## 柳田民俗学の限界

柳田国男の民俗学というのは有名で、独自の分野で非常に素晴らしい仕事をしたのですが、同時にそこには重大な欠陥が存在するという事です。2010年の10月の岡山大学での日本思想史学会で発表いたしました。質問と併せて30分という限られた時間でしたが、学会においてその事実を明らかにするという目的は十分に達せられたと思います。

柳田国男の民俗学は明治41、2年、1908、9年の頃に出発しています。それまでは彼は農政学の専門家であったわけです。一高東大を出た秀才ですが、毎年のように農政学の論文を発表していました。今読んでもしっかりした論文です。例えば土地の所有について国家がこれを全部所有する、というような、当時まだできていないソビエト連邦のような国のことを（注 ソ連は1917年10月革命で成立）、正面から論文に書くということはすごい勇気のいることです。

ところがその明治41、2年を境にしてぴたっと、彼が毎年出していた農政学の論文がストップして、それに代わって、我々のよく知っている民俗学の論文の時代に入って行くわけです。

その要因は有名な大逆事件です。1908年から9年にかけての事件ですが、簡単に言いますと、5月25日、信州の一人の青年が小さなカンカラの中で爆発物を実験した。それ自体は小さな出来事であったのに、それを察知した警察が、その事件を発端にして、これは、東京にいる有名は孝徳秋水の指図である（彼は高知の方に帰っていたようですが）、ということにして、関連の人を含めて一斉検挙しました。その翌年の1月には幸徳秋水その他首謀者という人たちが皆死刑を執行されました。これがいわゆる大逆事件と呼ばれるものです。

幸徳秋水が明治天皇の命を狙ってテロを行うなんて、これはでっち上げだな、と幸徳秋水の論文を新聞とか雑誌で愛読してきたインテリはみんなそう思ったわけですが、新聞紙上では幸徳秋水が明治天皇の命を狙った、というのを大々的に日本中に発表されて、どこでどう関係あるか分からないものまで、翌年の1月には死刑になりました。（26名起訴、24名死刑判決1月に12名処刑）。

柳田国男は大逆事件に関しては一切語っておりません。彼は兵庫県の貧しい家に生まれたというのですが、それが一高東大に行って、信州の上田の柳田家の養子になりました。奥さんのお父さんは大審院の判事でした。大審院の判事ということは大逆事件を裁いている側の中心です。ですから、柳田国男が大逆事件を知らなかった事はある得ない話です。彼が一切それに触れていないと言うことは、知らなかったから触れていないのではなく、知りすぎていたから触れていないのです。非常に進歩的な内容を持っていた農政学の論文がぴたっとストップしました。

もう一つ、明治43、4年頃から盛んになったのは国会に於ける南北朝正閏問題、つまり南朝と北朝は鎌倉時代の後日本にあったかなかったかという問題です。南北朝が並立していた、と言っただけで首になった有名な喜田貞吉などもその口です。（注 喜田は文部省で国定教科書の編纂にも従事したが、小学校の歴史教科書に南北朝期の北朝・南朝を並べて記述していたため、1911年、南朝を正統とする立場から非難され、休職処分となった＝南北朝正閏問題）。国会議員でも首を切られると言うことが3、4年続きました。

当然柳田国男はそれを知っていたわけで、だから一切その類のことには口を出さないことが無難だ、という判断に至ったものと思われるわけです。

その彼の立場は有名な彼の文章で語っているのですが、天皇家が天から降りてこの島に来られて、(これは本居宣長の言う古事記の立場ですが)、すでにこの島には国民(くにたみ)がいた。その庶民の生活を調べるのが私の民俗学である、という立場です。そういうスローガンのもとに彼は論文を展開して行ったわけです。

ところが各地には各地の歴史があります。しかし各地の歴史に触れると記紀に書かれていることと違うということで、峻烈な評価が下ることになります。そこで各地の歴史を一切カウントアウトにしました。

### 阿麻氏留神社の話

そのことを私が感じ始めたのはまず私が対馬へ行った時からです。阿麻氏留神社へ一人で行ったことがあります。その時氏子総代の方が言われるには、「私の所の神さん、アマテル大神が一番偉い神様です。神無月には出雲へいらっしゃるが、他の神様と違い待たなくてもよいように、一番最後にいらっしゃることになっています。また終わったら一番最初に帰ってこられる。他の神様は舟が出るのを待っている。ウチの神様は非常に偉い神様だから、真っ先に帰ってこられる。しかもその時期はこの島から出雲に行かれるのに一番行き帰りしやすい時期に当たっております」ということでした。

後から気がついたのですが、アマテル大神は偉い神様ですが、出雲へお伺いを立てに行く神様の中で一番偉い。本当に一番偉いのは出雲の神様です。ほかの神様があちこちから集まってくる。近畿には行く神様と行かない神様がいますが、そういう行く神様の中で一番偉い神様ということになります。アマテル大神は家来ナンバーワンということです。

戦争中、伊勢の皇大神宮というのは神々の中の神、最高の神であるということをつたえ込まれました。あの天照大神が、出雲の神様の家来、というのは大変なショックを受けました。

考えてみれば国譲りという有名な言葉があります。あれ以前に天照大神が出雲より上であつたら、譲るのではなく取り上げれば済む話です。これは本来の日本語で、後世の人がそのような言葉を作ったとは思えない。そうすると記紀の話の前提になっているのはアマテル大神の話ではないかと思えます。

### 大国主命の話

同じような例で、島根県の石見国の大国村に行った事があります。旧家に泊めてもらって、古い話を所望しました所、そこのおばあさんから大国主命について話を聞きました。

「あの方は賊に追われて逃げてこられたとき私の家でお匿いした方でございます」。

別の男の人を紹介して貰い、話を聞きますと、

「あの方には私どもは大変迷惑を致しました。あの方は女を取り込んでそれを元に自分の勢力を張るのが非常にうまい方で我々は大変迷惑をしたかたでございます」。「あその洞窟の所に住んでおられた。今は行かれない方が良いです」。「あの方はよそから来られた方です」。「どこからか解りません」。

記紀で聞いた話とえらく違います。決定的だったのは美保神社です。神社の前の由緒書

きに、

「天照大神の軍と事代主の軍が衝突して天照大神の軍が勝つことが明らかになった。その時大国主の子供の事代主が交渉して自分が全責任を負って、海に身を投じて自殺するから、その代償としてこの出雲の国民や将兵を一切罪にしないで欲しい、と言った。それで天照大神、建御雷之男神側がそれを承知して、そして海に身を投じてなくなられた」。これも記紀の話とは似ていても全然違います。戦時中教えられたことは、「事代主は模範生である。国を天照大神に献上された、すばらしい神様である」ということです。これは美保神社でする神事(青柴垣神事=例年4月7日、諸手船神事=例年12月3日)が本来の伝承で、記紀の方は、勝った方が手前味噌で「国土を献上された」ことにしている方が造作です。

古事記では海に「隠れましぬ」(岩波古典文学大系日本書紀上140頁)と書いてあります。勝った側が、自分たちが惨たらしい犠牲を強いたのではないのだという、美化して書いたのが記紀なのです。本来の現地伝承は現地に残っているものです。

このような話は、柳田国男の話には出て来ません。東野物語の佐々木鏡石のように、いろいろ現地にインテリがいたでしょうに、さっきの美保神社の話など、柳田国男が知らなかった可能性はまずないと見てよいと思います。ただ、それを書いたら、記紀がインチキくさくなるからです。お前は記紀を信用しないのか、本居宣長を信用しないのかとやられるから、彼はそういう地方の歴史伝承を一切カットして書いていないわけです。

### オシラサマと馬の流入

東野物語にはオシラサマというのが繰り返し出てきます。(注 東野物語69番など)。典型的な形では旦那が馬で奥さんが人間です。新郎が馬で新婦が人間という変なコンビですが、そういうのが典型で、東北地方各地で現在でも祀られているわけです。東野物語にも繰り返し出てくるわけです。

ところが私は青森県の「暮らしの中の信仰展」(郷土館展示)でオシラサマが展示されているところを見て、東北に馬が入って来たのはいつ頃か、学芸員に聞きました。

「それは室町時代、早くても鎌倉時代だと思います。三国志の倭人伝には牛馬なしとありますから、3世紀にはまとまっていなかった。それより後で九州東海と来て関東、東北に入るのは室町時代です。平安時代という話もありますが」という話です。

それに対して私が別の理解を持ったのは、東日流外三郡誌に馬が入って来た話が書かれているわけです。(注 東日流外三郡誌第一巻 津保化族伝話 北方新社版95頁以下、八幡書店版159頁以下)。大きく言って大陸から入って来たのはシベリア、黒竜江下流から樺太、北海道本州と入って来たのはアソベ(阿曾辺=阿曾部と書いているところもある)族という部族を通じてです。

アソベのソは神様を意味する一番古い言葉です。アは接頭語です。阿蘇山のアソもそうです。対馬の浅茅(アソ)湾、京都の舞鶴湾も明治維新までアソ湾と言っていました。木曾の御岳のソも同じで古い神様、そのアソベ族が日本列島に入ってきたのは旧石器時代の話です。

次に入って来たのが津保化族です。出たところは同じくシベリアの黒竜江の下流流域ですが、そこから彼等は東へ進み、アラスカを通り北アメリカに入ります、そして南下し、暑い灼熱の所に至り、その灼熱の地から引き返してきた。そして再びアラスカの南部に

来て、陸を渡らず、これは季節によるのでしょうか、大筏を何艘も作って、海流（親潮）に乗って海に出た、その結果下北半島に着いた。それに約三ヶ月近く掛かった、ということ普通の記事でも、現地の東北弁でも書かれたものがあります。

私は気象庁に行って、「アラスカの南部から海流に乗って出たらどこに着くか、どのくらい時間が掛かるか」を聞きました。

この時、勿論東日流外三郡誌の話は一切していないのですが、40分ぐらい待って、回答をいただきました。

「解りました。下北半島に着くと思います。三ヶ月近く掛かると思います」。

その時ぞっとしました。このとき東日流外三郡誌は偽物だと言うのはとんでもないという、確信を持ったわけですが、それとぴったり一致しました。6、7、8月頃に出ると、下北半島に着く可能性が大きいのです。

もう一つの問題は小型の馬をかなりの数乗せてやってきたと書かれています。ところが北アメリカに小型の馬がいなかったとされてきていました。田島芳郎さんの話ですと北アメリカにはいたが、それは旧石器の時代であって、縄文の前半期には北アメリカには小型の馬がいなかったと、いうことです。

ところがスミソニアン博物館に行きましたとき、偶然というものはあるもので、丁度出土したばかりの馬の骨が大量に展示してありました。日本の縄文期の地層から出た馬の骨であるということです。現物を並べたばかりで報告書は出ていなかったのですが、それから10ヶ月ぐらいしてメガースさんが立派な本を送ってくださったのを覚えています。それによると旧石器までしかなかったというのは古い情報であって、新しい情報では縄文に当たる時期に小型の馬が北アメリカにいたということです。

そうすると東日流外三郡誌が言っていることがリアリティをもって来るわけです。それならば馬が神様になるという話は分かります。今の五所川原の北の方に馬神山というのがあります。ここに小型の馬の骨を祀ったと書いてある。だからそこを発掘してみれば小型の馬が出てくるかもしれません。

さらに私が推論しておりますのは今のへんてこな姿というのは第二段階の姿ではないか。第一階段は、女が主人公で馬は従者、しかも、小型の馬だったのではないか。女神が小型の馬に乗ってやってくるという姿が本等の縄文時代ではないかと思います。縄文は女が中心の時代です。

ハバロスクの博物館で、土偶のようにした骨偶がたくさんあり、その年代が1万年前とか1万五千年前とか古いものです。日本の東北の土偶は有名ですが、そんなに古くない。せいぜい縄文の中期ぐらいです。それより遙かに古くシベリア、黒竜江下流に、文化があったわけです。間違いなく日本の土偶の先祖がこの骨偶であると思われます。骨偶が日本列島へ伝播して土器製作のノウハウのある日本列島へ来て、土偶に化けたと思います。私はそのとき確信を持ったわけです。その非常に早いルートが存在したことを、それ以来疑っていないのです。

その骨偶の中にみな女性のおっぱいが刻まれているわけです。女性中心の骨偶があって、それが土器の日本列島・火山列島へ来て土偶に化けている、というのが今の話のアソビ族です。

そういう所から見ますとオシラサマというのは本来女神が小型の馬に乗ってくるというのが本来の姿ではなかったか。柳田国男が書いているようにオシラサマに関連のいろ

んな神様が出てきますが、それらは古い可能性があるわけです。

これが私のオシラサマ論であって、柳田国男は一切それを書いていません。佐々木某という人は東野の出身だから今話を知らないはずはないのです。東日流外三郡誌に書いてある話は文献で読まなくてもみんな口伝で知っていた話ですから、佐々木氏も知っていたはずです。

「はず」というのをちょっと注釈しますと、東野物語の中には艶笑譚、つまりセックスにまつわる話が全くない。艶笑譚の話をしたら「ばかもん！そんな嫌らしい話をするな！」と怒鳴りつけられたそうです。同じように佐々木氏が東日流外三郡誌のような話をして柳田国男は黙れと言って、しかりつけたのではないかと思います。

彼は「聞いたことを百パーセント記録する、その価値評価は抜きにする」と言いながら、そうではなかったわけです。価値評価に合わないものは全てカットし、残りを記録しただけなのです。それが彼の本質で、柳田国男の大きな限界がそこにあります。

## 田村将軍

信州でも彼はよく講演をしています、その中に田村将軍の話について怒っている所があります。

田村将軍の話の前に、八面大王の話が必要ですが、結論から言えば八面大王は、九州王朝の残党みたいなもので、九州の八女の大君が信州にやってきて、あちらの高良玉垂宮をたくさん松本の方に作っているわけです。その八面大王を田村将軍が戦って倒した事になっている。松本の人にはみな知っているのに、柳田の民俗学には一切でない。しかも田村将軍というのを言っただけで怒られている。

これも一言申しますと坂上田村麻呂と一緒にだという説が江戸時代の松代藩で作った歴史書に出てきます。それで平安時代の話だという話が定説みたいになっている。

私の理解では九州王朝の終わり、7世紀の終わりの話なら解るが、平安時代にするとおかしいのです。それより何より京都で坂上田村麻呂の話はいっぱいあるのですが、信州へ行ったという話は全くありません。東北へ行ったという話があります。信州でそういう大王を征伐したなどという話は全くゼロです。それをみんな京都の人が書き忘れたということは考えられません。

田村将軍の田村は古田に当たる姓です。それに対して坂上田村麻呂は坂上が姓で田村麻呂は武彦に当たる名です。一方が姓で一方が名前の場合それを同一人物にする方がおかしいのです。そのレベルの松代の学者が藩主に命じられて編修したのが基本になっている。

私の深志高校の教え子に田村将軍の子孫がいて、先祖のことを書いています。それには田村将軍は八面大王を斬り殺した将軍である、と書いていますが、柳田は、田村将軍に触れたと言うことでえらく怒っているのです。それは柳田が知っていた証拠です。八面大王の伝承を無視して、穂高あたりの何々チとかに何々ミミなどの地名を説明できるはずがないのです。（注 八面大王については東京古田会ニュース102号から109号までに詳しい）

## ヨーロッパの民俗学

岡山大学の日本思想史学会で、柳田国男は、模範にしたヨーロッパの民俗学の共通の欠

陥を持っている、ということを最後に申しました。つまりヨーロッパには魔女裁判というのがあります。中世の終わりから近世にかけて、何千何万という魔女を殺しました。今日は何人焼き殺した、今日は何人焼き殺したという、ドイツ人はまじめですから全部そういう記録を作っています。

彼女たちは信仰と伝承を持っていました。その信仰と伝承がアウトとして、消されたのです。全部キリスト教からの話にすり替えました。しかしいかにすり替えてみてもキリスト教というのはせいぜいその時点の数百年前からです。日常生活は数百年前どころか、数千年数万年前からヨーロッパには人間が生活していたわけです。ヨーロッパの生活習慣のどれをとってもキリスト教淵源で説明できるはずがないのです。魔女の伝える伝承につなげなければ説明できるはずはないのです。それを全部消しちゃったわけです。ですから私はヨーロッパは民俗学の地獄だと思います。民俗学の滅び去った地帯である、と私は言ったわけです。

ですからヨーロッパの民俗学は模範にもお手本にもなり得ない。ところが柳田国男はそれをまねしたわけです。つまり日本の場合は明治以後の天皇家中心の皇国史観、しかも本居宣長風の、天から降りてきたという、あの歴史観を盾にとってそれ以外は全部受け付けられないやり方をする。ヨーロッパの場合はキリスト教一本槍で、ユダヤ教を例外として、後は全部受け付けられない体制を取ったわけです。だから民俗学不毛の地帯なのです。もし日本の研究者が研究する場合、ヨーロッパというのは、未開拓の有望な最大の天地であります。つまりヨーロッパ人の日常生活のどんな挨拶やどんなささやかな習慣も、全部キリスト教時代を突き抜けて魔女の時代につながるはずです。そういう目でもう一度ヨーロッパの歴史を見直したら、ヨーロッパ人が知っているヨーロッパとは全然違うヨーロッパが現れるのです。それはやっぱり我々がやらないと、ヨーロッパ人には無理だと思われま

## 磯

柳田国男でもう一つ追加しますと、磯という言葉について、彼はいろんなイソの呼び名を出しています。海岸に近いところ、遠いところ中間の所、いろんな呼び方が各地によってみな違っていることを丹念に集めてくれているわけです。それは良いのですが、そのイソがどういう歴史的背景に結びつくかは一切語っていません。彼の方法ではできないのです。

柳田の有名な「海上の道」（岩波文庫にもあり）というのがあります。愛知県の伊良湖岬に一夏行ったときに椰子の実が沖から流れてくるのを見た。そこで非常に感動して、学校友達の島崎藤村にそれを話した。そうすると島崎藤村が有名な「椰子の実」という歌を作った。島崎藤村だけでなく、柳田国男自身が海上の道という本を書いているように沖縄の方から海流に沿って上がってきた形で、自身の民俗学の歴史を明らかにしていたわけです。

ところが彼のやり方には非常な長所もあると同時に欠陥があるわけです。なぜかと言うと海流に乗って椰子の実と共に人間も上がってくるというのは間違いないが、しかし、人間という動物はいわゆる陸からも来るわけで、つまりシベリア樺太、北海道、本州と、勿論そこでは海流を横切ってはいますが、陸路を来るのです。椰子の実は海流を越えては流れないが、人間というサルは向こう側に陸地があるとすれば海流を突ききって渡り

たい性分を持っている、好奇心の強い動物です。

そういう海流を横切って渡る動物と、海流に乗って流れる椰子の実と比べて、海上を横切る要素を「海上の道」ではカットしています。のみならず親潮という寒流には椰子の実は流れないが、人間というサルはそれに沿って流れている。彼が椰子の実に感動したのはよいが、それ以外の要素を見落としていたわけです。黒潮と同様に親潮に乗って旧石器時代に南下して来たということは重要なわけです。

## 縄文農耕

私の歴史観になってくるのですが、稲作は柳田国男も非常に重要視したわけです、私は稲作の前の縄文農耕というものがあつたと思います。例えば芹。清らかな水の所に根をおいておけば季節が来ればいっぱい生えてくる。ドングリを取ってきて蒔いておく。そうして何年か経ったらドングリの林ができて、ドングリがたくさん採れるようなことを縄文人はすでに知っていたと思います。

その証拠は福井県若狭町に所在する鳥浜貝塚（とりはまかいづか）です。（会場では能登半島の真脇遺跡＝縄文時代の前期初頭〈約6000年前〉から晩期終末〈約2300年前〉まで、約4000年の間繁栄を続けた、他に例のない長期定住遺跡であることが判明している＝と説明されたが、後日鳥浜貝塚に訂正された）です。ここでは人間が植えなければ生えない性質の球根のようなものが出てきたわけです。これは海から流れ着いて自然発生的に育つことができない、人間が植えなければできないようなものが縄文遺跡・鳥浜貝塚から大量に出ているわけです。ということは縄文時代にそういうものを栽培していたことを物語ります。この場合もさっき言ったどングりとかいう類のものを栽培して取得するというノウハウができていたから、南方の人間が植えなければ生えないようなもの、例えばかんぴょうを植えたのだと思います。それなしにいきなりそれを植えたわけではないと思います。

稲作にしても稲が入って来て、稲を受け入れたというのは、それ以前に縄文農耕というノウハウがあつたから、稲を受け入れて稲作になったのだと、私はそう考えます。

注 鳥浜貝塚は福井県若狭町に所在する縄文時代草創期から前期にかけて（今から約12,000～5,000年前）の集落遺跡。保存良好な木製遺物等1376点が国の重要文化財に指定されている。若狭町の若狭三方縄文博物館に遺物が展示されている。

遺跡は若狭湾国定公園の三方五湖のなかの三方湖の南東の方向で町内をほぼ南北に流れる鱒川（はずがわ）とその支流高瀬川の合流地点一帯に広がっている。その規模は東西約100メートル、南北約60メートルの半月状と想定されている。当時は、椎山（しいやま）丘陵が西方から東方へ岬のように延びていて、三方湖はその丘陵の先端付近まで湾入していた。その丘陵南側斜面で三軒分の竪穴住居跡が検出され、集落があつたことが分かる。その湖畔に鳥浜人が居住していた。今の若狭地方の拠点集落であつたのではないかと考えられている。貝塚は地下3メートル（海拔0メートル）から7メートルの深いところに残っている。当時のゴミ捨て場は湖中であつたが、現在までに約3メートルの土が堆積している。投棄されたものは、貝殻、動物骨、木や種子、葉、土器、石器、骨角器、木製品、漆製品、繊維製品など多彩である。この他、木の実の貯蔵穴なども検出されている。放射性炭素年代測定法によると、

地下7メートルで今から約1、2000年前（縄文時代草創期）、約6メートルで約8、000年前（縄文時代早期）、約3メートル下で約5、500年前（縄文時代前期）であり、ムラは縄文時代前期の6、000年～5、500年前が最盛期であったことが分かった。（インターネット）

## イソ

今の話は縄文時代ですが、ところが、縄文時代の前の旧石器時代には縄文農耕がなかったわけです。そこで一体何があったかという、海岸はあったわけです。海岸には貝がいました。釣り針で魚も捕れました。旧石器の時代には沖合までは出られませんが、海岸の魚なら釣り針があったら釣れたわけです。貝とか魚はすごいタンパク源です。人間はドングリとかの植物性だけでは満足しない動物ですから、タンパク質源を大量に持っているのが海岸です、しかも海岸はさっきの縄文農耕や、稲作と違って、土地の方は人間の手でしつらえるわけです。海岸は人間がしつらえて貝を埋めているわけじゃありません。魚を集めているわけじゃありません。まさに神様が教えになった場所です。だからイソなのです。イは「神聖な」を意味するイです。ソは古い神です。神聖な神様がお作りになったのが海岸です。それは縄文の一つ前の旧石器の魅力ある場所です。

イソは大陸にはあまりありません。ところが日本列島はイソだらけです。だから彼等はイソを求めて南下してきた。この動きは日本の歴史を語る上に絶対に避けては通れない重要なテーマだと思います。イソを求めて来た人々が日本列島に住み着き、繁栄するに至った。そこへ、縄文農耕や稲作ができる基礎が築かれた。これが私の考える日本歴史の主要なる基本線です。

それを柳田国男はイソという言葉をあれだけ集めて、非常にご苦労で有り難いことなのですが、それを記紀以外をカットするという間違った方法に立っていなければ、彼はそれを見いだすことができた。民俗学が盛んな大学がありますが、どうも私の見たい目は柳田国男の民俗学をそのまま受け継いでいるように見えます。柳田国男や折口信夫の権威にすぎた民俗学では日本国民が不幸です。

## 大逆事件

次の問題は、先に話した大逆事件についてですが、各人がいろんな反応を示しています。まず永井荷風ですが、彼には「花火」という名文があり、この中でよく引用されるのは資料（省略）の文章です。

ところが全体を読んでみるとこれは大変な内容なのです。要点を言いますとここで花火というのはお祭りの時に上げる花火です。ところがお祭りには二種類あって、江戸時代のお祭りは庶民の中に発生したお祭りだと彼は位置づけています。それに対して明治以後始まった新しいお祭りがあります。それはいわゆる政治家が、自分たちの宣伝のために作ったお祭りです。本文の中にも「新しい形式の祭りには屢々政治的策略が潜んでいる」と書いています。国民のためのお祭りではなく、政府か自分の意図を国民に押しつける、洗脳するための手段としてのお祭りであるということです。その筆頭が、「明治二十三年の二月に憲法発布の祝賀祭があった。おそらくこれがわたしの記憶する社会的祭日の最初のものであろう」と言っています。政府が自分の意図をPRするための手段としての最初のお祭りであろうと、と言います。これは何かと言うと、結局明治のお祭

りというのは政治家の宣伝の、国民ロボットを作るための宣伝のお祭りです。その宣伝のお祭りの筆頭に立つのが明治憲法制定のお祭りです。

明治憲法とは何か。「天皇は神聖にして犯すべからず」です。その注釈に「大君は神にしませば天雲の雷の上に廬せしかも」となるわけです。それを国民に押しつけるためのお祭りで、それが始まりだと言うのです。つまり大逆事件の原因は明治憲法、天皇の神聖化する立場に始まっているのです。永井荷風はそう言っているわけです。そのようなことをまともに言っていたら、彼は完全にちょんです。しかしよく読めば今言ったようなことを言っているわけです。永井荷風と言う人は食わせ物どころではない、本当の、彼なりの抵抗を試みているのです。繰り返し読んで欲しいと思います。

## 夏目漱石

ところでまた思いがけない発見がありました。夏目漱石は非常に敏感な人なのです。「こころ」については「なかった」第6号に書きましたが、小説の中に見事に組み入れた作家です。彼は大逆事件を何も思わなかった「はずはない」のじゃないか。そうすると倫敦塔とか夢十夜とか言うのがあったが、あれは大逆事件とどういう関係になるだろうか、と思って古田史学の水野さんに電話して年代を調べて貰いました。

信州でカンカラで爆発させたというのが5月25日です。それに対して漱石が夢十夜というのを書き始めたのが7月から8月にかけてで、朝日新聞にそれを載せ始めました。そこに1ヶ月以上2ヶ月近い間があるのですが、おそらく彼はその情報を知って、そこで夢十夜を書いた。夢十夜と言うのは明治41年(1908)7月25日から8月5日まで大阪朝日に連載しました。

夢十夜の第一夜のところで「こんな夢を見た、腕組みをして枕元に座っていると仰向けに寝た女が静かな声でもう死にますと言う」。それで何を言いたいのかと思ったら、しばらくして、「女がまた言った、死んだら埋めてください、大きな真珠貝で穴を掘って、そしたら天から落ちてくる星を置いて墓印にしてください」。またしばらくして、女は一段声を張り上げて「百年待っていてください」と思い切った声で言った、「百年わたしの墓のそばに座って待っていてください。きっと会いに来ますから」。その第一夜の最後は暁の星がたった一つ瞬いていた。百年はもうきていたんだなあ、とこの時初めて気がついた」。

これから先はちょっと怖いような感じですが、去年が夢十夜を書いてから100年目です。今年が101年目です。百年経ったら解った。彼は大逆事件をバックにしてこの夢物語を書いているわけです。非常に気持ち悪い話を書いているのですが、それはしかし、やがて真相はばれる時が来るということを彼は予言している。その時はまだ幸徳秋水は死刑にはなっていません。それを彼はこういう作品を作っている。こういうのは滅びるという三四郎につながっている。こんなインチキな世はやがて滅びると言う話につながって行きます。漱石が反応をしないはずはないと思っていましたが、思った通りでした。この夢十夜が大逆事件がバックにできているというのは、私が知っている範囲では聞いたことがない。

彼は小説で自分の言いたいことを言うとは言いますが、大逆事件ではうっかりしたことは言えません。夢の話だということにすれば向こうは捕まえに来れない。百年経って解るので。

## 津軽三味線

先日津軽三味線というのを聞きながらふと思ったのですが、津軽三味線というのは周辺のどこと共通性があるのかなと青森県教育委員会に電話して聞いてみました。しかし要するに周辺に同類がないという感じで伝わってきました。そこで私がふと思いつきましたのは、博多から北九州の祇園太鼓で、例の無法松の一生で無法松が軍人の未亡人に対する恋心を抑えて乱れ打ちをします。あれと、津軽三味線が何となく似た感じがします。だんだんと最初は激しく耳に痛いような感じがします。聞いているうちにだんだん耳が慣れてきて何時までも聞きたいような感じがします。そういう点は両者共通している。勿論楽器としては一方は三味線で一方は太鼓で、全然違うのですが、どうも性質は似ているのではないかと。

それに対して、お祭りになると神社からピーピーヒョロロピーヒョロロと笛の音が聞こえてきます。あれを聞くと理屈ぬきになんとなく、楽しいというか恋しいというか、何とも言えない感じが出てくるのですが、津軽三味線や祇園太鼓とは大変違います。いずれも神様の前でやるのですが系列が違うのではないかと。全くのあて推量ですが、ピーヒョロロというのはもっと北の方に音楽の系列があったのではないかと。それに対して、これも全くでたらめ見当ですが、要するに北九州から津軽へとんだ、例の東日流外三郡誌が言っていることです。いわゆる安日彦長髓彦が筑紫にいた。ところがそこへ筑紫の日向の賊、大泥棒、瓊々藝尊が侵入してきてそれに追われて津軽に亡命した。というのが東日流外三郡誌のメインテーマです。その時稲作を持って亡命したと言うのですが、そのルートの祇園太鼓の雄々しさと津軽三味線の雄々しさとどこか共通しているのではないかと。

推量が重なりますが、江南、会稽山、あちらの方に雄雄しい音楽があるのではないかと。太鼓だかなんだか知りませんが、調べてみると面白いのではないのでしょうか。

もう一つ宮中でやっている雅楽というのがあります。あれは私の耳には受け付けられません。何かうるさいだけで懐かしいとも思わないし、聞いていても、もっと聞きたいとも思いません。しかし、あれを聞いて懐かしく感じる人もどこかにいるのではないかと。中国人でしょうか、ペルシャ人でしょうか、あちらに同類の音楽があつてその人が日本の雅楽を聞いたら何となく懐かしくなるのではないかと。思います。

要するに私が言いたいのは音楽は国境を越える力がある。国境というのは万世多系論のような、政治変動が次々起こります。しかし音楽はそういう政治変動を越えて庶民に伝わって行く性質を持っていると思います。

## 水戸光圀

(以下当会ニュース129号5頁以下と同趣旨のため省略)

## 尖閣諸島

次は新聞紙上で身近な問題でありまして、尖閣諸島というのが問題になっております。あれが何語であるか、ということです。尖閣と中国語のように見えますが、どうもおかしい。最近ある学者というか、評論家が、尖閣が日本文化の中に入ったのはせいぜい1000年か2000年以内のことだ、と言うことを書いている人がありまして、本当にそう

かなと思って新たに調べてみたわけですが、結論からいいますとあれは日本語です。あれは当て字の漢字に欺されてはいけません。発音が言語ですから。センのンは「の」です。黒曜石の伊万里ではカラスンマクラといいます。カラスは鳥のことで黒、マクラは真実の真にクラは高倉のクラで、神聖な場所。ところが間のんは所有格の「ノ」だと現地の教育委員会の方がおっしゃっていました。その考え方を採用しますと、センカクはセのカク、こう言っているのではないかと考えました。セは言うまでもない瀬です。カは河のカ、神聖な水のことをカと言います。問題はクです。これはチクシ、ツクシとか言う語幹の上に来るものですが、この場合「不可思議なる」と言う意味に使われている。語末に来るクは何か。割と珍しいが、あります。高知県の縄文遺跡で有名になったところで居徳遺跡というのがあります。縄文人が戦争していた証拠ではないかということで大々的に報道されましたのでご記憶の方もいらっしゃるでしょう。イトクです。イはさっきの「神聖な」のイです。トは神社の戸口のトです。最後にクが来ます。最後にクがくるのは非常に古い、形式です。後に飾り文句として語頭に変わって行くわけですが、だから縄文の早い段階です。

奈良県にもイトクの森というのがありまして、懿徳天皇の名前とだぶっているのが不思議な気がしていたのですが、(注 イトクの森古墳は懿徳天皇または皇后陵と云われていた)、イトクという地名の方が先で縄文です。

例を挙げればいくらでも出てくるのですが、縄文時代の早い時期の姿が、クで語末をくくるやり方です。それで見ますとセンカクは瀬の神聖な水の出る場所と言う意味の縄文前期の日本語になります。

私も本当にそうかと思って、沖縄の石垣市の方に問い合わせたわけですが、出てきた女の方は、私が意図を話したら一生懸命調べてくださって、非常によく分かりました。のみならず、関連の本まで教えてくださって、三冊注文して早速持って来ていますが、ポイントは何かと言うと「あの尖閣列島に水が出ますか」と聞いたわけですが。私はあんなところに水が出るとは全く知りませんでした。女の方が調べてくれて、「出ます」と言うことでした。三冊の本の中の二冊に水が出るところが載っています、ということでした。一つは池のように溜まっています。もう一つは地下から湧いてくるところがちゃんと写っているということでした。それで私は決まりだと思いました。

尖閣諸島の中に水が出るところがある。漁民に取ってはこんなに有り難いことはないわけですが。瀬に水が出る場所があるのです。私の元素論で説いた意味と完全に一致しました。

まずこれは間違いない。さらにそれを裏付けしますと、あれを中国側が作ったとしますと、「とがった楼閣」となりますが、あの島にはそのような形のところはありません。古いところで閣を切りたった崖という意味で史記に出てきます。史記のころに名前をつけなければつけれないことはない。しかし司馬遷の頃はそんな場所は完全に認識の外です。会稽山がやっこさです。史記の頃に島の名前をつけていた可能性はまずゼロです。楼閣の意味としては杜甫の詩に出てきます。それ以後楼閣の意味で閣を使っています。その段階で作ったはずありません。あそこには楼閣などありませんから。従って中国側が作ったという考えは成り立たない。それに対して日本側は日本語として、水が出る島、これに理屈を言う方がおかしいのです。琉球の一部分です。

ところで琉球は中国ではありません。中国が何千人と捕虜にして帰ったというのが隋書

の倭国伝の直前に書いてあります。彼等は完全に蛮族として朝貢を要求して、どれを断った理由だけで鎮州を使わして捕虜にして帰りました（中華書局版1825頁）。完全に中国に取っては他国なのです。その琉球の一部ですから中国側がそこだけ名前をつけるはずもない。

もう一つ付け足しますと琉球というのは何語がと言いますと、沖縄は日本語だが、琉球は中国語だと思っていたら大間違いです。信州で有名なアキュウ（阿久遺跡、温泉）があります。おおさかではジュウソウ（十三）という変なのがあります。これもジュースーという日本音で、複合したものが日本語になっています。ですから今の場合でも沖縄も日本語、十三も日本語、阿久遺跡などは北から来た感じがしますが、沖縄も琉球も日本語です。漢字で書いてあるから中国語だと思うのは思い違いに過ぎないのです。その琉球国の一部が先のセンカクですから、日本語で当たり前です。しかも早い時期の縄文語です。

とにかくセンカクは縄文、前期の早い時期の縄文の日本語だということです。

### 小路田論文

小路田さんという方がおられて、日本思想史学会の雑誌に載せられた論文がありました。これに私は非常にショックを受けました。何にショックを受けたかという、この方は奈良女子大の教授ですが、自分は社会経済史の出身である。ところが最近日本思想史の方の様相を見ていると意外なことに、日本思想史の人たちはマルキシズムの考え方から全然出ていない、と言うことに気がついて驚いた。何かと言うとマルキシズムの方では人間社会の基本は経済活動である、それが下部構造でその上に上部構造として、政治とか思想などが乗っかっている。これがマルキシズムの基本的な考え方です。

マルキシズムは「さよならしたよ」と、言う人は多いわけです。ところが、さよならしておきながら、その考え方は下部構造と上部構造を分け、経済とか物質関係が下部構造、そして政治とか思想とかの分野は上部構造であるというマルキシズムの基本的な考え方と同じです。皆その考え方を基礎に、日本思想史の論文も書かれている。これは、小路田さんの弁では、実は思想の方が下部構造である。経済関係とか社会関係は上部構造である。考えてみればその通りです。だって、ああいう考えを思想として提出したのはマルクスです。それから人々はあれでものを考える癖がついた。マルキシズムというイデオロギーの問題は昨日の問題で古くなったと言いながら、ものの考え方はマルキシズムの考え方をそのまま続けていると、こういうわけです。

要するに思想が基本だ。どういう思想に立つかという根本問題である。そこから先に社会科学とか、その他はついて行く、ということを書いているわけです。

私は、マルクスは思想家としては尊敬しているのですが、そのマルクスが一番の欠点は宗教批判です。彼が十代の若いとき書いた有名な論文がありまして、それは神が人間を作ったのではなくて、人間が神を作った。それが宗教批判の根本である。勿論これはマルクスの独創ではなくて、哲学者フォイエルバッハの言葉を受け継いで書いています。マルクスはその後宗教論をやっていないのです。それで彼の宗教論は終わりでした。

しかし実は私の目から見るとこれは宗教批判の出発点です。宗教というもの、神様と言うものは人間が作り上げたということは当たり前のことです。問題はその次にあって、どんな人間がどんな神様を作ったか、端的に言うと、下らぬ人間が神を作ると、くだら

ない神になります。中間の迷いに満ちた人間が神を作れば、迷いに満ちた神様になります、原爆がいいか悪いか決めかねて、ばたばたしているような神しか作れない。すばらしい人間が神を作ればすばらしい神ができる。当たり前のことです。だから人間の歴史の中でそういう宗教が実際に実現したところを先入観なしに実証的に調べて、そこに現れた神様がどんな神様かということを検証していくべきだと、こういう話にならざるを得ないのです。

親鸞は90才で死にましたが最晩年の84才の時の彼はこう書いています、阿弥陀仏は道具である、大自然を考えるための道具である、と。それも当たり前の話です。あまり当たり前すぎて教信証では親鸞はそこまで露骨に書けなかった。いかにも死ぬ間際になって、このことを書かないと死ねないという感じで書いています。

要は人間が神様を作ったのは当たり前過ぎる話で、今まで人間が作った神様が、どのレベルの神様か、征服した後征服したものを奴隷にするという、卑しい行為を美化するような、くだらない神様か、そうでないか、を検査すべきなのです。

あるいは神の名において人間がすばらしい意思を示しているかどうか、当然その原水爆などの使用は認めないような、そういう当たり前の神様がまだ人類にはできないようです。そういう神様がぜひできなければならない。だから宗教批判は終わったと言ってあぐらをかいていると中国やソ連のような宗教問題については実に低級な、レベルの低い宗教観しか持たない国ができあがってしまいます。それはいずれ壊れて行きます。そういう意味で小路田論文には非常に感謝しています。

## 龍馬伝から

先日NHKで龍馬伝を見ていて非常に感銘を受けました。特に、例の「いろは丸」というのは海援隊の坂本龍馬たちが作った船ですが、それに対して紀州の、何倍もの大きな船が、広島県の沖合で衝突したわけです。これは当時の慣習から言えば、紀州は御三家の一つだからそんなものに対して文句など言えるはずがない。またいわゆる公方という幕府に願い出て裁定して貰っても、紀州が勝つに決まっているわけです。

ところがそれに対して坂本龍馬は敢然と反旗を翻したわけです。そこで使ったのは何かと言うと国際公法という当時日本語訳されたばかりの本を持ってきて、見せたわけです。これが国際的な、船が衝突したときのルールであると。どっちが当たったか、決まっているわけです。これによると紀州船には見張りがいなかった。紀州船の方に落ち度があるのは明かである。だから紀州の方が賠償金を払うべきである、と言うことを理路整然とやったわけです。彼の勉強の成果が出たわけです。これに対して紀州藩の家老の方は、そんなものを誰が保証するのか、幕府に採決して貰う以外に方法はないじゃないか、と。そうすると坂本龍馬が準備をしていて、長崎の英国の領事を連れてきて、彼にぶって貰うわけです。海の衝突というものは海を越えて行われている。それに対して我々先進国は国際公法のやり方で解決しているのだ。ということを英語でしゃべって貰って通訳に訳して貰うわけです。だからこれに従えば日本国も先進国の一員と見られるようになるし、これに従わなければ野蛮国として全世界の笑いものになる。それは紀州藩が笑いものになるだけでなく、幕府が笑いものになる。幕府が笑いものになるだけでなく朝廷も笑いものになる。それでよいかと言って迫るわけです。それで結局紀州藩が折れて、賠償金を全額支払った。これは見事な坂本龍馬の活躍の場でした。

## 必要な国際新公法

これを見て思いましたのは、現代の世界では国際の新公法ができていない。つまり国際的な新しいルールができていれば、尖閣諸島の問題でもすぐこうだと言えるわけです。原水爆の問題だってルールができていれば、言えるわけです。しかし今ある国連などというものはインチキきわまりないので、戦争に勝った方が、自分たちは原水爆を持ってよく、負けた方は持つてはいけない、とするわけです。それでインドとかパキスタンは例外としたりして、何もルールになっていないわけです。だから北朝鮮に対しても、もたもたして、なすべきことをしてないです。かと思うと、イラクに間違いで攻撃し、大統領を殺して、問題の核兵器はなかったという、全く見ちゃおれないのが現在なのです。

こういう状態を続けていけばやっぱり地球は破滅します。ということは国際の新公法を負けた我々が作らなければならない。勝った連中に作らせたのではダメなわけです。手前勝手をやるだけです。アメリカはそういう形で原子爆弾投下を美化しているし、中国は、美化しているのが間違いであると言えないわけです。正しいことを言えずにおたおたして、中国は同じ仲間で、自国の利益になることは黙っているわけです。そういう連中に新しい国際公法は作れない。原爆を落とされた、負けた日本が唯一国際公法を作る資格があるわけです。だから私は提案するのですが、政府はそういう国際公法を制定するための研究所を作る。世界から集まる優秀な人材に高給を払っても知れています、そこで国際の新公法を作ってそれに基づいてその年に起きた、国際事件で、この国家がやったことは違反だ、この国家がやったのはこちらが正しい、いう判定をする。勿論これは判定されたからといって知らん顔するかも知れない。現在の中国みたいに、囚人になっている人が平和賞を貰っておたおたしている。反発しているが、反発の中に彼等の弱さが、世界から悪く見られている弱さが、回復できずにいるわけです。世界で起こった事件に対して、判断を出して行ったら、3年、5年、10年と経つうちに新しい国際公法になって行く、それを作る資格があるのは負けた日本、原水爆を持たない日本だけである、というのが私の考えです。坂本龍馬の夢を繋ぐものである。という風に私は考えます。(本件当会ニュース135号に要旨)

## 思想四策

最後に八王子の思想四策です。まず第一には造史、歴史を作ることです。国家の私利私欲でなく本当の歴史を作る。この点中国もアメリカもみんな自分勝手な歴史を作っています。よく言う例を挙げますと、バイブルでは、神々が宇宙を作ったのではなくて、英語訳では神という単数に書き直している。他の言葉を調べてみたら全部書き直して、偽りの文にしている。これは本来の文が正しいわけです。なぜかと言うと、当然、この宇宙は誰が作ったかという問いかけは多神教の時代にも当然あったわけです。おそらく、男女の神々がこの宇宙を作り賜うたという話がずっと古い多神教の段階で出ていたわけです。それをバックに書き上げたわけです。その中で大自然を作ったり人間を作ったり、神々を作ったりした中で、エホバという神が生まれた。それがすばらしい神であった。要するに旧約はエホバの宣伝です。その宣伝の序はエホバというすばらしい神がいかにしてお生まれになったかという、エホバ誕生譚です。ですからそれは非常に筋

が通っている。それをキリスト教の世界で、キリスト教徒以外は全部魔女裁判で殺してしまっていて、ユダヤ教以外は他の宗教なしにしたから、そうすると今度は図に乗って、原文を書き直している。神々を神という単数に直している。それで神というのはエホバである。エホバの神がこの宇宙を全部お作りになったという、大嘘のバイブルを作り上げた。

もう一つ言えばいわゆるバイブルの中で初めは980才970才のような人がたくさんいます。(以下当会ニュース133号18頁と同旨であるため省略)

そういう偽の歴史はアウトです。やっぱり本当の正しい歴史を作らないとダメです。皆国家や宗派が自分に都合のよい歴史を作って、宗派ロボットや国家ロボットを大量生産してきているから、地球上で戦争が絶えないわけです。だからその戦争を絶やすには偽りの歴史をやめさせる、そこからやはり入るべきだと思います。我々は負けたから、勝った方は軍部が威張ったりしてなかなか学者が言っても言うことを聞いてくれない。我々は負けたから、本当のことが通る地球上まれな一角にいるわけです。これが我々の歴史を造る。造史です。

それとさっき言った造神、神を造ることです。人間の奴隷作りを美化するような神はアウトです。原水爆が良いか悪いかも、はっきり言えないような神様もアウトです。そしてやはり本来の、生んだ人間の良心を反映するような神様らしい神様を造る。それが造神という内容です。

以上を纏めて言えば、造思想。小路田氏が言うように、思想が根本です。人類のための思想を造らなければ人類は滅びます。今のような国家や宗教に勝手気ままにさせていると地球は破滅します。破滅しないためには、下部構造として新しい思想を我々は造るべきなのです。それからその上に立っていわゆる法を造る。造法です。今のようなインチキの国連のようなものではなくて本当の人類の法を造る。時間が掛かっても屈せず、いかに勝った方がわめいても相手にせず、相手にせずと言うのは、話はするが、それに屈せずに人類の面目をかけて、人類の未来のために、我々が新しい法を作ることに集中する。

この前提の元は、「我々はできるのだ」ということです。私は今神様からの挑戦を受けている。神様が原水爆など作れる装置を設定している、悪く考えれば神様が犯人だとも言えるのですが、単なる犯人ではなく、神様は、そういうことをやって、どうだ、俺が作った人間がこれを乗り越えることができるか、腕前を見せろ、と我々に迫っているのだと思います。それで我々は、神に対して、「大丈夫です。私は、偽の神々に欺されることはしない、言うことを言わなければいけない」とはっきり神に対して言う、まさにいい時代だと思います。いい場所に私たちはいるのだと思います。

## **被差別部落の問題**

ここで、被差別部落の問題を取り上げて明確にそのテーマの持つ意味を申し上げておかなければならないと思います。

大学で日本の歴史を学んでも被差別部落のことが全然明らかにならない。これはおかしいわけで、そういう被差別の問題は、倭人伝にも大人と下戸という形で存在する。縄文でもおそらく存在すると思っているのですが、以後ずっと21世紀まで続いているわけです。勿論名前や制度のあり方は変わってきているでしょうが、本質的に人間を差別す

るという体制は変わっていないと思われるわけです。

その私の認識が正しければ、歴史をやればそれが分からなければならないはずで、歴史をやってもそれが全く解らないような歴史では本当の歴史ではないわけです。勿論これについては、「同和教育で、すでに聞いた。つまり江戸時代の士農工商穢多非人というのがあった。しかし明治以後、撤廃された。それは江戸時代を遡ってもせいぜい鎌倉とか、その近辺までで、それ以前はない」という風に聞かされて来たわけです。それで現在は被差別問題はなくなったと言う人がいるわけです。とんでもないことだと思います。(当会ニュース130号8頁以下と同趣旨)

この被差別部落問題というのは、歴史に深い関わりを持って存在しています。それは記紀の、特に古事記の最後にその点が書かれています。上巻の神代の巻の最後にあるわけです。海幸山幸の話で、結局兄の方が負けた、そして弟の方に誓って言ったわけです。「僕は今より以後は、汝命の晝夜の守護人と爲りて仕へ奉らむ」(岩波古典文学大系 古事記143頁)

それ以来現在まで、兄の方がいろいろな芸能の技なんかやって昼も夜も天皇にお仕えすることになっている、という一節が古事記の上巻の最後に出でてくるわけです。神代の巻が終わるところで何で長ったらしく、兄をめぐる鹽盈珠の話が書いてあるのだろう、と読んでいてバランスから言っても、ちょっと不思議に思われた方がいらっしゃったが、その不思議に思われることが大事なのです。何故かと言えばこれから始まる中巻、下巻はこれをもとに読んで下さいというメッセージです。

それはどういうメッセージかというと、中巻、下巻は天皇のことが続きます。最後に天皇陵のことが毎巻出てきます。それはこの立場で書かれたものです。つまり天皇及び天皇陵をめぐる、奴隷のように昼も夜もお仕えする。人々が天皇陵の前を取り巻いている、と。この事実はこれ(上巻の最後の話)から来ているのだ、と言っているわけです。だから、被差別部落の歴史を語る時にこれを抜きに語るのは全くナンセンスです。しかもそれは単なるお話ではない。その証拠にはちゃんと日本列島の大部分に被差別部落が現存しているわけです。しかも近畿ではそれが天皇陵の廻りに固まっているわけです。それを津田左右吉のように、記紀は造作だという言葉で被差別部落が消滅するわけではないのです。いかに津田左右吉が造作だと叫んでみても、被差別部落は実在するし、生まれたときから、何の道理もなく、差別されている人がいるという事実は変えられない。日本の大学や高校、中学の歴史はそれについて何にも説明をしないで来ました。

ですから私はこの被差別部落の歴史というのは、日本の歴史の中核に存在する、と考えています。天皇が中核に存在するという事は誰でも知っています。天皇が中核にいて、その対をなす被差別部落が中核をなさないということはナンセンスです。こちらがなく、天皇だけが一人歩きしているような歴史を、明治以後の皆さんは記憶ロボットで記憶されてきました。歴史全体が大きな虚構の上でできているのです。

このことの裏付けに私が使ったのは高句麗好太王碑です。(以下当会ニュース130号8、9頁と同旨であるため省略)。高句麗好太王碑のメインテーマは守墓人、墓を守るということであるのに、ほとんどクローズアップされずに現在に至っています。むしろ見て見ないふりをしているだけで、事実は石に刻まれて現在に残っているわけです。この碑は、征服したら被征服民、優秀な元の支配者を奴隷化して墓守に使って、その王陵の周辺に配置した、ということを書いているわけです。

これは4世紀の終わりから5世紀の終わりにできた、高句麗の王陵の話ですが、それでは、そういうことやったのは高句麗の王陵だけで、それよりさらに巨大な天皇陵の場合は作りっぱなしで、何もせずに来たのかというと、そんな事はありません。王陵というものは絶えず手入れをしなければ荒れてしまいます。それを手入れし、奉仕する人を作っていかなければ天皇陵は残らないわけです。だから、そういう人を作ったと古事記にはっきり書いてある。これだけ言ったら解るでしょうと書いてあるのを、津田左右吉も全然問題にしなかった。現代の日本史の学者も誰も問題にしていない。よくこれで日本の歴史と言えたもんだと、思うわけでありませぬ。

## ロマ

これは日本だけの問題ではありません。実はヨーロッパが同じである、ということをお私比較最近確認して驚いたわけだ。何に驚いたかと申しますと、2010年10月20日付け毎日新聞の夕刊記事ですが、ヨーロッパにおけるジプシー、これをロマと呼んでいますが、その女の人がルーマニアにいて、男性と会って、恋をした。その女性はお私ロマですと言ったわけだ。男性側は私にはそんな事は全く関係ありませんと、言い切ってくれたので非常に喜んだわけだ、それでクリスマスの時男性の両親に会いました。そうするとどうも両親の様子がおかしい、白々しいわけだ。あとで男性に聞いたら嫌な予感が的中した。両親がロマの女と結婚することは許せない、もしそうするならば親子の縁を切るといわれたので、僕は君と結婚することはできないと言われた、ということが書いてあります。

これを見れば日本人なら誰でも知っているはずだ。日本の被差別部落そっくりだ。元高知県知事の橋本さんが、元はNHKの記者だったと思いますが、高知に行ったとき女性が今と同じような理由で断られて自殺した、という事件を取材して、これはいけないというので政治の世界に入って行かれた、とご本人が書いておられるのを読んだことがありますけれど、自殺した周辺の人はまだ生きています。全く最近のことで、それが日本で行われているのです。たまたま高知で起きた問題で、他は違いますが言えないのです。

この被差別問題というのは日本のお問題でありながら、日本だけの問題ではなく、世界の問題であり、ヨーロッパが抱えている問題だ。しかもそれが、別の記事で、フランスが、ロマを自分のフランス領においておけないと言ってルーマニアに大量に送り返した。これは、EUの中は自由に行き来できるわけで、EUの規約違反だ。こういうことをしてはならないのにフランスは遠慮なくやったわけだ。他の国が本来それはEU規約違反だと言わなければならないところ、みんな言わない、みんな同じような問題を抱えているわけだ。結局もやもやとして、追い出しを承認したという記事になっています。フランスの人権宣言などというのはインチキだ。インチキと言えはきつすぎるかも知れませんが我々は、フランス革命などいろいろ勉強して、フランスはすごいと思ってきました。明治以後そう覚えさせられてきました。

しかし今のように人種差別が厳然と続いているのがヨーロッパだ。人権宣言は上滑りで、いい格好をした宣言に過ぎなかった。明治以後我々はそのように見てこなかったけれども、これは観察が甘かったのです。同じことはアメリカの独立宣言でも言えます。人間は皆平等だと謳っていますが、それを謳ったワシントンは奴隷を持っていたことは

有名です。ということはあの宣言を発表したときに、人間は平等だから自分のところに奴隷をおいてはいけない、などとはワシントンは一切思わなかった。ちゃんと奴隷制度の上に乗っかって家庭生活を行いながら、あの独立宣言を書きました。

あれは英国本国に対するアメリカ植民地の独立であって、文字通りの人権宣言ではなかった。にもかかわらず人権宣言と言っています。

今黒人の大統領が出たからそれは解消したかと言うと、とんでもない。あれも上の世界で、彼が引退したら、と言うより、引退する前から、黒人社会は厳然とアメリカ社会を支えているわけです。

独立宣言はすばらしい。また、リンカーンに与えた影響はすばらしいのですが、にもかかわらず、あの独立宣言がうわべの独立宣言であったということを我々は見ずに来ていたわけです。

### **天は人の上に人を造らず**

日本の場合、今の学問のすすめに福沢諭吉が、引用した「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉は短くて完璧です。そう言うおいて被差別部落はそのままでと言うのは、全く意味をなさない。第二項以下の福沢諭吉の解説は全く意味をなさない解説になるわけです。しかも最初の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」のメッセージは、それが生まれたのは東日流外三郡誌、そこで繰り返し語られている。東北は被差別部落のない社会である。福島などには、よそから連れてきた被差別民が例外的にいますが、全体としては被差別部落のない社会です。

私には非常な鮮明な記録が残っているのですが、同和教育の第一回大会が京都で行われました。その時私も寮に、他の教師と私を含めて3人泊めてもらいました。ところが一人が山形から来た教師で「自分には悩みがある」と言います。「何ですか」。「私のところには被差別部落がありません。しかし被差別部落に協力しなければいけないと思って一生懸命しゃべるんですが、生徒が全然聞いてくれない。自分の実感にないから。それが私の悩みです」。「それは一番いいじゃないですか」。「そうじゃないんです。もし彼等が、山形県で就職し山形県で死ぬのならそれで別段かまわない。しかし彼等は大部分東京や大阪や遠いところに行って就職する。それらは皆被差別部落に囲まれた地帯です。そこで心にもない発言をしたり、行動をしたりしたら、いけないということで教育はしなければいけないと思ってやっているのですが、肝心の生徒がその実感を持っていない。全く聞いてくれない。これが悩みです」と。私は関西で育っていましたから、そのような世界があるなんて夢にも思わなかったです。そういうのが東北の大部分の世界です。その中から「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という思想が生み出されてきているわけです。

この言葉はむしろこれからはヨーロッパへ持って行かなければならないと思います。「あなた方の人権宣言はインチキですよ、『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず』(フランス語にも簡単に訳せると思えるのですが)となっていないじゃないですか。いまだにそのロマを追いつ出すなんて、何ですか。人権宣言を世界に広げた責任を感じなさい」。こう私はフランスやヨーロッパに言うべきだと思います。アメリカに対しても、「あなた方の独立宣言はインチキだったのですね。ワシントンは黒人奴隷を持ちながら、ああいうことを白々しく言っていたのですね。それでは『天は人の上に人を造らず、人

の下に人を造らず』に（英語にすれば簡単にできますが）反しますよ」とはっきり言わなければなりません。こういうことをヨーロッパやアメリカに表面から、突きつける時代に入って行くと思います。これまではそのようなことをしていなかったのです。

この言葉は福沢諭吉が、人権宣言や独立宣言を参考にして作ったのだらうなんてことを書いてありますが、そして、それが一般化していますが、とんでもないことです。やっぱりあの言葉は日本の言葉として、ヨーロッパに知らせる。アメリカに知らせる。勿論その他の世界にも、日本が知らせるべき言葉です。

## 壹与の時代の後

今日のメインテーマに入ります。三国志の倭人伝を見ますと、そこには重要な欠落というか、段差があります。三〇年前の私は全然それに気がつきませんでした、今見るとはっきりした段差があります。

倭人伝そのものから言いますと、卑弥呼の時代、壹与の時代で終わっています。壹与の時に貢献して、財宝を届けて、30人の生口が行ったということが書いてある。それは泰始2年（266）ですから、魏から西晋になった翌年になるわけです。魏から西晋になった翌年で倭人伝はストップしている。

ところが三国志全体はそうではないわけです。少なくとも呉の滅亡は、呉史の最後に、ちゃんと書いてあるわけです。これは三世紀の終わり近くです。（280年）。そこまで陳寿はちゃんと書いているわけです。陳寿が死んだのも3世紀の終わりですから、呉の滅亡を知った上で死んだわけです。

呉史は呉の滅亡まで書いてあるが、倭人伝はそれよりずっと前の西晋の始まりでストップしています。ここに段差があります。この段差は非常に重大な意味を持っていて、非常に問題だと感じたわけです。卑弥呼の時には30国というのは出てこないわけです。壹与のところで30国が出てくる。30人が出てくる。生口30人です。30という数が一致しているわけです。そうするとこの30と関係があるのではないかと、考え始めたわけです。なおその時生口という言葉があります。捕虜のことだと諸橋大漢和など書いてあるわけです。（以下当会ニュース130号30頁生口と献上の項と同旨であるため省略）。要するに生口とは生きた人間という意味です。（注 後漢書には捕生口虜という言葉が出てくるが）。

広島に生口島というのがあります。谷本茂さんはそこのご出身です。このイクチジマとのイは名詞の前に出て神聖なという意味を表す日本語。クは不可思議な、すばらしいという意味の形容語、チは神より古い神のチ。神聖な不可思議な神様のいらっしゃる島です。それが捕虜の島という漢字を当てると意味不明になります。それは漢和大辞典などを持ち込んで捕虜というような意味に解釈するからです。本来の解釈は、生口は生きた人間です。それを持ってくると何もおかしくないわけです。生きた人間、すばらしい人間のいた島というのを生口島に当てている。

生口島に生口という漢字を当てたのはうんと古いわけです。生口と呼んでいた段階にその字を与えている。日本の漢字の当て字というのはすごいです。谷本さんの疑問も解けたわけです。

## 親魏倭国

倭人伝の最初の部分に、「旧百余国。漢の時朝見する者あり、今使訳通ずる所三十国」とあります。漢の時百余国がやってきたというのは何のことか。国交の記事ですから魏の正規の官僚である陳寿が間違えるはずはない。それは生口160人の記事だと思われ

ます。  
(安帝の永初元年倭の国王帥升等生口百六十人を献じ、請見を願う。＝岩波文庫後漢書57頁)。

160人というのは倭人の国の代表。一つの国から二人来ているのもあれば、百数十国になります。それを陳寿は百余国きたのは彼等であるというので始まっている。(もっとも後漢書の方があとからできているが)。漢の時に国交を結んだのは百数十国ということから始まっている。

ところがいざ始まってみると親魏倭王にくっついて来たのは30国です。9カ国は道すがら表記されている。ところが21カ国は投げ出されている。併せて30カ国です。落差があります。例えば120国とすると90国はどこへ行ったかという問題があります。上田正昭さんなんかは統合されたのであろうといっています。近畿説ですが、だから統合したのは近畿であるということにします。当時としては井上光貞氏が触れなかったテーマで目新しいものです。井上光貞氏が九州説であるのに対して、近畿説が若き上田さんによって提示された有名な論文に出てくるわけです。しかし今から見るとあれは大変無理がある。120国が30国に統合されたのであれば、その統合されたことを書いてあるべきです。2、3行で書けるのですから。簡単に書けるにもかかわらず書いていないのです、書き忘れたのではなく、重要なことですから都合が悪いのです。この重要なことに、書き忘れたという概念を投入するといかにもおかしいわけです。その点を捉えても、颯爽と登場した上田説には欠落があるのです。

真相は倭人伝にある30国というのはいわば親魏倭国です。女王は親魏倭王です。あそこに出てくるものは親魏倭国30国です。単純計算して120国から30国引いた90国は貢献してきていないわけです。なぜか。一部は親呉倭国だったわけです。呉に貢献していた連中が相当いたわけです。茨木市の銅鐸圈、あの国々は銅鐸を作ったが、その銅鐸を作る技術は呉の方から来ている。それより何より、三角縁神獸鏡は、作りは皆呉の鏡の作りです。魏の鏡の作りではないわけです。呉の鏡の作りに魏の年号を入れたりしているから、紛らわしくなっている。呉の工人が大量に近畿へ来ている形跡がはっきり残っている。

だから当然親呉倭国もいたわけです。これは当然貢献に来ていないわけです。仮にそれを20国としましょう。そうすると70国が行方不明になります。70国は去就を決めかねている。魏に付こうが呉に付こうか、どちらに付くかで国の運命も激変しますから、どっちつかずの日和見国家ということになります。日和見国家が70国。併せて120国。簡単な算術であの時の体制が判明してくるわけです。

そうしますと呉の滅亡がやってきます。東方年表で見ると魏滅とあり(265年)、ここで西晋に変わったわけです。この2年目266年に壹與の使いが行っているわけです。この266年で倭人伝の記事が終わっていて、それ以後の記事はないわけです。

ところが呉が滅んだのはいつかということ280年です。三国志の呉史はこのところまで書いてあります。(天紀4年 中華書局版1360頁)。だからさっき言ったように陳寿は呉の滅亡を知って三国志を完成したが、具体的な内容の倭人伝は西晋の初めの年です

トップしている。その間が空白なのです。段差があるというのはそこなのです。そうすると呉が滅亡すると倭国の中は大変です。親魏倭国はそれ見たことか、我々は前から魏朝と遣いをしていたのだ。やっぱり、我々の時代になった、ところ、なるでしょうし、親呉倭国は、全く今までの大義名分が否定されたわけです。その王国の存立も危ないような混乱に陥るわけです。どっちつかずの日和見国家は、それなりに対策に追われるわけです。ですから266年から280年の間が、14年間に倭国の中の大動乱の時代です。もう少し、話を詰めると、呉の滅亡したのは確かに280年ですが、呉の孫権がいたのはもっと前に終わっているわけです。大帝歿太元2年（252年）、このとき孫権が死んだわけです。（中華書局版三国志1151頁）

このあと呉は孫権のあとを受け継いだがうまくいかなくてがたがたして、最終的には280年に滅亡しているわけです。呉ががたがたしている時は当然親呉倭国はがたがたしているわけです。日和見国家もがたがたしています。実体は孫権死亡から呉の滅亡の時代が倭国側の混乱の時代です。

## 崇神天皇

キーポイントは崇神天皇です。有名が江上さんの騎馬民族説があります。つまり崇神は高句麗からの騎馬民族である。それが朝鮮半島から日本列島に入ってきて、天皇家を作った。敗戦の頃、人々は一大ショックを受けたわけです。戦争中の皇国史観の頭から見ると。現在でもその影響を受けている人は例えば、森浩一さん、奥野正男さんとか、かなりいます。私は江上説は、全く成り立たないと思っています。（以下東京古田会ニュース131号19頁、崇神天皇と同趣旨のため省略 要旨1. 騎馬民族なら好太王碑に書かれていなければならない。要旨2、ミマキイリヒコは日本語の名前である。騎馬民族であれば高句麗語の名前を持っているはずである）。

崇神天皇について古事記と日本書紀で扱いが違います。日本書紀では東西南北四方に大和から軍を遣わしたと書いてある。ところが古事記は三方です。つまり吉備の方のルートがないわけです。古事記と日本書紀に落差があります。どっちが本来か。私は古事記が本来であろうと思います。日本書紀のように四方を征服したというのが本来であったら、あとで吉備のほうを削って、少ない方に古事記が書き換えるということは意味がないわけです。逆に三方だったのを日本書紀が四方に直したと言うなら解ります。古事記の方が本来系で日本書紀の方が解釈系である、ということ「盗まれた神話」の段階で述べたわけです。これは今考えても正しいと思います。

問題は、何故本来の姿の古事記が三方なのかということです。崇神天皇（10代）というのは非常に不幸な出生を持っている。彼の父親（9代）が孝元天皇（8代）の妃（伊香色謎命＝いかがしこめのみこと）を自分の皇后にして生ませた子供となっています。

（岩波古典文学大系日本書紀上236頁）妹も同母です。岩波の注では、こういうことは古代でよくあったことだと書いてあります。初めはそうかなと思いましたが大嘘です。神武天皇の場合、奥さんを九州において、近畿に来て新たな奥さんを得た。神武との間にできた子供は、綏靖、安寧とは腹違いの子供となるわけですが、殺されるという記事で始まります。不倫はままたることであると岩波日本書紀は説明していますが、それはおかしいわけです。やはり父の妾と結婚するということは、あつてはならない、許されないわけです。神武紀の先頭を飾る話です。

そういうことからすると崇神と妹の場合は不倫の子供です。そのために任那へ追われたわけです。大和におれなくて任那へ追われたわけです。

ミマキイリヒコは、ミマナでなくミマキです。ナはオロチ語に残っている大地です。それがミマナです。ミは御、マは真実の真、共に敬語です。ナが大地。そのミマナの中にある、城・要害のミマキがあるわけです。ミマキの長でもなくミマキの中の入り江の長です。

イリというのがポイントです。沖縄の西表とかいてイリオモテと読みます。ちゃんと古い日本語にあるわけです。我々が入り江という言葉を使っているのはこれを使っているわけです。

ミマキイリヒコはミマキの中の入り江の部隊長。位としては低いわけです。そこに彼は妹と一緒に大和から追いやられていた。彼としては非常に不本意なわけです。不倫の子供だなんて自分たちの責任ではない。それでも厳然たる差別をされるわけですから、非常に不満が内向していたわけです。

そこへ倭国の大動乱が始まった。親魏倭国、親呉倭国、どっちつかず。瀬戸内海沿岸は大混乱に置かれたわけです。その時に崇神は故郷大和を目指した。矢印は大和から九州ではなく九州の方から大和へ侵入した。そしてそこを征服した。おそらく大和自身も親魏と親呉で揺れていたと思いますが、そこに突入して支配した。それで自分の新しい占領地を支配した「ハツクニシラス」という天皇（王）という名前を名乗った。

そうなれば古事記にある三方が当然です。その事情を知らないでか、忘れたか、形だけ整えたのが日本書紀の四方です。

問題のキーポイントはその次に出てきます。つまり、崇神が大和に突入して征服したのは、神武以下の天皇家の一族です。本流でない人たちが本流、兄の方を征服して弟の崇神の方が勝ったわけです。だから兄の方は弟に仕える。昼も夜も差別される身にならざるを得なかった。ということは被差別民ということと天皇家とは別のところにそういうのがいたのだというイメージを皆さん持っておられたと思いますがそうじゃないのです。それまでの兄の方が被差別民にさせられた。

## 神武天皇陵

こうなるとああそうかと思えますのは、神武天皇陵を作るときの話があるわけです。そのときにそこには洞（ほら）という被差別部落があった。（208戸）。そこが立ち退きを強いられたという話を住井すえさんが詳しく書いています。神武陵を作るときに被差別民が立ち退きを命じられたというのは有名な話で、季刊邪馬台国で現地の方が書かれた詳しい報告を私は持っていますが、（季刊邪馬台国48号）、これは現在では神武天皇陵という架空のものを作る上で、現地にいた被差別民が追い出されたという形で。従来語られており、そう理解していたわけです。そうではなくて、立ち退きを命じられてのが神武天皇以来の人たちなのです。彼等が被差別民にされたわけです。

ホラというのは、ホは秀でるのホで、ラはぶらぶらのラですから、非常に優れた場所というのがホラです。そのホラを支配していたのが被差別民です。それが神武陵が作られた場所にいた人です。ということは天皇家の兄の方が、被差別民にされたということです。

室町時代に穢多が生まれたなどというのでは歴史を語ることはできないわけです。倭国

大動乱は、被差別部落の発生の重要な事件でした。

### 九州王朝の終末期

もう一つの重要な問題は九州王朝の終末期の問題です。この点は古田史学の100号に合田さんが書いた文があります。そのキーポイントは愛媛県の越智の国に紫宸殿という字地名が残っている、ということをもとに議論を展開された。ただ合田さんが展開された考え方には私は若干疑問を持ったわけです。

合田さんのお考えでは越智の国に紫宸殿という言葉ができたのは白村江以前であろう。白村江で負けて以後そんなものができるはずはない。ところが白村江以前となると、九州太宰府に紫宸殿という字地名が残っていたことは、私が繰り返し述べており、現在では江戸時代の文書でいくつか紫宸殿と呼んでいる資料が見つかってきております。それと伊予の国の越智の国に紫宸殿があった。合田さんは白村江以前の遅い時期で、早い時期が太宰府の紫宸殿であろうという仕分けをされた。この点が疑問で、白村江以前の前半の紫宸殿が太宰府にあり、後半が伊予にあるという仕切りがはっきりしない。論理の都合で仕切りを作られただけで、歴史的な実体が背景にない。しかも同じ白村江以前に紫宸殿が二箇所で作られる、つまり太宰府に作られ、伊予に作られるのはおかしい。紫宸殿という言葉は一つしかないという言葉です。紫宸というのは一つしかない星ということで天に紫宸が一つのように、地にも紫宸殿は一つだけ、という唯一絶対を意味するための名前です。内裏とか大里とか言うのとは全然性質が違うものです。それが、二箇所に紫宸殿があったと想定することには、私はやはり大きな矛盾があるのではないかと考えます。

さて私の立場は、日本書紀でおかしい点の最大のものの一つは皇極天皇と斉明天皇を同一人物にしていることです。ここで九州王朝が消されます。(以下当会ニュース135号16頁以下と同旨であるため省略。要旨、皇極天皇は輝ける人物として登場する、しかし斉明天皇は気違いとまで言われている。狂心の渠といわれるものは、大切な治水である。大規模な工事は大和でなく九州で行われた。神籠石、水城、運河などである。高句麗・唐に対する防衛施設だった、それでも負けたのは、近畿天皇家の裏切りである。中大兄などが引き揚げる。しかたなく難攻不落の地を飛び出して行って海で破れる。唐が来たとき、残った軍事設備を非難したとき、あれは気が狂った女王がいて我々に作らせた。我々も大変迷惑した。その役割を振られたのが斉明で、斉明は九州王朝の天子である。二人の女王を一人にするのは神功皇后の場合と同じである。ここで九州王朝を消し去った。)

### リアルな九州年号

重要なポイントは、九州年号はリアルであるということです。中でも二中歴が一番古い原型を示している、と考えています。その二中歴には不思議なことがあります。一つの年号は、大体5、6年前後しか続いていません。

7年、9年というのがありますが、それは例外です。ところが一つだけ飛び抜けているのがあります。それが白鳳23年です。段違いです。なぜここだけ23年も続いたのかというのが、この九州年号問題の一つのキーポイントです。しかもそれは量的な問題だけではないわけです。ここで見ますと白鳳というのは、始まったのが661年、それか

ら23年間続いたという意味です。その最初の年が661年。これは白村江より前です。白村江は、中国側の旧唐書によると662年です。日本書紀によると663年。この誤差は意味があります。日本側は南朝系列の暦を使っている。中国側は北朝系列の暦を使っている。ここに誤差があるわけです。暦というものは天皇の在位などで作りますと、ぴたっと行かないわけです。一番早い話は、3世紀の呉が魏の年号を使っていた話があります。そこで金石文に刻まれている年号は、魏の方の年号と一年誤差がある。誤差がある呉の年号が日本の三角縁神獸鏡にも現れている。ないはずの景初4年が出てきたりする。そういう別の王朝を結びつけるときには当然誤差がある。

この誤差の話の時、私と和田喜八郎さんは同年である。私が大正15年8月に生まれたのに対して彼は12月の終わりに生まれた。4ヶ月の違いです。ところが届け出は年開けて元旦にした。元旦は昭和2年でした。昭和元年は一週間ぐらいです。4か月しか違わないのに大正15年と昭和2年の違いがある。こういうのはあらゆる場所で起こるわけです。北朝系と南朝系に誤差があって当たり前です。旧唐書の662年と日本書紀の663年とは一年誤差があって当たり前。つまり北朝系と南朝系の誤差です。

4ヶ月でも見せかけでは2年の違いになります。至る所で王朝と王朝の暦を結びつけるとそういう問題が起きます。

662年もしくは663年としても、いずれにせよ白鳳元年は白村江より前となります。ということは天子を称していた頃の年号です。その時は実は斉明の終わりに当たっている。

斉明の最後はおかしくて、摂政として天智が天皇ではなく、あとの人が読んでも解らないような曖昧な形に書き直しています。私の目から見ると白鳳は斉明の時の年号である。それが23年間続いた。つまり白村江を挟んで継続したことになります。ということは斉明は白村江以前から天子として在位したということになります。

その場合唐の占領軍が入って来たという問題があるわけです。また、天智紀の中に9年間で6回唐の軍隊が来たことになっています。これもおかしいのです。6回も来てあと全然来てないように書いてある。これは、日本書紀の書き方の流儀であって、たとえば。屯倉問題で安閑天皇のところほとんど集中しています。前後に若干ありますが大半安閑天皇のところ集中しています。津田左右吉もこれはおかしいと言っています。

大化の改新もおかしい。詔勅が年2回も連続して詔勅だらけです、以前から官僚がたくさん、一生懸命詔勅を書き、用意していた、ということはありません。要するに九州王朝のいろいろの詔勅を全部纏めてあそこに書いただけのことです。九州王朝の歴史書から纏めて、大化の改新の頃に入れたわけです。それが日本書紀です。というのは唐の軍隊が来たのも9年間に6回も来たのではなくて、662から701までこの間に何回か来ているわけです。

最後は7世紀の終わりに来たと思われま。それは筑後の風土記で古老が言ったことの中に怪我をした人たちが今でも不慮のままに残っているという話があります。これが筑後の風土記ではいかにも磐井の乱の話として入れているわけですが、磐井の乱は風土記ができた150年も前の話です。150年前に怪我したのが150年後に長生きして、足や手がもげた人がたくさんいたということは、あり得ないわけです。それをまた岩波の注釈では崇りの意と書いてありますが、そんな事はあり得ないです。ですから、あの古老が言った記事は今の6世紀後半の記事ではないわけで、いまの7世紀の終わり、

701直前の記事です。その時唐の軍隊が入って来て、彼等は陵墓を壊す、軍事的要塞を壊す、という目的で来ているのです。(以下東京古田会ニュース135号17頁と同旨のため省略 要旨南京の遺跡が完全に破壊されている話。武寧王の墓の話)。

吉武高木などは全部地下から出てきました。唐は地上のものは壊したが、地下のものは放っておいた。

唐が九州王朝側の軍事施設などを破壊した跡は歴然たるものがあります。筑後川流域の装飾古墳は皆中ががらんどろになっている。全部穴を開けてがらんどろにしているのです。公の盗掘です。現地の人には大事に思っているから、それに抵抗して足や手をもがれたわけです。そういうのが7世紀の終わりだからこそ、8世紀の前半にも残っているわけです。この唐を相手の話を切り取って磐井の乱のものとして作り替えたのが筑後の風土記です。

## 白村江の後

最後のテーマは、白村江のあとどうなったかという問題です。日本霊異記に白村江の戦いで伊予の国の越智の直という人物が捕虜になって10年間そこに捕囚生活を送らされたということが記録されています。日本霊異記にありますますがそれ以外に現地でいろいろ伝承が残っています。

木村賢司さんという方が、伊予の出身で、自分の先祖の伝承を私に話して下さいました。それを「壬申大乱」で「越(をち)を恋うる嬬の歌」(「壬申の大乱」277頁)として30頁ぐらい書いています。そこで示されているのは、まず越智が九州王朝側と運命を共にしました。さっきのように近畿天皇家側に従って早々と引き揚げたり、実際上の利敵行為や裏切りはしなかったのです。また越智の直というのは白村江の時捕虜になります。

しかし越智の国の全員が捕虜になったわけではなく、大半はちゃんと越智の国に帰ります。捕えられた一人の越智の直が数奇な運命にあった。10年間向こうにいてあちらの女性と一緒に帰って来たという漂流譚が書かれています。ということは越智の国は白村江以後も九州王朝と深い関わりのあった国であった。言い換えれば斉明は白村江の敗北のあと越智に本拠を移して、ここで白鳳年号のもとに、統治していた。ということになると思います。白鳳年号というのは天子の年号であり同時に斉明天皇の年号です。ところで越智の国ではサイミョウという字地名があると今井久さんが報告しておられます。サイメイでなくサイミョウです。面白いのは、普通サイメイと耳慣れています、これは漢音です。サイミョウというのは呉音で南朝音です。愛媛にサイミョウという南朝音が残っているのは非常に意味が深いわけです。当然本来はサイメイでなくてサイミョウであったはず。それを701以後は近畿天皇家は北朝側の庇護のもとに、サイメイと北朝音で言い直しているわけです。

その言い直されない前の姿が愛媛の国に残っているのです。逆に言うとサイミョウという地名が元で斉明天皇という名前がつけられたのだと思います。

そのほかにも朝倉天皇とか、すぐに理解できないような名前がいろいろ残っていることを、合田さんからお聞きしたのですが、皆非常に意味があります。紫宸殿だけあって他に何も無いようでは困るわけで、今までの知識では理解できない天皇名や行宮名が残っていることに非常に意味があります。

勿論これは白村江以後九州王朝の残映が愛媛だけで存続したわけではないわけです。有名な資料としましていわゆる続日本紀にまず、「慶雲四年七月（707年）山沢に亡命し軍器を挾蔵して、百日首（もう）さぬは複罪（つみな）ふこと初めの如くせよ」。

つまり707年段階においてまだ山沢に亡命している連中がいる。百日のうちに出てこないと許さないといっているわけです。

次は翌年の和銅元年（708年）正月、「山沢に亡命して禁書を挾蔵して百日首さぬは複罪ふこと初めの如くせよ」。

武器ばかりじゃない禁書も持ったまま百日も出てこない、許さないぞ、と恐喝のように脅しているわけです。

元正天皇養老元年（717年）十一月「山沢に亡命し兵器を挾蔵して、百日首さぬは複罪ふこと初めの如くす」。

日本書紀ができる3年前です。ですからこの段階、707年から717年の間、10年間なお兵器を持ち、禁ぜられた書物、当然九州王朝の書物ですが、（佐伯有清さんなんか占いの本などといっていますが、とんでもない話です）九州王朝のれっきした正統の本です。それを持って、近畿天皇家に服さないものがある、ということを行っているわけです。

このあと九州王朝系の禁書は手に入って、それをもとに日本書紀を作る話になって行くわけです。古事記と日本書紀の関係ですが、要するに日本書紀ができるキーポイントが、養老元年のケースです。

ということですから、701で例えば評から郡に変わるの、ぱっと変わりましたが、二中歴もそこでぱっと変わっている。しかしそれは表向きの変化であって、それ以外そんなに、ぱっと変わるはずはないのです。その変わらなかったことがここに表現されているのです。

では山沢はどうなるか。例えば信州、松本、穂高。八面大王、現地では有名な話です。八面大王というのがいて、あの辺で勢力を張っていた。いろんな地名まで残っている。それを田村将軍がこれを征伐した。その首が飛んでこの辺に落ちたから〇〇首という地名になる。血が飛んだから〇〇血。そういう地名が八面大王の関わりで説明されているわけです。柳田国男はこれを一切拒否したことは話しました。これらは九州王朝の残映なのです。八面というのは八女の大君です。しかも松本穂高を取り巻いて久留米の玉垂宮がいっぱいある。玉垂宮は今の筑後川の神籠石に囲まれた地域に密集しています。その分派が信州松本、穂高を取り巻く地域に分布しています。やはり九州王朝の末裔です。曲水の宴のあとが松本に残っています。玉垂の水というバス停もあります。というようなことで九州王朝の残映は信州にもあるわけです。

また阿蘇には「井」という姓の方がたくさん、電話帳で8割も、おられる部落があります。名前を言わないと通じないほど井さんが多いのです。倭国は、ワは鮮卑音であって、本来井ですから。その井を名乗っている一派が阿蘇山を取り巻いている。そのもとは対馬にあるということです。これも九州王朝の一派です。阿蘇山は山沢にふさわしいです。

ということは各地にそういう残闕があるわけです。九州年号も701以後の残闕があるのではないかと言うことで古賀さんたちによって報告されていますが、十分あり得るわけです。そういうのを含んでやはり九州王朝を議論するべきだと思います。

## 九州年号

繰り返しですが、基本は九州年号です。九州年号の白鳳がキーワードです。白鳳は白村江以前に作られた、九州王朝が天子を名乗っていたときの、年号が、白村江以後も使い続けられている。

学界の通説は、室町時代の僧侶が勝手に九州年号などでっち上げたのだろう、ということです。それに対して私は、それはおかしい、もし室町時代の僧侶が九州年号をでっち上げたとすれば、日本書紀に書いてある白村江のことを知らないはずはない。それを前後に白鳳という年号を作るはずがない。後世造作説はその点でも破綻している。九州王朝・九州年号否定説は学問的には破綻しているわけです。白鳳問題がこの問題の決め手です。

もう一言言いますと白鳳の次が朱雀です。二年間です。朱雀門という言葉がありますように天子の年号であるわけです。太宰府にも朱雀門の名前が残っています。白鳳だけでなく朱雀も天子の年号です。それに対して次の朱鳥と大化は直接天子を示すものではない。

ところで聖武天皇の詔報には白鳳以来とか朱雀以前とか言っているものが多い。

《神亀元年（七二四）十月丁亥朔》冬十月丁亥朔。（中略）伏聴天裁。詔報曰。白鳳以来。朱雀以前。年代玄遠。尋問難明。亦所司記注。多有粗略。一定見名。仍給公驗。要するに、遠い昔のことだから解らない。そんな事を言うな、ということを書いてある。これを私はよく九州王朝実在の証拠として引用しています。九州王朝が実在しなければ聖武天皇がそのような詔報を出すはずがない。九州王朝が実在し、それを使って文句を言う連中がいるから、詔報が出ているわけです。

現在は九州年号が実在したと言うことは私に取っては解りすぎています。問題は九州年号の中で、大化や朱鳥ではなくて、白鳳と朱雀が何故狙い撃ちにされているかということです。白鳳と朱雀は天子の年号だからです。白村江以後になお使われ続けていた天子の年号です。それを聖武は狙い撃ちにしています。その後の朱鳥や大化については、日本書紀に取り込んで年代をずらせたり、細工をしているわけです。これで聖武詔報が何故白鳳と朱雀を取り上げたか、ということが解ると思います。

### （質問に入る前の補足）

神武天皇のところでは不倫問題があると話しましたが、岩波古典文学大系古事記165頁には「天皇（神武天皇）崩りまして後その庶兄當藝志美美（たぎしみみ）命、其の嫡后伊須気余理比賣を娶せし時、其の三はしらの弟を殺さんとして謀る間に云々」とあり、つまり當藝志美美が自分のお母さんを奥さんにしたというわけです。それで三人の弟を殺そうとした。それでやっつけた、ということで、これは理由であって、結局お母さんを自分の奥さんにした、そういう不倫の當藝志美美を倒したという話です。頭注で不倫とは古代にはよくあったという注はおかしいということです。（以下東京古田会ニュース138号＝本号閑中月記に詳しい）。

### 古事記序文

もう一つ古事記序文について補足します。（導入部分は東京古田会ニュース131号1

#### 4. 15, 16頁と同旨であるため省略)

太安万侶が書いた古事記は天智系や、中国には相容れないものであった。これを公にできたはずがない。古事記を作ったが、姿を消したわけです。だから永遠に姿を消したわけです。それを太安万侶をだれかひそかに隠して、写していたのが南北朝時代真福寺(当時尾張国中島郡大須郷、慶長17年以降名古屋の現在地)で出てきたものが真福寺本です。良い写本ですが、隠れていたもので、本来は出てくるべきものではなかったはずで

す。隠し通そうとしたのは理由があります。内容が、大和政権の中で紛議的になる内容です。まして中国側が見れば大軍を起こして来ても不思議ないような内容です。(天武が中国の聖天子より偉いというようなこと)。だから古事記序文が表に出られたはずがない。

もう一つ天武の名前がどうも天武ではなさそうなことです。(以下東京古田会ニュース131号16. 17頁と同旨であるため省略 要旨 飛鳥は九州)。九州年号の真っ最中に天武が第一権力者であるはずがない。それをあるかのように見せかけているのが古事記・日本書紀です。

### 藤原宮

もう一つ申し上げたいテーマがあります。それは藤原宮の問題です。7世紀の後半にいわゆる藤原宮があったと公の歴史では決まったこととして描かれています。この問題には非常におかしい所がある。端的に言わせていただくと古賀達也さんが提起された問題ですが、あの藤原宮はオシッコをすると大極殿の方に入る。つまり大極殿のある場所が低いのです。藤原宮の人は当然どこかでオシッコをします。それが大極殿の方に流れて行きます。そこに大極殿と書いてあるものがあるわけです。それは実は鴨氏の宮殿のあとです。宮殿跡を大極殿跡と呼び変えているわけです。(文責者注 飛鳥資料館の学芸員の方の説明では、藤原京が短期間であったのはその理由によるとのこと。また大極殿跡と称する現地には鴨公神社の碑がある)。

この点もおかしいのです。鴨氏というのは非常に古い氏族である。神武が入って来たときに手助けしたのが鴨氏である。それが後には京都にも支部というか、上賀茂、下加茂というがあり、八咫鳥の子孫であると言います。古田史学の会長の水野さんも八咫鳥の子孫です。当然八咫鳥というのは人間です。空飛ぶ鳥のように錯覚して読まされているだけで、実体は八咫鳥という人間です。神武が熊野を通過して入って来るときに、その辺を支配していた八咫鳥、鴨氏の一族がこれに味方して、これをリードした、という話です。だから、神武以後の天皇家に取っては鴨氏に足を向けて寝れない存在です。だから藤原宮の場合も鴨氏の神殿を中心にあの宮殿が造営されています。

鎌倉の場合も、神殿(八幡様)を中心に都城ができました。天皇家も同じで天皇家にとって頭が上がらない鴨氏の神殿を中心に造営されている。鴨氏の神殿を中心に広げたわけですから、広げた結果、地形的に神殿より高い位置になったのはやむを得ないわけで、オシッコをしたら大極殿へ流れることになるのです。

これに対して直木孝次郎さんが久しぶりに講演をして、「藤原宮を考える場合で困ったことがある。藤原宮の儀式に参列する豪族の邸宅がない」。これはおかしいと言うことで、ご自分で悩んでこられたらしい。その謎が解けたとおっしゃるわけです。難波の方

は広いから豪族の邸宅が取れるが、藤原宮で儀式をやる場合は豪族たちが移動して、飛鳥へ行って参列したのだろう。大発見をしたように話されたのを覚えています。直木さんにすればそのアイデアで疑問が解けたとお感じになったのでしょうか、私から見れば失礼ながらいただけないと感じました。難波から藤原までは遠いところを、たくさんの方を連れて何で行く必要がある。近所にいくらでも作れるのに、それを作らず、無理して行くというのは口先だけの理論付けでしょう。

いずれの点から見てもあれば天皇家の宮殿だったという、教科書や学会や新聞の言うことは大嘘です。

平安宮になると大極殿がちゃんとできますが。藤原宮では大極殿になり得ないのです。

## 古田武彦 八王子セミナー

### 質問の部

#### 質問 1

##### 牽牛子塚古墳について

斉明天皇の牽牛子塚古墳で斉明天皇の墓だとした人たちは大事なことを隠していると思います。といいますのは日本書紀に斉明天皇の遺言があります。4年の5月に孫の建王（たけるのみこ）が8才でなくなった、そのときに自分が死んだら自分の陵に合葬せよといっているわけです。（岩波日本書紀下332頁）

ところが斉明天皇陵と比定した人たちは間人（はしひとの）皇女との合葬だと言っています。間人皇女は別に墓があるわけです、そういう日本書紀に言っていることと全く矛盾したことを言いながら斉明天皇陵だと言っている。これは大和朝廷一元史観の人たちにとっても全くおかしいことです。いかがでしょうか。（文責者注＝天智六年春二月壬辰朔戊午。合葬天豊財重日足姫天皇与間人皇女於小市岡上陵（岩波日本書紀下365頁）とあり、斉明天皇と合葬したことにはなっている）

#### 古田

おっしゃるとおりで、日本書紀とか律令の記録に全く合っていないわけです。それを八角墳がでたということで、天武とほぼ同時代の八角墳だから斉明以外ないという理論です。今おっしゃったことを含めて全く矛盾しているわけです。反対の人がいれば反対の人を呼んで議論する、それが学問です。

#### 質問 2

都市牛利は都市が官職名で牛が姓、利が名前だと考えますが。

#### 古田

都市牛利の件ですが、都市はトイチで姓です。古田と同じです。牛利が名前前で武彦にあたります。（「なかった」六号94頁以下）。そうすると難升米について難が姓で升米が名前ではないかという問題が生じました。これもその可能性が十分あるという例が出てきたわけです。

鳥丸伝の中に「漢末、遼西鳥丸大人丘力居、衆五千餘落、上谷鳥丸大人**難樓**、衆九千餘

落、各稱王、而遼東屬國烏丸大人蘇僕延、衆千餘落、自稱峭王、右北平烏丸大人烏延、衆八百餘落、自稱汗魯王、皆有計策勇健。」という文章があり、この中に難樓という言葉があります。ここで難が姓、樓が名前である可能性があります。可能性があるというのは蛮族でそのまま書いている場合があるのと、完全に中国風に姓一字、名一字のケースと両方あるわけです。後ろから二行目の烏延も烏が姓で延が名である可能性があります。私は烏丸語は知りませんから決定はできません。しかし全体の関係から見れば難が姓で樓が名である可能性は十分あります。ということは難升米の難が姓で升米はシメでしめ縄のシメとすれば名前である可能性がある。さらに難升米は烏丸の難樓の一派である可能性もあるわけです。烏丸には、中国側に敵対しているのと、親中国側とがあり、難樓は中国側に親しい方の部族です。その難樓と難升米が同族であるとするれば、卑弥呼の使いの意味が変わってきます。この間に公孫淵がいます。公孫淵を取り囲んで首を切った、その背景が解るわけです。しかも、烏丸は北京と遼東半島の間ですから、文字が当然あるわけです。その地域の文字が伝わっていたという話との関わりが出てくるわけです。断言はできませんが面白い問題が出てきたという感じを持っています。

## 質問2の関連質問1

都市牛利の話で牛が姓、利が一字の中国風の名前だと思います。中国の名前の辞典にも牛という姓があります。都市というのは役職ではないかと思えます。中国の辞書に都士という、周の時代の官職であると説明されています。倭人伝では市ですので、士と市とちょっと違いますが同じものじゃないかと思えます。大夫というのも周代の役職名で邪馬壹国が名乗っているとすると都士というのも周代の役職であるというので、都市も周代の役職名として名乗っているのじゃないでしょうか。

## 古田

今の話も面白いアイデアだと思います。要するにトイチというのは現在博多に、都市という人がいる、ということ博多の上城誠さんからファックスをいただきました。それが私に取っての驚天動地の始まりでした。「俾弥呼」を書こうとしているところを全部投げ出して現地へ向かい、都市さんの本家本元の高島というところに行きました。それは松浦水軍の本拠地で黒潮の流れ込む所です。神聖な港といわれるところに、明治の初めまで墓があった。(以下東京古田会ニュース126号参照)

それと三国志の30国がほぼ読めました。最初の出発は中国側が書いたと思いました。陳寿が書いたものだと思っていました。(東京古田会ニュース130号に詳しい)。

其の後この倉田命題をバックに着々と進展しました。

一つだけ言いますと、邪馬壹国というのは非常にだじな名前です。ヤマはマウンテンの山です。九州では高祖山です。イチのイは名詞につけて神聖な何々です。伊豆半島の伊豆はマメを書いているが、神聖な港です。伊勢は神聖な瀬です。

最近気がついたのですがイズモ、イズは伊豆半島のイズと一緒に。モとは海の藻のように群がっているものをモといいます。神聖な港が群がっている場所が出雲です。

漢字で出る雲なんて考えるから、そう思わなかったのですが、単語としては伊豆半島の伊豆と同じです。アイヌ語と同じです。アイヌ語が使われているのではなくて原初日本語がアイヌ語に残っていると考えればよろしい。

元に戻って都市は音と訓と両方を使っている。三世紀に音と訓を使っているということは倉田命題にぶつかっても思わなかった。音で倭人側が書いたと思い込んでいた。ところが音と訓をつかっていた、考えてみれば当たり前ののですが

漢字の音を知った人が、難升米にしても、音だけで漢字ができるはずはない。訓を使わないで日本語を漢字にはできないじゃないですか。だから音訓両用というのはむしろ自然な姿だったのです。

大和では新田町をトイチと言います。各地にトイチがあるわけです。その中でトに都を当てるトイチは一箇所だけ。つまり女王国にある都市です。女王国にある神殿町を都市といたしました。それは博多湾岸です。釜山博多間のルートが松浦水軍が握っているルートです。

商業ルートです。商業ルートを捌く市が都の市、都市です。その支配者だから都市牛利なのです。

牛利が牛プラス利である可能性も否定はできませんが。

## 質問2の関連質問2

難升米はナシメとも読めると思いますが。伊予にはナバエ（難波江）という姓がたくさんあります。

## 古田

難と「ナ」につきましては別の重要なルートがありまして、ウラジオストックへ二回行きましたが、行った目的はオロチ族というのがロシアの一角にいることとの関係です。今の樺太の対岸あたりに現在の本拠地がありますが、もとは黒竜江の中流域から追われてというか、漢族に押されて海岸にやってきました。それがヤマタノオロチと全く無関係だろうか、日本海のはす向かいの海岸のオロチが全く偶然の一致だろうか、何かそこに関係があるのではないかということで行ったわけです。松本さんもご一緒していただき、予想以上の明確な解答が出てきました。

オロチのチは神様。オオナムチのオオナは、オオが海、ナが大地、海と大地がオオナ、ということを経地のオロチ族の長老から聞いたわけです。びっくりして繰り返しそれを発音して貰って、録音したのですが、間違いなくオオナは「海と大地」という意味です。ムチのムは「主たる」、チは神様です。オオナムチは直訳すれば海と大地の主たる神様です。これも原初日本語があってそれが伝播したものです。

オロチ族は最初黒竜江の中流域にいたのが、押されて海岸に来たわけですが、そのときすでに原住民として存在していたのがオオナです。その言語なのです。そういう古い現地語と、いわゆる出雲に伝わっているオオナムチという言葉が同じであるということです（大国主命）。この点は「なかった」の第六号まで松本さんが次々辞書を完成しつつあります。

結論を言いますとナというのは大地、水辺の大地を意味する古い日本語です。

質問で「ナ」と発音すると言われるのは、どうも今のことが基本ではないでしょうか。その場合ナではなくて中国の難であるというケースがあってもよいわけです。その場合それとしての論証があるわけです。それと団とか南とか言う姓が博多湾岸、佐賀県に残っています。そういう人たちは誇りを持って団とか南とか言う姓を変えていないわけで

す。もっともその人たちは何かを南に変えたのだと言うことがないとは言えませんが、その辺の検査をやった上でお考えになればよいと思います。

繰り返しますと「ナ」というのは基本的には日本語の一つである、ということをご理解いただければよいと思います。

### 質問3

「日没する処」は班固が漢書で書いた。「日出ずる処」は陳寿が三国志で書いた。では隋書倭国伝の国書の「日没する処の天子」あるいは「日出ずる処の天子」について言うと、どうなのでしょう。多利思北孤は漢書あるいは三国志について知らなかったことになるのでしょうか。一般的な概念から言うと倭国に住んでいる多利思北孤から見た日出ずる処というのは自分の国ではないと思うのです。もっと東の方から太陽は昇ってくるわけですから日出ずる処の天子という発想はおかしい。それを受け取った煬帝にしても自分の国が日没する処でないことは漢書ではっきりしています。また自分が住んでいるところから見たときに日没する処はもっと西のはずです。そういう発想からするとこの国書と言うことはおかしい。それじゃどういう発想でこの国書は書かれたのでしょうか。

### 古田

多利思北孤は当然尚書のことを知っているわけです。周公を救ったものの子孫であり、これは卑弥呼の王系の直系だと言っているわけです。言っていないと言う人は、文章の部分、部分だけを読んで覚えているから、今までの我々とは別に思っているわけです。そんなはずはないわけです。尚書のことを忘れて書くということはありませんというのが第一点です。

第二点は、尚書の段階ではなく、今の倭人伝に言っている裸国・黒齒国を支配領域にした我々だ、という二番目の誇りと言いますか、それを当然バックに持っているわけです。それを示すのが、後漢書の「建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、**倭國之極南界也**。光武賜以印綬。」です。南界を極むるというのは鹿児島などに当てるのはとてもない話で、極という言葉は地球の果てのような時にしか使っていないわけです。「極むる」というのは裸国、黒齒国のことを言っているわけです。我々はそれを我々の領域と見ている、という表現なのです。中国の方もそれを了解して、金印を呉れているわけです。也はやという表現で、そういう背景で呉れているわけです。そういう歴史を背景にしてあの文章はできているわけです。それらを見無視して読むべきではないのです。日没する処は、おまえの処より向こうだからおまえの処ではないだろう、と言うのではない。日没する処は我々の領域内だ、と言っているのです。

領域内というのは実は倭人伝に出ているわけです。裸国・黒齒国は倭人の国だと言うことです。だから倭人伝に出ている。倭国ではないが、倭人の国なのです。

それは事実で遺伝子の研究などで現在のインドネシアから採取した遺伝子と現在の日本の太平洋岸の日本人の遺伝子が一致するわけです。多様な分類がされていますが、多様に分析しても日本列島の太平洋沿岸日本人とインドネシアの現在の人たちの同じ類型に属するわけです。現在だけでなく千何百年前のチリのミイラの示す遺伝子とも一致しているわけです。ということは彼等は倭人であるわけです。倭人だから倭人伝に書いてい

るのは法螺ではなく本当だったわけです。

裸国黒・齒国というのは日本語なわけです。倭人伝の中の固有名詞は倭人が書いたはずと前に話しましたが、黒齒国・裸国も倭人のつけた倭語になるわけです。

コクシでクシはチクシ、ツクシのクシです。クシの国にたいしてあそこはコクシです。福岡県の分国のようなものです。

ラ国のラはウラのラ。ウが接頭語です。三世紀と現代とは全く同じではありません。

大人と下戸との対話の中で大人が何か言うと下戸は噫(い=岩波文庫ではアイとふりがな)という返事をします。ウィあるいはウの発音です。現代子供はアイと言ひ、大人はハイと言ひます。Hという発音が加わっているだけです。同じ日本語であるが両者に違いがあって、我々が使っているのは三世紀の言葉に、接尾語接頭語を加わっているということです。

裸国というのも現代のウラと同じです。では浦島太郎と同じかという、これは無理があります。あれは大陸です。島として書いていません。しかも不思議なことに二箇所、黒齒国と裸国は別の国名です。くっついていたら同じ国名にならないのにならなければならぬのに別にあるわけです。

実は現在南米で二箇所日本と共通な所があります。一方はエクアドル、一方はチリです。ペルーは違うのです。あそこに天野さんという方がいて、一生懸命働いて、日本人で成功した方ですが、その方と、ないかないかと手紙でやりとりしましたが、ペルーにはやはりないのです。ところがエクアドルとチリにはあるのです。それが黒齒国と裸国です。黒齒国の方は甕棺が出てきます。福岡県から出てくるものがまさしくエクアドルから出てくる、という話です。

### 質問3の関連質問

隋書倭国伝でその後絶つという言葉が今まで解らなかつた。わざわざ多利思北孤が遣使を送って自ら絶つというのもおかしいし、煬帝が絶つのもおかしい、と思っていたのがやっと解り、新しい発見をしました。

古田先生の話の中で九州王朝の天子の話が出てきます。天子そのものの問題につて、白鳳と朱雀の問題でこれが論証の一つだと言われたのですが、じゃそれ以外に九州王朝は天子を名乗らなかつたのか、煬帝に出した国書の中で天子を名乗ったけれども、それ以外では名乗っていなかつたのではないかと、天子という発想が多利思北孤の中になかつたのではないかと思っているのですが。

### 古田

天子については「日出ずる処の天子」は非常に明確に自分で天子を名乗っています。それ以外にはなかつたのかとすることになるのですが、それ以外にあったと感ぜられる証拠はいくつかあって、例の紫宸殿と言うのは太宰府に紫宸殿と言う名前が残っているわけです。明治の最初の歴史書にも紫宸殿と言う名前があるのはけしからんと、吉田東伍は憤慨しているわけです。憤慨していると言うことは紫宸殿という言葉が残っていたわけです。現在では江戸時代にも呼ばれていた例がいくつか報告されています。紫宸殿と言うのは間違いなく天子しかあり得ないわけです。庶民は勿論、皇族でも紫宸殿と言う言葉は言えないわけです。だから紫宸殿という称号が太宰府に残っているということは、

天子を称していた証拠である。多利思北孤一人が名乗り、他の人は全く名乗らなかったら紫宸殿という名前が残る理由がありません。

さらに朱雀門という名前が残っています。これもやはり中国の天子の宮殿の入り口が朱雀門です。これも天子を称していた人がいた証拠です。

というようなことで九州王朝が天子を称したことは疑えないと思います。

中国側（唐）と礼を争って反発したというのも、結局礼を争うというのは天子問題で、中国が天子を称しているのは間違いない、それに対してこちらが臣下だと言っておれば礼を争うことはない。こちらもやはり天子だ、おたがい天子と言っているのだ、というので食い違うわけです。礼を争うことになるわけです。礼を争うという貴重な証言は、日本側も天子を称していた証拠になるわけです。

始まりはいつかと言うことになると、これは南朝が滅びた後ぐらいではないか。南朝が滅びる前から天子を称していたという考えもあり得るでしょうが、私はそれはちょっと成り立ちにくいような気がします。

南朝が滅んだ後それを受け継ぐ。例の**継体**という年号は国体を継ぐと言う意味で、国体というのは南朝の天子の国体を継ぐと言う意味です。そこから天子の前段階というか、そういうものが始まっていたことは十分考えられる。継体の時から天子を称していたと言う、主張の方が現れても不思議ではありません。

ただし、天下公認というか、天下にそれを主張し始めたのは南朝が滅びまして北朝対九州王朝言う状況になって日出ずる処の天子、日没する処の天子と言う言い方が現れたと言う風に考えるわけです。これは従来私が言っていたことの繰り返しにすぎません。それに対して新しく申し上げたのは白鳳というのは、天子が白鳳の出現を喜んだと出ておきまして、これは庶民とか諸大名が白鳳を喜ぶというのではないわけです。

ですから白鳳という年号も自ら天子を称している表現と考えるべきではないか。

この場合他のケースと違う点は白村江の敗戦以後も白鳳という年号を続けている。ということは天子を称し続けて、いたのではないかと考えられる。朱雀という年号もやはり天子に関連した、年号です。朱雀門というのは庶民や地方大名など朱雀門というのを作らないですから、自ら天子を称していた表現ではないかと思われまます。

一方、熊本や、岐阜に天子宫というのがあります。これは「アマゴノミヤ」ではなかろうかと思います。アマゴというのは広島県から山口県にかけて尼子氏というのがいます。山中鹿之助で有名な尼子で、これを別の漢字で書いて天子になったので、元は「アマゴ」だと思われまます。現地でどう読んでいるかお調べいただきたい。唯一絶対の天子の意味で熊本県の人や岐阜県の使途が称していたとは今の私には思えません。

多利思北孤の天子は仏教的天子ではないかというのが竹内さんのご提案でそれは正しいのではないか。仏教では何々天子とやたらにあります。日出ずる処の天子の所もお互いに仏教を信仰することを前提に言っていますので。仏教思想に基づく発想ではないかということはある得ると思っています。

#### 質問4

邪馬壹国のイチという発音が三世紀頃、日本人はイチと発音していたのでしょうか。古事記日本書紀を読みますと、ヒトツ、フタツのヒトツが中心ではないかと思われまます。もしそうなればやまひとつの国ではないかと思われまます。

もう一つヤマですが、ヤマは山を意味すると考えてよいでしょうか。

## 古田

いわゆる倭人伝の「読み」ですが、これがどういう読みがよいかという問題で、我々が30国を読んでいった場合も基本的な問題になるわけです。古田史学の会報の100号、この中で問題だと思ったのは内倉さんの論文です。内倉さんはミネルヴァから「太宰府は日本の首都だった」という、印象的な題の本を書かれ、読者もかなりいらっしやと思います。あの人が朝日新聞の記者をやっていた段階から、敬意を持っていますが、今回の呉音、漢音についての論文は私はクエッションだと思っています。はっきり言えばこれは間違っていると思ったわけです。

どういうことを書いておられるのかと申しますと、要するに、「漢音、呉音という言葉がある。倭人伝は呉音で読んだ方がよいと言う説があるがあれはとんでもない。漢音の方がよい。呉音が日本語に残っているというのは、呉から日本へ渡来した人たちがいるからだということを書いてあるが、その影響だろう」と簡単に言えばそういうことでしょうか。

これは編修した古賀達也さんが、実はそれに反対であって、古田史学の会でも論争があって、それだけに、まずは内倉さんの論文を掲載して、それについてまた自分なりの反論を101号に書きたい、というようにおっしゃっておられたので私は了としたわけです。

そういう内倉さん、古賀さんの論争は別として、私の理解では要するに周、漢、魏、西晋と国の名前は変わっても、都や領域は連続して来ていたわけです。ですから倭人伝に書かれている時期と、今言った範囲は共通の時期である。

ところが316年という時期に大変化が起きるわけです。何が大変化かというと鮮卑族が南下してきまして、そして洛陽、西安を占拠して北魏と呼ばれる国を作ります。彼等は魏という名前の国を作るわけですが、歴史上は我々は北魏と呼んでいます。三世紀の魏と区別して呼んでいるわけです。今度は陳寿が死んでまもなく西晋が滅亡して、西晋の一派が建業（南京）に移り、東晋と呼ばれる国を作りました。西安・洛陽から見ると南京が東と言うことで東晋としたわけです。それで南北朝対立の時代に入ったわけです。ところがその場合言語的に見ますと大きな変化が現れました。いわゆる北魏の北朝の方は支配者が鮮卑族である。被支配者が漢人、昨日までの西晋の中国人です。中国の標準的な発音の人たちが被支配者になった。だからその場合結局まぜこぜ音といいますか、鮮卑と従来音とがミックスされた音が成立します。しかも当然主たるところは鮮卑ですから、中国人から見ると訛りの多い発音だった鮮卑語がむしろ公的な中心の発音にされます。従来を中心的な中国音は庶民や下級官僚が使っていた。という感じになったわけです。これに対して逆は南京の方で、従来は呉越の民が主であった。そこへ西晋の一派がやってきて東晋を作ったわけです。この場合支配者の方が従来通り、西晋の中国語を喋る連中が支配者になったわけです。下級官僚や庶民の方が呉越の民である。この場合違うところは北の方は完全に征服者と被征服者の関係であったのが、南の方はむしろ西晋の人たちを受け入れたという感じであります。若干ニュアンスが違いますが大まかに言うと今言ったようなミックス原語であることに変わりはないわけです。そうしますと三国志は魏西晋の時代ですから、その発音がどこに残っているかというところやはり東晋の

方に残っている(注 東魏は534～550で南北朝時代北魏が分裂してできた王朝)。支配者の原語になっていますから。支配者の原語を南朝音で読むと大体3世紀の発音に近いわけです。ですから漢音、呉音という言葉は非常に紛らわしい言葉で、漢音というのは北朝の人たちが実際自分たちの鮮卑族が、漢音を受け継いだというイデオロギイ的命名で、漢というのは代表的な中国の王朝と言うことで、漢王朝の正当な発音を受け継いだものだと、こう主張している。南朝の方は呉の、田舎の呉の発音に過ぎない、卑しめた呼び方をしたわけです。今お話ししたのはもっぱら発音で言ったのですが、当然これは漢字そのものにも多大な影響を及ぼしました。と言いますのは北朝の場合は、漢字に由来はなかった鮮卑語混じりの、まぜこじや漢字のようなものが大量に発生するわけです。南朝の方は従来通りに近いわけです。その北朝で成立したまぜこじや漢字を「**碑別字**」と称しまして、羅振玉と言う学者が作ります。と言うのも作り、北朝で石碑に刻まれます。石碑に刻まれたと言うことはその時代の字形が使われているわけです。

ちょっと余分な話を付け加えますと、魏と書いてありますとこれは実は北魏のことです。北魏が正統の王朝だと言うことです。我々が知っている3世紀の魏のことは曹魏と言います。曹操から来るものです。

私には笑えない失敗がありまして、壺と臺を調べているときに、「碑別字」と言う本を見つけまして、喜んだわけです。そこに魏の文字がたくさん出ています。3世紀の魏の文字があったと大喜びをしたことがありました。ところがこれは大間違いでした。碑別字に魏とあるとこれは「北魏」の魏のことでした。鮮卑混じりの魏のことであったわけです。曹魏は3世紀です。碑別字は316年を境にしてそれから後に出てきた鮮卑混じりの字形です。こちらの方は石碑に書いてあります。しかし本来の3世紀の字形の事は出ていないわけです。

この本に出てくる字は5世紀の字だったわけです。

これを発表してしまった人が二人いて、一人が末永雅雄さん、近畿に於ける大御所で橿原考古学研究所を自分の私費で作って初代所長になられた方です。もう一人は三角縁神獣鏡で有名な小林行雄さん。このお二人が間違えられた。ここにある魏を3世紀の魏と思いついて論文を書かれた。私はそれを拝見して、これは違いますよと言うことを申し上げたのですが、お二人とも訂正されないままです。京大は小林行雄さんのあとを受けてこれを元に三角縁神獣鏡の論理を組み立てられました。その間違った基礎論文のままなのです。

末永さんはまた面白いことがありまして私が橿原考古学研究所を訪問しましたら、先生は所長でしたが、あ、古田さんいらっしゃい、ということで、すばらしい研究だと言って皆さんに、しょっちゅう言っていますと言って、いろいろ紹介してくれましたが、その後訂正なしです。ということは、未だに橿原考古学研究所系列の人は間違った魏の解釈の元で三角縁神獣鏡を論じているのです。京大の人も間違った解釈の元の三角縁神獣鏡でやっているわけです。

とにかく316年の北魏で変わってきている。有名な話は𠄎です。3世紀は𠄎です。ワにかえられるのが4世紀以後で、鮮卑混じりの発音がワです。矮小のワイと発音が似ているものでそれで倭という字を嫌ったみたいな話が出るのはワに変わって後の話です。

倭人伝をどの発音で読んだらよいかと言う問題ですが、端的に言って我々は非常に幸せ

です。

それは、新井白石がやったのですが、当時の中国人、明清の中国人を呼んで倭人伝を逐次読んで貰いました。彼は自分たちの知っている発音で読んだらダメなのだと、中国人がどう読んだかという発想でした。中国人がどう読んだか確認して読まなければならないというのは、非常に良心的ですが、しかしこれは私から見るとアウトです。明清の中国人は316年以後の中国人です。鮮卑混じりの発音なのです。鮮卑混じりの発音で倭人伝を読んで貰ったということになるわけです。本来の発音ではなかったと、こういう問題が出てきます。今までそこまでの原語認識はなかったのですが。

我々には幸せな事があります。日本人は漢字を学びました、3世紀には完全に学んでいるわけです。後で百濟から伝わったと言う話がありますが、それはナンセンスで、当然3世紀には漢字を学んでいたから、魏の明帝が漢字で書いてよこしています。あれはこちらが漢字を読めることを知っていたからよこしたわけで、漢字を知らないのに漢字でよこしても豚に真珠です。東アジアの笑いものになるだけで、当然3世紀には漢字を知っていました。と言うことは3世紀以前から、魏になっていきなり漢字を勉強したのではなくて、もう、いわゆる漢、周の時から学んでいた。もし難升米の難が同じ難なら、そういう段階から学んでいたということなのです。

その漢字は発音付きで学んでいるわけです。発音なしで字形だけを覚えて、伝えたと言うことは考えられない。必ず発音付きで教え、学んで現在に至っているわけです。発音が来たのはいつかという、漢よりずっと古い段階の発音です。漢よりもっと古い段階の漢字が伝わってきた時の発音を、冷凍庫に入れたようにそのまま21世紀まで我々は持って伝えているわけです。そういうことを我々は意識してやっているわけです。それができたのが日本という島国なのです。

本国の中国は元が入って来たり、清が入って来たりで、そのたびに混ぜこじやになっている。今の中国語は見るも哀れに変形されている。古い漢字を純潔に伝えてきたのが日本人です。日本人の倭人伝研究はもっともやりやすいわけです。

言ってみれば当たり前ですが私自身30年前はそういう頭がなくて、固有名詞は倭人が作ったのを陳寿は採用しているのだと、理屈としては解るが、果たしてどんな発音でいいのか解らなかつた。今考えてみるとそれは大変解りやすい、我々にとって非常に筋の通った発音で、皆さんが一番よく知っている漢字で倭人伝は基本的に読むべきで、鮮卑・モンゴル・女直混じり中国語で読んでは絶対にいけないというのが私の立場です。それが意識されてから30国を読むのが非常に楽になった。テンポが速まって来たわけです。

## 質問5

柳田国男と折口信夫が同類と言うことですが、二人で決定的な違いが一つあったのは、柳田国男は神は民衆の中から出たと言い、折口信夫が絶対に譲らなかったのが、神は外から来たということだと思います。これが日本の神社の起源、信仰の起源で決定的な論争になるものではないかと思っているのですが。

## 古田

非常に面白い大事な問題をご質問いただいてうれしく思います。

これも私の目から見ると非常にはっきりしておりまして、先ほどの私の話の中はかなり含まれています。と言いますのは**アソベ族**、このソと言うのは神を意味する古い言葉で、神より古いのです、柳田国男や折口信夫が言ったのは神を問題にしています。神ばかり問題にしていますが神は新しいのです。日本人にとって**カミ**は最初の神ではないわけです。それより古いのは**チ**です。それより古いのは**ソ**です、もっとある可能性があります。が今解っている段階ではそういうことです。

そのことを知ってか知らないか馬鹿にして柳田国男も折口信夫もやらなかったのです。後の方のカミだけの論争で終わっています。はっきり言えばどちらも間違いです。もう少し言いますとソと言うのが神の古い言葉だと。

名古屋大学で新古今をやっておられた「くそじん」(久曾神 昇氏＝国文学者、愛知大学名誉教授)さんがいらっしゃいますが、クは奇抜でも誉め言葉、ソは神様、不可思議な神というすばらしい言葉です。しかし我々がクソと言うと何か汚いものを思い浮かべますが、神という注釈をつけて久曾神さんは不可思議な神様の意味です。非常に古い表現です。ついでに言うておけば「コラクソ！」など、あれは古い神を罵倒した表現です。その前のもっとも神聖なものを罵倒語に使うわけです。ツボケでもそうです。青森権威行くと、「このツボケ！」と言って子供はよく怒られます。ツボケというのは、同じように神様を意味するツボケ語です。そのツボケ語を罵倒語に使います。

古事記の中にヒルコ。これはヒルメと並んで、男性の太陽神がヒルコです。瀬戸内海の場合は東の淡路島、当時の淡路山から太陽が出ます。ヒルコが淡路山から誕生された。これが女性がリードして生まれた第十一書にあります。そこでヒルコが誕生します。男性のヒルコは女性のリードの中で生まれたという仕組みです。これは縄文の神話です。古事記ではナメクジの蛭を当てています。そのようなものは神様と言えないと言って舟に乗せて流すわけです。

要するに新参のアマテラスを太陽神にするために、古く伝統のあるヒルコをナメクジのような蛭扱いにしているわけです。その前の時代の神聖なものをいやらしいものとして扱うのです。

もう一つ話をしますと、**チ**と言うのもクソに続いて古いわけでアシナヅチ、テナヅチ、ヤマタノオロチ、オオナムチのチであるといいました。それが私の一つの出発点になったわけです。ところがあれはまだ足りなかった。なぜかと言うと千島ってありますが、あの島は千もないです。三十いくつしかないのに何で千の島か。ハバロスクから見ると千島から太陽が出ます。日本の東西南北の感じとちょっとゆがんでいますが、地球儀で見るとハバロスクの真東が千島です。千島は太陽の出る島なのです。その意味の千島です。そうすると、面白い問題につながります。南米の**チチカカ湖**。あれが日本語かもしれないという話は何回もしています。チは神様のチ、チチはダブル原語、カは河の神聖な水を意味するカ、チチカカは神様が作りたもうた神聖な水という意味になる。アイマラ語は太陽の神の作られた神聖な水という意味である。(チチカカ湖については東京古田会ニュース133号26頁に詳しい。また大下さんが「なっかた」第4号に関連記事を載せている)。

柳田国男や折口信夫を軽蔑する意味ではありません。しかし彼等には大きな限界がありました。東日流外三郡誌一つ彼等は扱っていないのですから。神の探求で、今私が知っているものより、もっともっと古いものがおそらくあると思います。チにしてもソにし

でも日本列島が始まりということはありません。当然周辺にチヤソを神と見る原語があるはずで、事実チはやたらにあります。カもあるでしょう。カムチャッカなど。日本語の親戚原語に取り巻かれているわけです。それを先入観なしにやっていく。

もう一言言えば現代の言語学はヨーロッパの言語学、これは面白い発祥を持っていてケンブリッジ出身のインド総督が就任遠絶でやったのが出発点です（ウイリアム・ジョーンズが1786年、インドの考古学会において、サンスクリットとヨーロッパ諸語との類似性・共通の祖語の存在を指摘した）。つまり我々が学んできたギリシャ語ラテン語、それよりもっと元になるのはサンスクリットではないか。就任演説でそのようなことを言うのはすごいですが、研究が進んで、結論が逆になって、ギリシャラテンの方が古くてその伝播がサンスクリットだという学説になったのですが、明らかに両者の間に共通の言語が次々に見いだされました。

それは良いのですがそのやり方で日本語を理解しようとしたら変なことになりました。日本語には同類語が一切ないという話になってしまいました。だから天から降りてきたような言語になってしまい、松本さんなども、日本語は孤立していると言っていました。これはあくまで就任演説に出発した言語学を絶対とみて当てはめたら、日本語が全然周辺と似ていないということになった。ルールがいろいろありますが、あるルールでやってみると。うまくいかなくなったというのは、そのルールが間違っているということです。要するにヨーロッパとインドを結ぶ短い領域の特殊状況を世界普遍として当てはめるのはダメだということが日本語で解ったわけです。

## 質問6

秋田孝季が「天は人の上に人を造らず」と言ったことについてご説明下さい。

## 古田

東日流外三郡誌の先頭に出てくる、天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずという文句があります。（東日流外三郡誌 1 八幡書店版 116頁）あれに対して福沢諭吉は第二段で解説を加えています。先に言った言葉は事実のあり方を述べているだけで、実際に全部が平等であるという意味ではないと。それを脱するには、学問をすることによって政府と対等になれるのだという答えを第二段で書いています。考えてみると今の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という問題は結局被差別部落に照らしてみれば明白なのですが、被差別部落を認めないということです。被差別部落を認めておいて、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言ってみても空理空論なのです。ところが福沢諭吉が言っているのは、今の人間に実際の差別があるが、これをなくするためには学問をすればなくなるのだ、とこう言っているわけです。しかし被差別部落の人に「あなたたち学問をすれば差別されなくなりますよ」などと言ったら、笑われ、怒られます。

福沢諭吉の理解しているレベルと、東日流外三郡誌の文句の意味しているレベルが違うのです。という問題を古田史学100号に私は書きました。

それに対して「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉を生み出す土台は、何かと言うと当然東北地方です。被差別部落のない世界ではこれを生み出すことができる。沖縄もそれに準ずるのでしょうか、この地帯で見いだされたと言うべきで

す。関東や関西や九州の被差別部落の密集している地域で福沢諭吉があんな言葉を見いだしたとはとても考えられない。彼自身はいずれにせよ被差別部落を拒否する立場に立っていた。もしそうでなければ、至る所で被差別部落と正しい理念との衝突、被差別部落は間違いだという議論がなければおかしい。一切ないわけです。要するに被差別部落があるという現実とは別に、彼は意に介しないわけです。そこで人間の生活レベルが違うのは学問すれば、解決できるという非常に上調子の取り方をしている。

こういうのを見ましても本来の言葉を生んだ場所と、福沢諭吉は大分の出身で、大阪で適塾で学んで東京に出てきた、どこをとっても被差別部落に囲まれているわけです。その囲まれている福沢諭吉の、被差別部落反対の言葉とは見えない。だからあの言葉だけを東日流外三郡誌から抜いてきて、使ったけれど、それは福沢諭吉の表面的なレベルでしか、彼はとらえていなかった、ということ論じたわけです。

そこから先私がやるべきこととしては、学問のすすめに天という言葉がいろいろな場面で出てきているいろいろの用法があるわけです。例えば武士が天誅を加える、私を斬り殺そうとしている、など天誅の天です。勿論これは意味が違いますが。一般には朱子学の考え方で福沢は天を考えている。抽象的な道義と考えている。しかし抽象的な道義は人間を造ったり造らなかつたりする存在ではないのです。だから「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言っても人間を造ったり造らなかつたりする天と、抽象的な朱子学の技法としての天は別物です。ということで、天一つ調べてみてもいろんな面白い天が現れて来ます。

例えば、孔子の天はまた違うのですね。朱子学の天と違う。なぜかと言えば、孔子が、顔回が死んだときに「天我を滅ぼせり」と言います。あの天は人間に一番枢要な天です。朱子学の普通の道理はそんな意地悪はしないです。ところが孔子の言っている天は意地悪をする天です。東北では東日流外三郡誌に天がたくさん出てきて、これがまた面白いのですが「我が一族」という言葉とよく結びつくのです。つまり自分たち一族の天です。そういう天の概念をそこで喋っている。それは今の朱子学の天とも違うし、孔子が言う天とも違う。今後天の分析も出したいと思しますのでお楽しみして下さい。

## 質問7

後漢書の倭伝に**東鯤人**というのが出てきます。九州では鯤はオオナマズという意味だそうですが、東のオオナマズの人という意味で、そうすると別の場所にもオオナマズの人がいるのかどうか。確かに九州の方ではナマズを特別に思う方がいるという報告があります。ナマズは神様のお使いです。それでナマズを尊敬しているかと思えば今度はナマズ退治などという、退治したあとで反省したのかどうか知りませんが、神社に祀っております。福岡の辺はナマズを尊敬するほうですが、このような人を東鯤人と言ったのではないかと私は考えています。中国でもナマズを特別に思う習慣がありまして、勿論ナマズはたべないですし、九州と他のところとも共通している。

## 古田

長らく私もナマズ問題を考えた時期があります。(注＝東鯤人については「邪馬壹国の論理」に詳しい〈新版244頁〉。また東京古田会ニュース86号、87号〈特集〉には会員・元会員の詳しい論文が掲載されている)。中国でもあれをナマズという意味で

すから、ナマズの人という意味で、頭にナマズを冠のように載せた絵を描いた例があります。

日本でもナマズと言うがそれではどこか特定の地域はナマズを大事にして、他の地域はナマズを大事にしない地域があるかというところでもない。例えば鹿児島とした場合、鹿児島だけがナマズで、あとはナマズは大事にしないという風に別れていないわけです。ナマズという解釈である限りは結局アウトでした。的確な解決ができない。もう一つさらにはっきりしたことは、漢書でナマズを使っている例がありましたので抜き出してみましたが、ダメで、そういう意味になっていない。結論から言いますとこれはどうもおかしいのではないかと考えて、魚偏を取ってみました。倭人の倭が金印では人偏を取っております。三国志でも釜山から三回海を渡るのですが、一回目の渡るは彡がなくて度という字です。二回目三回目は彡があるわけです。偏があるなしで変わらないという問題があります。字の成立の時期によるわけです。そうしてみると、ナマズも魚偏を取って見たらどうか。是という字はテイ、土手です。端っこという意味です。魚のいる海上ですが、東の端っこの人。東の端っこの人ということになると、倭人の方は燕地が出ていますが、東鯤人は呉地が出てきます。それを混同して倭地よりもっと東と考えた時期があったのですが、これは今から考えると間違っている。あくまで呉越の地から見て東の端っこと言うことになると九州の西岸部になり、その人ということになります。かつては縄文と言うと東高西低といわれて、東は縄文がたくさんある、西は縄文が少ないと十数年前まではそう言われていた。ところが鹿児島からとてつもない縄文遺跡が続出しました。東日本はぽつんぽつんと縄文遺跡が出てきますが、南九州ではまとまって縄文都市のような形で出てきました。今は逆転して縄文のメッカは鹿児島県。そうすると縄文の早期、前期ですから、そこで縄文が栄えているのを呉越の人が知らないはずはない。その人々のことを東鯤人と記録した、という風に考えるのが正しいを思います。私自身も、最初は倭人の東の銅鐸圏と週刊朝日に書いたこともあったのですが、今は鹿児島、九州の南端の人ということ、ここは縄文のメッカである。何故メッカかということ、黒竜江方面から南下してくる線と黒潮に乗って北上してくる線が合流する点が鹿児島です。そこにすばらしい縄文文明が開いたわけです。その開いたのを呉越の人が知らないはずはないのです。それを東鯤人と称したわけです。それが現在の私の理解です。

## 質問8

天皇の万世一系という発想はどこから出てきたのでしょうか。中国は天から権威を貰って王様になります。日本の場合は無理やり一本に繋いで権威をオーソライズするのですが、その思想は九州王朝になかったのでしょうか

## 古田

万世一系と言うのは明治以後天皇家が言い出したことです。詔勅などで再々、例えば開戦の詔勅にも出てきます。そういう効能書きを述べ始めた。その動機ははっきりしていて徳川300年に対して、万世一系というオーバーコマーシャル、それで天皇家はすばらしいということ、国民に覚えさせるために、作られた政治的用語です。それが証拠に古事記日本書紀の中には万世一系という言葉が一回もないわけです。ないどころか今日申し上げたように万世多系という立場をはっきり取っている。日本書紀に至っては

ここで切れたのだよと、武烈以前と継体以後は違うのだと言うことをはっきり言っている。一緒にしてくれるなというのが日本書紀の主張です。古事記でも武烈で傳承が終わったのはそれでいいとしまして、それから後がないのはおかしいです。武烈が子供がなかったと言っても、あれは職能集団ですから、みんなが子供がなかったというのはあり得ない。あれから以後は蘇我氏が伝えていた。それを東日流外三郡誌では、中大兄と鎌足が入鹿を襲ったのは、日本書紀の方では聖徳太子の息子の仇討ちだと書いてある。しかしそうすると時間が離れすぎています。忘れた頃に仇討ちをすることになる。ところが東日流外三郡誌は全然違うわけです。つまり天皇記国記を手に入れたかった。蘇我氏がそれを持っていたので、それを奪いに来たのだと。それなら解るのです。なぜかと言うと。継体の方は天皇記に載っていないわけです。せいぜい国記にのっけていて、国記の中でもたいした地位ではないわけです。天皇記に出てきたら、継体は天皇記に縁もゆかりもない、粗雑な地方人に過ぎない、ということがバレてしまいます。だからそれを奪おうとしてやってきたというのは非常に筋が通っているわけです。しかもそれはなかった、持ち去られて関東・東北へ運ばれていた。それを知らないからその代わりに墓を暴きました。石舞台古墳を掘っているわけです。あれは東日流外三郡誌には天皇記国記を探したのだと書いてある。墓に入れるのは一つの保存方法ですが、狙ったけれどなかった。蘇我氏に対する見せしめという形で堀散らかしにした。天皇家が天皇陵を大事にすると言うのはすばらしいと思うけれど、あんなのを堀散らかしにするというのはすばらしくないです。要するに天皇記を探したかった。国記はあったと言うが日本書紀の付録にも載せていません。国記を出すに余計に具合が悪いわけです。

という問題につながりますのでどこから見ても万世一系ではない。

万世一系を言い出したのは明治政府ですが、その元をなしたのは山鹿素行です。**中朝事実**という本が出发点です。(注 中朝事実(ちゅうちょうじじつ)は、山鹿素行が記した尊王思想の歴史書。寛文9年(1669年)に著わした。全2巻。付録1巻。)乃木希典は中朝事実が好きでそれを写しては、写してはいろんな人に配りました。昭和天皇にも皇太子時代に渡して是を見て貰えばよいと、自殺してゆくわけです。朱子学の影響を受けていて、その立場から見て日本の正統の王朝はどれかと言う問いを出し、答えを出そうとしたわけです。そこで困ったのは南北朝でした。それに対して彼が出した答えは三種の神器をキーワードにしました。三種の神器を持っている方が正統だと。後醍醐天皇の時は南朝が三種の神器を持っていたからそれが正統で、北朝は正統でなかった。最後に南朝が降伏して三種の神器を北朝に渡します。それ以後は北朝系が正統ということになります。ということで三種の神器をキーワードにする万世一系という考え方を思想的に定義した。その思想的定義に乃木将軍が感涙し、かつ明治政府は万世一系を裏付けるものとして歓迎したわけです。

ついでに言うておきますれば昭和天皇がアメリカに提出した文書に愕然と、むしと唾然としました。アメリカ軍がすでに制空権をにぎった。伊勢神宮の上も支配し、熱田神宮の上も支配した。何時彼等は落下傘降下して伊勢の三種の神器の一つと考えられている鏡、熱田神宮の剣、それがアメリカ軍の手に入るかも知れない。私は北朝の出であるから、いかほども天皇としていることはできない、だから降伏した、というのです。

我々は国民のためを思ってとかいうコマーシャルを嫌と言うほど聞かされてきた。三種の神器は彼にとっては自分が天皇におれるか、おれないかの決め手なのです。これが中

朝事実で示された万世一系なのです。これも作られた屁理屈です。朱子学に基づいて日本で正統の系列を決めた彼の一策なのです。それを明治維新後コマーシャルで大いに拡大しただけの話です、我々は万世一系と言うと何か実体のある、歴史的背景がある事実と思うのは全くの錯覚です。明治以降騙されているのです。今も騙され続けていることの証明です。先日ハーバード大学の先生が東大に来て講演して、質疑応答をしている場面を見ました。

正直言ってがっかりしました。要するに学生の応答がいかにも幼稚で単純なのです。例えば第一回目で給与の問題が出ました。オバマ大統領の給料とイチローの給料とだいぶ大差がある。オバマ大統領よりイチローの方がうんとよい。これが正当だと思いますかという質問を投げかけて回答を求めていたわけです。英語はぺらぺら喋っていましたが内容が非常に幼稚だと考えました。なぜかと言うと給与というものの価値も、一律ではない。多面的な価値でできているわけですから。それを別の体系で金で比較してもほとんど意味がないわけです。ソクラテスの貰った給料と今の学者の給料とどちらが高いでしょうというような質問をするのと同じだ。勿論現在の給料の方が高いわけです。それがよいと思いますかと聞くようなものだ。聞くのは勝手だが、比較自身が余りにも幼稚で、お金意外に価値が存在するという認識が全くなく、ほとんど意味がない。学生の方も、大統領とイチローは成り立つ世界が違うから質問自身が成り立たないと言えばよい。そんな質問はやめて下さいと突っ込んだらいいのです。そういう突っ込みをする学生がいないのです。

その点は二回目をもっとひどいですね。何故かと言うと戦争責任について。諸君はこの責任を負ってアジアの人々に謝罪するべきかどうかということを問いかけておいて、それに対してオバマが原水爆に謝罪するべきかどうかということにすり変えて行くのです。

会場にいる青年諸君が、まだ生きていないときの戦争責任と取って謝罪するべきかどうかということを質問するのであれば、現在のアメリカ国民が原水爆に対して責任を取るべきかどうかを問うべきです。レベルがそうでないと合わないでしょう。オバマが謝罪するかどうかなら、菅総理が謝罪するべきかどうかを聞くべきです。それなら、くだらない質問だけれどまだバランスが取れる。

学生だけを問い詰めていて、オバマ氏はまだ生まれていなかった、と逃げる。全くインチキの問いです。本人は知っているのです。逃げ道を考え抜いて、質問しているわけです。あれでは教育の名にも学問の名にも値しない。

## 質問9

室見川の銘板という文章を読みまして、本当にすごいことがあるのだな、先生の分析を含めてびっくりして読んだ記憶がありますが、あの銘板はその後どうなってしまったのでしょうか。

## 古田

室見川の下流で体操の先生が学校からの帰りにつまずいてそれを、拾った、そこには文字が書いてあった。当時それについてかなり報道されたのですが、私が私の立場でこれを分析すると九州王朝の中の当時弥生時代の文字である。と言う風に判断しました。そ

の後上流から吉武高木の三種の神器の一番古いのが出てきた。あれも例によって上の所は削平されていて、下の辺の方だけ、市がやった工事の時に見つかったものです。その地帯の下流になっています。と言うことはやはり九州王朝の文字史料である、という判断を下したわけです。ところが自然科学的判定を聞いたかったのですが、その所有者が断られて、できなかったということが書いてあります。だからその当時の体操の先生が校長さんにもなられた人ですが、ご存命かどうかあるいは子供さんの時代かも知れませんが、あれをぜひもう一回光を当てて欲しいですね。

本田光子さんと言う女の方でそういう考古学的出土物の検査をやっている、福岡市の教育委員会におられますが、こういう人に鑑定して貰いますと非常に良いと思います。同じく糸島市の手塚治さんの所の代々の系図が並んでいるのも非常に貴重なものです。それは今福岡市の博物館に寄託してあります、と言うことでした。(文責者注=本件は「ここに古代王朝ありき」1979年朝日新聞社刊169頁以下に詳しい。延光四年<125年>の銘のあるもの。「倭国に文字無し」のもとに学会は古田説を無視している)。

### 質問10

皇極天皇は天智・天武の母だという話がありましたが、天智・天武は兄弟と思ってよろしいのでしょうか。

### 古田

日本書紀によれば天智が兄、天武が弟ということになっています。弟の天武が年が上なのだと、だから、兄弟ではないというクレームというか問題意識を出されることがあります。

ただ、天武の方が年が上というのは古事記・日本書紀ではなくて、ずっと後世の史料に出てくることです。後世の史料に出てくるから全部ダメだとは言えませんが、しかしその場合はその箇所だけを抜き出してそれを根拠にそのあとの議論を展開するのは危ないわけです。それが出ている本の全体の史料批判が必要です。他は非常に正確にこの本は書いている。その正確に書いている裏付けの取れる本で、天武が年上になっている、だから、年上だろう、という論理をふんでいかなければならない。私が見た範囲で、天武年上説の場合だれもそれをやっていない。歴史学の場合は部分と全体を見る必要があります。そういう手順をふんでいただければ良いと思います。

### 質問11

日本書紀というのは九州王朝の天皇の治績を近畿の天皇家の事績として書き換えたものだと思います。九州年号がその中に入って来たり、この年とかこの月とか入って来たりすると、ほとんど九州王朝の話で、近畿のものは少ない、そういう歴史書だと思います。海外史料の新唐書があり、そこに日本書紀では孝徳天皇が大化と白雉の年号だけの天皇です。大化が前で白雉が後というのは九州年号としてはおかしいわけです。新唐書によりますと孝徳即位し白雉と改元し、となっていて、大化が抜けています。九州王朝の二中歴の大化は持統天皇の所に行っていると思います。そのように私は考えていますが先生はいかがですか。

## 古田

新唐書の問題ですが新唐書は明らかに、近畿天皇家の歴史伝承です。それを紹介しているわけです。新唐書の内容は近畿天皇家が作った、歴史伝承のまた紹介です。ところがその場合の近畿天皇家側の史料というのは我々が知っている日本書紀と必ずしも同じでない、ということがありますので。これは参考になるわけです。その場合は我々の知っている日本書紀と新唐書が伝える近畿天皇家の歴史書との誤差がどこから生じたかという検証が要ります。これもなかなか難しいのですがね。できないことはないと思います。

## 質問 1 1 の関連質問

新唐書と宋史で（南宋でなくて）、宋史の方は一応齋然（ちょうねん）という人が「王年代記」を持って行っていますが、神様などはほとんど一致していません。

## 古田

その通りです。今の宋史になるとさらにそれが出てくるわけで、当然宋史を作るときには、彼等は近畿天皇家側の歴史書はキャッチしているわけです。キャッチしているとは言え、我々が知っている日本書紀とは必ずしも同じでない所が面白いわけです。だからそれを日本書紀A、新唐書に出てくるものを日本書紀B、宋史に出てくる近畿天皇家の歴史書をCとしまして、A、B、Cの比較研究はまた面白い分野です。

## 質問 1 2

紫宸殿の問題で、太宰府の政庁跡の考古学年代に私は疑問を持っているのですが、果たして一期工程が白村江の後なのだろうか、それだったら多利思北孤の宮殿は一体どこにあったのか。後宮に数百人の女性もいる大変な宮殿だったと思うのですが、実際に考古学年代はどのようなのでしょうか。

## 古田

紫宸殿跡とか紫宸殿を福岡県教育委員会は認めていないわけです。ところが紫宸殿という言葉が使われていると言うことは例の大日本地名辞書にもちゃんと書いてある。また江戸時代の文書にも出てくるのですが、教育委員会がそれをシャットアウトして、紫宸殿はなかった建前になっているわけです。これがまず問題で、いわゆる現在教育委員会がこれだと言っている紫宸殿はいつかという質問がありましても、答えられない。教育委員会や考古学会は紫宸殿そのものを認めていないからです。

もう一つ紫宸殿というのでなくて、権力者の建物と言うことになると、内倉さんが書かれたように弥生時代から、建物の跡が連綿と続いています。私は「邪馬壹国の論理」の最後に書きましたが、九州大学が古いと言って出しているものを、今の考古学会は知らない振りをしているわけです。そういう問題をクリアしなければならない。

もう一つは弥生の初期が従来はBC 350 だったのが、千葉の歴博BC 800 年からBC 1000 年に遡った。遡ったままで後はそのままにしておく、これは歴博と九州学会の談合状態です。弥生の後期は小林行雄氏の言ったとおりにしておくからこちらの測定結果は認めて欲しい、という悪い談合状態を作り出している。だから現地の考古学は知

らん振りをしているわけです。

日本的には稲作が遡ったことは一般化しているのに、それ以後は従来通りだとしているわけです。

絹の問題でも3世紀を含む年代でなければおかしい。杉原荘介の区分がうまくいくはずがない。全面的にやり直さなければならない。

考古学者が日本書紀を元にして考えることもやめなければならない。水城など白村江以後に作れるはずがない。

もう一つ重要なことは太宰府一箇所が都ではない。博多湾岸全部都で、その都の一角に太宰府がある。

もう一つ博多湾岸が中心であったのは弥生時代。高句麗からの圧迫を感じるようになってからは後退してきます。久留米中心に後退します。玉垂命がおいでになったのが316年とか。高良山で伝えているわけです。筑後川流域に中心が移るわけです。移ったからと言って、太宰府を廃止して移ったのではなく、表は太宰府、実際は久留米近辺となるわけです。二重構造になっているわけです。

九州で若い研究者から古田説を支持している声を聞きます。しかし公には支持できないのです。しかしこれは時間の問題です。いつか爆発します。日本書紀を元に編年を考えるのは間違いであるといふ言っているだけでは現地の教育委員会の人もうダメです、国民を騙しきれません。ということになってくると思います。

### 質問13

古墳時代三、四百年の現象を見ていますと規模から言っても密度から言っても、近畿地方が大きなものがたくさんありますし、そこから広がったという感じも持たれます。箸墓古墳は卑弥呼の墓ではないことは、我々は解るのですが、あれを作った勢力は神武グループの中でしょうか、他の系統なのでしょうかご見解をお願いします。

### 古田

箸墓は九州王朝の分派(神武)の子孫の女性であることは間違いない。考古学的判定で75年遡りました。それは非常に正しいと思う。あれが75年遡ると言うことは、後のものも全部遡るわけです。あとが全部遡るといいと思いますのは巨大古墳が、二倍年暦だから、全部武烈以前に収まるわけです。つまり武烈という元明・元正たちの王朝の前の古墳が巨大古墳だったということになる。それで継体に始まる墓は小さな方墳、ないし円墳だったということになる。非常にすっきりするわけです。かれらは巨大古墳を造ろうとしなかった。

巨大古墳を造ったのは九州を、自分たちの先祖を望みながら死者を葬る、九州の宣伝の巨大古墳です。ということで話は非常にわかりやすい状況になっている。

箸墓での問題でどうしても必要なのは1歩の長さです。百余歩とあるのはどのくらいの長さか。300歩が1里ですから。1里の長さのシンポジウムをやらないのがおかしいのです。この基本問題をやらずして何のシンポジウムですか。答えは当然出ています。

### 質問14

孔子は二倍年暦ではないかとおっしゃっていましたが、十五歳で学を志すのは極めて普通ではないかと思えます。三十歳で立つのが二倍年暦でしょうか、それとも通常年暦でしょうか。もし二倍年暦だとすれば、周公がいたのが、紀元前1000年になっているのが、5百年になるということでしょうか。(原文 子曰、吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩)

## 古田

今の二倍年暦の問題も残されたテーマです。古賀達也さんに依頼しているのですが、彼はいろいろの例を取りだして、これも二倍年暦ではないか、これも二倍年暦ではないかと、やられたわけです。そういう、あちこちにつばをつけるのも、いいですが、その中で一点に絞って徹底的に、これは二倍年暦だという証明をする必要があるのではないかと話しています。

それが資料的に一番やりやすいのは中国です。中国で、たとえば人間が四十で「聞こえるなきは」(原文は 子曰、後生可畏、焉知來者之不如今也、四十五而無聞焉、斯亦不足畏也已)という話があり、四十いくつで人に聞こえるような業績を上げられない奴はもう大体知れていると考えられる、という言葉が出てきます。これを文字通りに取れば変です。四十ぐらいまで何もできないなら、あと無理だと言っても、あと生きていくかどうか解らない。

ところがそれが二倍年暦なら二十です。それまでに見所がある奴だというようなものを持っていない人間は、もうそこからあとは大体ダメなんだという場合なら、これも独断と言えば独断ですが、まだ話としてはなり立つわけです。その言葉から見て論語も二倍年暦ではないかということも古賀さんにも話したことがあるわけです。そうするとさっきの年齢によって言っているのも二分の一で考える方がよい、ということになって行くわけです。不惑も四十ではなく二十になるのじゃないか。二十から、これからこういう一生を送るのだという決心をしてもおかしくない。四十から惑わないというのは遅すぎるのじゃないかと考えます。

というようなことから、少なくとも論語全体の中で、惑うという言葉や、定まるという言葉全部抜き出すのは、索引ができていますから簡単です。それを自分が解釈したような、惑うや、定まるでいいかどうかを確認を取るべきです。この作業はやる気になればすぐできる話です。

ところがそれだけじゃなくて今度は孟子とか、孔子以前とか、文献が知れていると言えは知れていますが、同じことを抜き出せば抜き出せるわけです。それで論語について解釈すれば、三十でよいか、他のものはどうか、それを一語一語、確認を取って行く。その本を一冊作って下さいと、五六年前から古賀さんに会えば言っているのですが、彼も会社の方が忙しくて、あれだけの能力があると使い勝手がよいのでしょうか、組合の委員長にしたり、忙しくてしょうがないわけです。皆さんの中でも一つやってやろうという人がいたら、私もお手伝いしますからぜひやって欲しい。中国には二倍年暦という考えがないですから、堯舜禹なんて言うのは百歳を越えています。

昔の天子は徳が高かった。だから長生きをしていたが、今の天子は徳が低くなったから長生きできなくなった。そういう文がありますが、これは明らかに二倍年暦の時代と一倍年暦の時代があるという認識がなくて論じているに過ぎない。ある段階まで二倍年暦

が中国でもあったと思うのです。それをやっぱり詰めてしっかりとやって欲しい。昭和薬科大学をやめる年に太平洋の二倍年暦の島に行ったことがあります(パラオ島)。そうしたら、行ったらすぐ解りました。つまり教育委員会の女の子たちと会った時に聞きました。

「私たちは困っています、私たちは一倍年暦にしなければならないと絶えず通達を出しているのですが、田舎の人は全く聞いてくれません。二倍年暦でずっとやっています」。お墓に行くと百何十歳というのがやたらにあるわけです。そういう悩みを打ち明けてくれて、二倍年暦が現在でも行われているということが解りました。それもそのはずで気候が一年の半が全然違う。雨ばかりの半年と晴ればかりの半年に別れている。天候から見ても二倍年暦が当然です。私の推定では、そういう二倍年暦が北上してきて日本列島や中国に入って行ったと思っています。

逆に黒竜江の方から入って来たのは一倍年暦ではないかと思えます。陰暦は一年単位、神無月は年に一回しかない。あれは月を基準にした一倍年暦で、あれの方が古いんじゃないか。そこへ南方から二倍年暦が入って来る。だから日本は二倍年暦と一倍年暦のミックスの場所だった、と想像しています。

### 質問 1 5

斉明天皇と継体天皇は九州王朝の天皇なのに、近畿王朝の方に取り組んで罪を押しつけたのでしょうか。

### 古田

斉明天皇正式にはサイミョウと読むべきと思いますが、これは九州王朝の天子です。九州王朝の終末期近くの天子です。それを近畿天皇家が取り込んで、近畿天皇家の系列に組み込ませています。組み込ませる場合に、近畿天皇家側の皇極天皇(つまり、天智と天武のお母さん、いわゆる大化の改新の時の天皇とされている)とイコールで結びつけて、同一人として扱ったということです。皇極は近畿の豪族です。皇極は非常に晴れがましい役、斉明に対しては、気違いの嫌らしい役を押しつけている。

同じように継体も九州王朝の天子の継体、年号にも現れている継体です。これを近畿の天皇に名前に取り入れて、使っている。景行天皇も九州王朝の天子の名前を近畿天皇家のように取り入れて、日本書紀はプラスアルファしている。

### 質問 1 6

4世紀後半から6世紀前半にかけて、阿蘇凝灰岩の石棺が近畿地方にたくさんありますが、考え方として、当時磐井の君と継体天皇は大の仲良しであったとも解釈もできると思うのですがいかがですか。

### 古田

前半の話と後半の話が必ずしも直結しないように思います。

阿蘇凝灰岩について、阿蘇山は火山であって、そこから噴火によって何百何千万年累積しているわけです。日本の古代史を考える場合も重要な背景になっています。今の話から一見離れますが、例の神籠石の場合も神籠石というのは岩を直方体に切り取って、そ

れを下地にした山城を作っているわけです。普通の岩石であればあのように直方体に切ることは難しいわけです。ところが阿蘇凝灰岩の場合は火山岩だから、そういうことが割とやりやすいわけです。そういう火山岩をバックにして、今の神籠石が作られています。

同時に今ご指摘の問題は要するに、近畿の4、5、6世紀にかけての時期に、阿蘇凝灰岩を持ってきて、古墳の内壁を作っています。石棺を作っている、という問題が指摘されているわけです。この持つ意味は、解釈ですからなかなか難しいのですが、天皇家中心主義で言えば九州まで支配下にあった証拠だという解釈をしようと思います。そういう解釈ならば九州だけが支配下であったわけではなく、東海にも富士山の方へも支配が及んでいるわけですから、その凝灰岩を持ってきて良いではないか、近くには兵庫で有名な石切場があって、使われていれば、それを持ってきて良いではないか、なにも九州だけを最良にして持ってくる必要はないではないかという問題があるわけです。

それに対して別の解釈では、やはり近畿天皇家にとっては九州はあこがれの場所である。自分たちの先祖が九州から来た。これは古事記日本書紀にはっきりそう書いてある、津田左右吉が勝手に否定しただけで、古事記日本書紀が力説しているのはそういうことです。我々は近畿の人間でなくて、九州から来た人間だ。古事記日本書紀はそこを力んで書いています。だから死んだときその辺の近くではなくて、我々の先祖の地である九州の岩を持ってきて古墳を作ったのだ、と。せめて死ぬときは先祖の地の石で作った石室で、石棺に入れて欲しいのだと。そう考えれば東海や兵庫県ではダメで、やはり九州から持ってくる必要があるわけです。それの方がスムーズに解釈できると思うのですが、いずれにせよ解釈ですから、それ自身から決め手にはできない。

しかも念の入ったことにこの場合には、わざわざ九州で凝灰岩などを整形して、石棺の形にして近畿に運んでいる。偶然便利な岩があるから持ってきたのではなくて、はっきり石棺を作る目的で凝灰岩を切り取って筏で引っ張ってきてやっている。大変な労働量です。ショウであり、見せ場であるわけです。ショウの目的はやっぱり、我々の先祖は九州から来たのだ、そういう神聖な家柄なのだ、というPRだったのではないかと私は思っています。

後半の磐井と継体は大の仲よしだという点、どこに書いてあるのか知りませんが、継体は福井から出てきた一豪族です。自分に出兵を依頼された敵を倒し、返す刀で、依頼したご主人を倒して、自分が権力を握った。簡単に言えばそういう存在であろうと思います。どこのだれと仲よしであったかどうかは私には解りません。それは政治的な関係でいろいろあったろうと思います。

磐井の方は磐井という地名が九州にあるわけです。その出身であったろうと言われていました。その出身だから磐井という名前を名乗った可能性はあるわけです。

それともう一つ面白いのはいわゆる東日流外三郡誌に卑弥呼の話が出てきます。何種類か出てくるわけですが、その一番長いストーリーを持ったものでは、彼女は大分県の出身だと、何故か自分の両親から切り離されて博多の近辺で育った。ところが長ずるに及んで自分の父や母を求めて大分県に行った。そして自分の両親のいた場所に至った。その後磐井の君に招かれて筑後へ行くわけです。そこで磐井にかわいがられて、そこで二つの教養を得ます。一つは自分の先祖を祀る教養。もう一つは中国の道教のあり方を学

んだ。それで両方を折衷したやり方を学んで、筑紫の国に争乱が起きたときそれによって大いに人々の信用を得た。それで女王のような立場になったと。ところが磐井の方で争乱が起きて、その中で彼女は没したみたいな、終わりははっきりしない話があります。これはほんとか嘘か全く分かりません。

古事記日本書紀に語られる磐井は完全に仇です。近畿天皇家は九州を征服したのだ、というメッセージを伝達する、メッセージボーイとして磐井は出てくるわけです。あれがいわゆる歴史事実であるという証拠はどこにもない。6世紀の前半に王朝の変動のあった証拠がどこにもない。古事記日本書紀に書かれているような大変動があったとすれば、当然考古学的な遺物に現れているはずである。早い話、土器が九州にありました。土器にいろいろシンボル物が彫り込んでいますが、それが、がらっと一変して、近畿のデザインになっていれば、近畿の勢力が取って代わったなということが解ると思うのですが、全然それをしていない。九州で連続しているわけです。

また神籠石が6世紀前半にあったら、当然神籠石をめぐる、戦いがあつたはずですが、全然神籠石に攻めたり攻められたりした跡が残っていない。

ということで私がよくお話しすることですが、岩戸山古墳の資料館に長くおられる考古学者の方に、「何かそういう痕跡はありますか」と確認しました。「それがないんです」とその方はお答えになりました。それは継体天皇の倭鹿火の軍が風のようにやってきて風のように去って行った。だから痕跡を一切残していない、そう書いたと言われました。小説ならともかく学問では話にならないと思います。現地の人にとって、ないのが悩みの種で、これは古事記日本書紀の顔を立てようと思うから悩みの種になるわけで、あれが嘘だということになれば全然悩む必要はない。あれが本当であつたら九州年号は続くはずはありません。

私の「失われた九州王朝」では年号について、これは、磐井の後じゃないかと言ったことがあります、完全な私の間違いでした。大敗を期しているのに年号だけ連続ということはあり得ません。いわんやそれからしばらくして日出ずる処の天子なんて誇らかに言うなどということもあり得ない。日出ずる処の天子が嘘だというなら別ですが、あれが本当なら磐井の件は嘘です。両方本当ということはありません。要するに古事記日本書紀を作った目的は「九州王朝はなかった」、磐井以来九州は近畿王朝の支配下にあつたというわけです。だから九州年号など勿論なかったことになる。そういうことを伝えるために古事記日本書紀は書かれたわけです。古事記日本書紀が書かれた最高の、究極の目的がそれなのです。

九州王朝はなかったと言うテーマを植え付けるためのものなのです。なかった建前になっているのではなくて、なかったんだよ、お前たち国民が、今まで知っていたことはこれから嘘だと言うことにするのだから、よくそれをわきまえておれというのが古事記日本書紀の目的です。この目的を忘れて少しは本当のことが残っているのじゃないかという理屈をつけようとしているのは間違いです。

## 質問17

齐明天皇が白鳳時代の天子であるという話で目から鱗が落ちた気がしましたが、齐明天皇と筑紫君薩夜麻との関係はどういうことになるのでしょうか。この場合、倭国が降伏した記事が旧唐書・新唐書共にはないと思いますが。

## 古田

まず薩夜麻と斉明との関係について、私は、前は薩夜麻が白鳳年間の九州王朝の王者ではなかったかと考えた時期がありました。しかし、今考えると半ば本当で半ば本当でない、変な言い方ですが、つまり薩夜麻は皇太子ないし摂政ではあり得たが、天皇・天子であったのは斉明である、という形で理解しなければならない、と思っています。

前は薩夜麻の年号が白鳳と考えましたが、あれほど捕虜になったのに、その後も白鳳の年号が続いているのはおかしい。薩夜麻の年号ではなくて白鳳は斉明の年号です。その時、皇太子か摂政として、前線に飛び出していったのが薩夜麻です。天子が前線に飛び出すというのは、あの時代では不自然だと思います。うまく占領政策が行かなくて途中で薩夜麻を返してきます。返して倭国を統一するという方針に切り替えてきた、と解釈します。

それから、それが中国の歴史書にないと、これは大丈夫かというお話。これも考えてみますと、中国の歴史書はたくさんあるわけです。それは周辺との関係を皆書いているわけです。ところが周辺との関係を書いているが、皆これを捕虜にした、これを捉えた、といちいち年次別に書いてくれているわけではないわけです。ほとんど書いていないわけです。せめて占領したというのは書いてあっても、だれだれを捕虜にした、国王はどうだった、皇太子はどうだった、などということを一いち書いていない。書いていないからそんなものはいなかった、とは判断できないわけです。当然現地、現地の歴史書や伝承にはあったわけです。しかし中国の歴史書の書き方、目の粗さから言うとそんな事を一々書くような立場になかった。

また中国の歴史も時代によります。三国志は同時代の史書です。ただし西晋の泰始二年（266年）ののところまでは、かなり直接史料で書いているわけです。ということは同時代史料で書いていることです。ところが旧唐書などというのはずっと後ですから、ずっと昔の唐の歴史を文献に依って、その中で取捨選択して、残すものを残して、大量に、残せないものは捨てて、それで旧唐書ができています。其の取捨選択を大量にやった結果、ここにはないから、日本書紀にあっても嘘だろうというのは、歴史書に対する判断のバランスを欠くこととなります。日本書紀が根っこから創作で作ったとは思えない。

薩夜麻が捕虜になって帰って来たということは日本書紀ができた頃にはまだ、薩夜麻は生きていたか死んだばかりの頃でしょう。その時薩夜麻を捕虜として扱った連中はまだ生きています。彼等は漢文が読めるから、日本書紀は読めるわけです。そんなものを、もし大嘘を書いたら、そんな事はないよ、薩夜麻はいなかったよとか、簡単にクレームが出てくる。唐の方が現場を知っているわけですから強いわけです。すぐバレて、すぐ面目を失するような嘘を書く必要はどこにもないわけです。

日本書紀で、薩夜麻が捕虜になり、後で返されてきたということは大筋では嘘ではないと考えています。

年代などは、日本書紀はかなりいじっている。「壬申大乱」に書きましたが、持統期の吉野参詣を三十数回したことを麗々しく書いてある。それまで私は桜見物をしたければいいので、私には関心ないと思っていたのですが、ところが新庄智恵子さんが私の所に、「吉野がそんなに繰り返し行きたい所とは思えません。九州王朝の歴史を、あ

そこに取り込んで書いたのじゃないでしょうか」と手紙をくださいました。ショックを受けて調べてみるとその通りで、壬申大乱に述べていますが、要するに一年中平均して吉野に行っている、桜の時だけじゃないわけです。真冬でも同じぐらい行っているわけです。決定的なのは持統の時代にない干支が書かれてある。ということでこれに戻していきますと7世紀の半ばになるわけです。(注 日本書紀にある持統八年〈694〉夏十月には丁亥の日がない。一方白村江の直前の斉明六年〈660〉には夏四月に丁亥がある)。この丁亥の干支を合わせると、最終が白村江の直前で終わっている。そうすると吉野に行くというのは吉野ヶ里の吉野ということになる。そこへ行く目的は桜見物ではなくて有明海に集まる軍船の査閲である。出発点は太宰府か小郡。ここからなら吉野に行ってすぐ帰れる。そこに普通の陸地の道路と違う、3メートルぐらい高い所に、幅5、6メートルの道路ができています。それが太宰府から吉野につながっていた。一部痕跡が現在も残っている。それに乗って行けばすぐ、さあーと行けるわけです。この話を、つまり九州王朝の天子が軍船を視察しに吉野ヶ里へ行ったその話を持ってきて、時代を全く変えて、持統天皇の所に吉野という単語だけを合わせて、はめ込んだものです。横滑りに書いてくれればまだ役に立つのですが、目的も時間帯も完全に変わっている。桜見物のようなものに書き換えている。それだけ無茶をやって、要するに、九州王朝の歴史を題材にして、歴史物語を作ったみたいなの、そういうやり方をしていることを新庄さんのおかげで初めて知ったわけです。

日本書紀の史料批判する場合、そういう立場で行わなければなりません。日本書紀は基本的に正しいのだとして、大阪あたりの歴史に、九州王朝の歴史をちょいちょい持って行って、当てはめて解釈するのは、大阪あたりに住んでいる人にはそうなりやすいのですが、それはアウトです。

倭国の降伏ということは何を意味しているか。白村江で負けたことが、降伏とイコールなのかというと、そうじゃないと思います。何故かというと、両方とも天子という立場で来ているわけです。降伏なら、両方天子というのは取り下げなければならない。取り下げたら天子を元にした白鳳年号を止めなければならない。止めてないわけです。だから降伏してないわけです。

確かに唐の戦勝軍が来ていますが、太宰府で続けているわけではなく、第二の首都のようにいま伊予に移っている。そこに紫宸殿を築くという風になって行くと思います。紫宸殿を築いている間は降伏していないわけです。

降伏というのは一つの契約です。

世界大戦で8月15日か9月2日か問題になります。国際的には9月2日です。これはソ連軍の北への侵入を合法化するようなものです。ソ連が後から来たのは違法行為になり、国際法を踏みにじった行為になるために、無理矢理9月2日を戦争が終わった日にしているわけです。アメリカとソ連が結託して違法行為をしている証拠です。

降伏というのはそういう意味で難しいのですが、公には701年のところで評という九州王朝の制度が廃止になって、郡という近畿天皇家の制度が始まったのですが、降伏という言葉はただしくないですが、このときが降伏に当たり、王権の交替に当たることは間違いない。しかしこれは中央のはなしであり、各地においてはまだ九州王朝でがんばっている、信州とか、阿蘇とか、いろいろあったわけです。

## 質問 18

那須国造碑に付いてお聞きしたいのですが、あるセミナーで古田先生の立場で質問したのですが、講師の先生は、あくまで、那須直韋提が那須評の評督に任じられたと解釈しています。理由として、①漢文では〇〇に〇〇を賜うと言う、立派な文法である。②飛鳥京出土の木簡に奈須評というのがあり（7世紀第IV四半期）天武持統の頃に奈（那）須評があったのは確かである。③追大壹は天武天皇14年にできた官位で48階位中33位で特記することはない。（講演の中では十二階中下から二番目という話であったが誤り）。

このような考え方に対して先生のご意見をお聞かせ下さい。

## 古田

大事な問題でぜひ申し上げたかったテーマです。

まず、唐の年号が何故出ているのかという問題があるわけです。白村江の後、唐が九州に入ってきて、実質上の支配権を握っていた証拠なのです。次に飛鳥の浄の宮にしろしめす天皇を従来天武天皇と解釈していた、あるいは持統天皇かも知れない。何故かと言うと年代から見ると天武天皇は退位している。持統天皇は即位する直前です。どっちでもないわけです。

あれを天武天皇と解釈したり、持統天皇でいいのじゃないかとしたりするのは、両方ともダメなのです。

両方ともダメだということを、正確な漢文ならちゃんと守って貰わなくてはダメです。全然守ってないわけです。あれは飛鳥のきよのみやで彡に青ではないわけです。浄の方です。九州小郡市飛鳥の浄の大宮です。九州王朝の天皇のいる場所なのです。

「に・を」か「を・に」かで、立派な漢文だってその人が勝手に立派な漢文に決めてそれを根拠にしているだけです。立派な漢文の権威者であることはないと思います。立派な漢文に、このようなバランスの悪い句を並べることはない。

また、この天皇は天武ではありえないし、持統でもあり得ない。ところが小郡市なら当たるわけです。あの時点では唐が背景にいて、今の九州王朝の後継者が、いるという状況を反映した、銘文である。

（注 飛鳥浄御原宮云々は小野毛人朝臣之墓の銘文にもあり、これについては東京古田会ニュース131号27頁以下に詳しい。また那須国造碑については、「古代は輝いていたⅢ」朝日新聞社322頁以下に詳しい）

## 質問 19

日本書紀の構成について神功皇后紀を読んでいきますと腑に落ちない所がたくさんある。仲哀も、景行も、内容がはっきりしたものがない。これは神功皇后を作るための一つのプロセスではないか。応神天皇が本当の天皇であって、それを作るためにどうしても神功皇后がいなければならなかった。そうすると神功皇后の存在は日本書紀の中で重要なポイントをなすのではないか。神功皇后をあのに時代に卑弥呼と壹与と一緒にした注がある。これは成功であると同時に大失敗ではないか。成功というのは確かに客観的に外国に対して日本に神功皇后という立派な女王がいたのだということが解る。

と同時に絶対年代を3世紀にして縛ったと言うことは応神天皇が4世紀であるとする

ならば神功皇后は2運、120年降ろさなければあわないということになる。そうするとこれは大失敗ではないか。大成功と大失敗が一緒に入っているのが、日本書紀の要をなす時期です。いかがでしょうか。

## 古田

今ご質問いただいた通りだと思います。ただ若干重要な補足をさせていただきたいと思います。

日本書紀にとって神功紀が大事だというのはその通りです。ある意味で古事記に満足できずに、日本書紀を書かねばならなかったのは神功紀を作るためであったという言い方もできなくはないわけです。古事記には神功紀がありませんから。応神のお母さんや仲哀の奥さんの神功皇后はいるけれど、いわゆる日本書紀に書かれたような神功紀という長い期間の天皇代理のような、神功紀はないわけです。あれがないと何故困るかというと卑弥呼・壹與に当たる人物がないことになる。ところが東アジアで日本の歴史で一番知られているのは卑弥呼・壹與です。その卑弥呼・壹與のない日本の歴史はインチキではないか、我々が知っている日本とは違うよ、と言われるに決まっています。古事記がそうです。だから卑弥呼・壹與のいる歴史書を作る必要があった。これは日本書紀を作るキーポイントをなす、必要条項でした。そこで卑弥呼と壹與の二人を一人にして、そこに入れたわけです。そうするとそれに基づく矛盾が次々に出てきた。それは二倍年暦というものを、彼等は、元明、元正、太安万侶は理解していなかった。(百日までに禁書をもってこいと言って)九州王朝の歴史書を手に入れながら、そこにある二倍年暦で書いてあるものを、違う王朝だから、二倍年暦として理解できなかった。そこへそのままはめ込んでしまったわけです。倭人伝に倭人は長生きだと書いてあるのをそのまま信じ込んだわけです。だから神武天皇がBC660年に跳ね上がってしまった、とこうなるわけです。

ということで、今ご質問にありました大筋はその通りだと思います。そこで、話したかったことを初めてお話しますが、要するに神功皇后というのは卑弥呼・壹與を代名詞に使っています。ということは現在不思議なことに卑弥呼・壹與の遺跡は全くないわけです。日本中どこを探しても、あれだけ東アジアで有名で轟いている女王の遺跡が一切ない、遺跡好きの日本であり得ないことです。何に化けたのかというと、神功皇后の遺跡に化けているわけです。つまり、卑弥呼・壹與とあったものを、あれは、これからは神功皇后と言わなければならなくなつたよ、と伝えるために、日本書紀を作り全国に書生を遣わしています。これは意味があるわけです。ただ旅行させて喜んだのではなく、これから卑弥呼・壹與の遺跡とあったら、今後は神功皇后の遺跡と見直さなければダメだよ、という指示徹底に行ったわけです。

ということは逆に言うと今残っている神功皇后の遺跡はやたらにあるわけです。日本書紀からいうと神功皇后が行ったはずがないような所まで遺跡があるわけです。例えば五島列島とかです。(以下東京古田会ニュース134号19頁と同旨であるため省略)

神功皇后の遺跡は、皆卑弥呼や壹與、それ以前の女王の遺跡です。

そうすると、卑弥呼の本来の遺跡はどれだ、ということになりますと私は香椎宮だと思います。香椎の宮が神功皇后の御廟となっている。神功皇后は日本書紀ではあそこで死んだわけではなくて、大和へ帰って死んでいるわけです。

滋賀県米原の近くに神功皇后の立派な古墳があります。直径2、30㍍で、いい感じのたたずまいの古墳です。神功皇后の墓となっています。奈良県には大きな神功皇后陵があります。(注 奈良市山陵町字宮ノ谷。佐紀盾列古墳群の中の一つ。全長273㍍) ですから今更九州の香椎に御廟がある必要はないわけです。それをあえて神功皇后の御廟と言っているのは卑弥呼の御廟ではないかと、内心そう思っています。

あそこについて面白い話があります。井戸を掘った宮司さんから聞きました。そうすると下から五色の石が出た。それはただ事ではないのです。五色の石で葬られたのは尊重すべき王者の井戸があった証拠だと思ふ。

私は卑弥呼の金印につきましては、どこにあるかというのは、いつも関心あるテーマですが、香椎宮のすぐそばに印鑰神社(いんにやく)というのがあります。(印鑰神社の〔印鑰〕とはその〔印〕と〔鑰=かぎ〕のこと)福岡近辺には印鑰神社だらけなのです。福岡県の人には日本全国に印鑰神社だらけと思っている人が多いのですが、印鑰神社があるのは福岡県とその周辺だけです。観光の解説では大和朝廷からいただいた印を宝物としたものであろうと言われていますが、これはおかしいのです。大和朝廷が九州福岡県だけを最優先して、印と鑰を与えることなどは、するはずがないのです。

注 インターネットでは、

**印鑰神社**は九州各県では熊本・久留米の他に壱岐や志賀島(志賀海神社摂社)佐賀の大和町大字尼寺、宮崎の西都市三宅2844番地にもある。

本州では、伊甘神社 島根県浜田市下府町903-2

大御和神社 祭神=印鑰大明神 徳島県徳島市国府町府中644

印鑰神社 石川県七尾市府中町223

伊和神社(印→伊 鑰→輪→和と変化) 長野県松本市惣社539

などにあることになっている。

ここから先は推量ですが、金印がないというのは解るのですが、もっと解らないのは銀印や銅印がないことです。倭人伝では銀印や銅印を結構貰っています。それを捨てたり、溶かしたりするはずはないですから、どこかにあるわけです。もしかしたら印鑰神社に祀られているのではないかと思います。志賀島の金印は糸島の三雲神社の社宝であった、という伝承があります。それがいつか盗まれて、志賀島で発見されたようにされた。神社の社宝になって伝わっている可能性も十分あるわけです。

香椎宮の御廟の所の印鑰神社にあるのではないかと思います。

特定の氏族の方が一年に一回お祭りをしてしています。その印鑰はなにものか担当者は知っているのではないかと思います。

しかし、今の私からみると、これはちょっと違うのじゃないか。印鑰神社は香椎宮のそばにある。そばというのは中心ではなくそばです、卑弥呼の金印ならそばにあるのではないのではないか。五色の石の中に埋められている可能性がある。

卑弥呼のキーポイントは香椎神宮そのものではないか、と現在は思っています。これを御廟というのですから、墓とは限らないが卑弥呼に対する祭りの場であると思います。墓が一番近いのは須玖岡本の弥生墓。これも農家の倉庫になっていたところで、建て直すとき地下から、でかい甕棺が出てきました。その中から三種の神器がたくさん出てきました、その中で唯一中国の錦として布目さんが鑑定されたのが、あそこから出てきた錦です。

布目さんは鏡の紐ではないかと言っておられたのですが、疑問で、他の所から出てきた絹とは異なった上等の絹です。綾絹が出てきたのは須玖岡本です。倭人伝を見るといろんな絹や錦を呉れて、卑弥呼には特に与えると言っていきます。今出てきているもので一番それにあたるものは須玖岡本です。吉武高木に出ていない。吉野ヶ里からは出ていますが質が落ちるわけです。布目さんが取り出したら実に真っ青のすばらしい色だった。それが、あつという間に色が変わりました。鮮やかな錦です。ここは卑弥呼に一番近い存在です。

さらにあそこから出た鏡は鳳のデザインのある鏡（夔鳳鏡）が出ているわけです。それに対して最初は時代が合わなかったのを梅原末治さんが改めて考え直して、（その同類のデザインを求めて世界中回られた）あれは間違いでない、2世紀終わりから3世紀初めの鏡です。もっと早い時期というのは間違いですと（「古代史をひらく」古田武彦201頁以下に詳しい）延々とお話になったのを記憶しています。時期は卑弥呼の直前です。遺跡そのものは近代的な住宅になっています。あそこが卑弥呼の墓に一番近い墓です。

## 質問20

蘇我氏のことですが、大和に於ける蘇我氏の位置づけと九州王朝との関係をお話し下さい。

### 古田

これも非常に興味深い大事な質問です。

天皇記・国記というものに関して、古事記は天皇記の片割れ、天皇記の一端である。ただし、天皇記そのものではなくて、天武の名前で書かれているように、削偽定実という立場で書かれているわけです。

偽りというのは南朝系列の歴史が偽りで、北朝系列が実です。他の全ての学者が言うように、あれは従来伝わってきた伝承の、間違いと正しいのを比べて間違っただけのを捨てて正しいのを定めるというように解釈されてきました。それであれば天武は校正係の親玉になるわけです。しかし、古事記序文のバランスから言って、中心のテーマが校正係ではおかしいのです。そんなものに力んで書く必要はありません。力んで書くのは削偽定実、南朝系列は削除、北朝系列だけを生かす、7世紀後半の大問題は、北朝が勝ったということです。そういう意味で古事記には大陸との関係が全然ないわけです。いくら大和の中でも、王朝を作っているのに、大陸との関係が全くなくして王朝ができたはずがない。初めからないのではなくて、それは削られた。それまで大陸との関係は南朝との関係だった。大陸との関係は全部カットされたから、ないだけの話である。ということで、ここに、基本的な問題がある。

もう一つは、武烈のあたりで伝承が終わっていますが、王朝が交替したからそこで終わるのは解りますが、それまで天皇家の内容を伝承してきたはずですが、それが、子供が偶然なかったから終わったということはありません。武烈に子供がなくても、その後伝承は続いていたはずですが、そこが本来の天皇記続編です。天皇記続編を怖がったのは近畿天皇家です。継体後を継いだ天皇記です。

神武からの系列を天皇記Aとしますと、継体から後が天皇記Bです。天皇記Bは、武烈のところで自分を頼んだ相手をやっつけ、返す刀で頼んだ相手そのものも倒して自分が

天皇に成り上がった存在です。天皇記Bにとって一番怖いのは天皇記Aが現れることです。

その天皇記Aはどこにあったかという、蘇我氏がどうも持っていて、これは蘇我氏そのものが天皇記Aの承継者であった、という理解もできるし、あるいはそのバック、支えていたものと見ることもできる。

言葉は違うが、要するに蘇我氏が天皇記Aを持っていると天皇記Bの人たちは考えた。聖徳太子の息子の仇討ちと言うのはとってつけた大義名分に過ぎないわけです。本当は天皇記Aを奪いたかった。ところがそれに先だって蘇我氏は関東へ、東北へ、天皇記Aを逃していた。空振りに終わった。そこで石舞台古墳を暴いて、その中に天皇記があるかと探した。東日流外三郡誌はそう書いてある。それは非常にリアルであると思います。と言うことで蘇我氏というものが非常に古い氏族であり、鴨氏と相並んで古い。しかも蘇我川というのが大和にあります。蘇我というのは氏族名である前に、地名である。ソと言うのはアソベ族のソ。現在知られているもっとも古い神様の名前がソです。カというのは語尾にくると濁音になります。トヨタは自動車ですが、町はトヨダです。習慣としてそうだという他はありません。

本当は歴史的背景があると思いますが、元々ソガはソカです。カはしばしば出ますが神聖な水です。ソガというのはもっとも古い神様が与え賜うた水という意味になります。大和のもっとも古い名前の一つです。それは旧石器からの地名です。縄文などの最近の地名ではないわけです。

鴨氏に導かれてということ詳しく話しますと、まず神武と兄は東方への新天地を求めた、簡単に言えば侵略を求めた。最初五瀬川に来て長髓彦に破れた。迂回して沖合で兄は死んだ。弟の神武は残軍を引き連れて、和歌山を通過して、兄を祀っています。海岸からちょっと入った所に祀っています。弥生時代にはちゃんとそこに水路が入っていた所です。

それから熊野に行きます。何故熊野に行ったかという、熊野水軍、瀬戸内海水軍、松浦水軍、皆仲良しです。熊野水軍の人たちも博多にしょっちゅう行って、博多で神武たちと会っていたわけです。そういう青年同士の仲間です。逆に神武は兄が失われた後、その仲間を訪ねて熊野に行った。熊野はそれを迎え入れて、大和へ行く熊野の道を教えた、一緒について行ったわけです。リードをするのはいいが、受け止めが鴨氏です。鴨氏が受け止めて導いた。八咫鳥が導いたという、そのはしりです。八咫鳥という人間が導いたわけです。誰の所へ導いたかという、蘇我氏の所へ導いた。

蘇我氏が天皇記を持っていたという話がいきなり出るように見えますが、いきなりではなくて、そこには深い歴史の脈略があるわけです。

ついでながら、ある土木会社に勤めている方から長い手紙をいただきました。いわゆる学生紛争のころ、大学をやめました。それで吉野に行って材木を買い取る仕事をしていました。ある日、ある農家に泊めて貰った。どぶろくを飲みながら一晩語り明かした。私はつらかった。戦争中は神武天皇が来たとき、それに刃向かったのが、我が家であると言うことを、みんな、この辺の人は知っている。その子孫だと言うことで戦争中は本当につらい思いでした。その点敗戦になって、まだましになったが、それでも近所の人には神武天皇に敵対したことをいい、今でも私たちは非常に肩身の狭い思いでいるのだ、というのを、涙を流しながら、男の人が一晩中語るのだそうです。聞いている方は、神武は

架空だと思込んでいるわけです。何をつまらぬことを言うのだと思って夜明けになった。

ところが後で古田さんの本を読んだ。そうすると、どうもあれは本当だったのではないか。本当でなければ、あれだけ真に迫って一晩涙を流すということはちょっとできることではない。そう思って古田さんに調べて貰いたいと思って手紙を書いた、というわけです。その通りなのです。

私は逆のケースを知っていて、吉野で、ある町内会長のような方の自宅へ行きました。その人の事務所に入るとちゃんと表彰状が掛かっている。要するにこの人の家は、神武天皇が来られたとき、それを導き入れた人の子孫である。そういう証明書が掛かっています。この辺の人はみんな知っている。商売をやっても非常に調子がいいと言う話でした。神武を歓迎したことが現在まで伝承として残っているわけです。逆に神武天皇に敵対したという伝承も続いていて、商売に不利益をこうむるということです。

津田左右吉がいくら神武は架空だと言っても、そういうことで消える話ではない。神武はやっぱり実在なのです。それを導いたのは熊野の水軍の仲間であり、山の中を導いたのは八咫鳥・鴨氏であり、それを受け入れたのは蘇我氏である、という関係になっている、そういうものを抜きにした古代史は大変薄っぺらな、津田左右吉が頭で考えてひねり出したストーリーに従った歴史に過ぎないということです。

## 質問 2 1

陳舜臣さんが書かれた中国の歴史を非常に親しんでいます、その中味は、古田さんの言っていることは違うのではないか、ということを書いておられました。

### 古田

私は陳さんの本はあまり読んだことがありません。二冊ぐらい送って下さって、隋唐の時代について、文章としては面白くわかりやすく書いてあるから、楽しく読めたのですが、その時感じましたのは、ほんとに嘘か判断する能力がないのですが、陳さんは当然私の本が出たことを知っておかしくない時代に書かれたものです。これには一切ノータッチで、いわゆる近畿天皇家が日出ずる処の天子を送った、近畿天皇家中心の時代だという、なめらかに全部その形で小説が書かれてある。

これは小説ですから、陳さんが好みの小説を書かれてもこちらが文句を言う筋合いはありませんが、しかし、はっきり言わせて貰えば、陳さんも勉強不足なのじゃないか。私の本を読んで、取るに足らぬと判断して何も言っておられないのか、最初から読まなかったから、ああいう話になったのか解りませんが、いずれにしてもこれはただけいな、という感じを持ったわけです。

そうすると私が知らない倭国以外の分野も、ずうっとそれなりに小説家ですから筋が通って書いてあるのですが、ほんとにどうかな、という疑問を感じたわけです。

歴史小説ですから、それにいちゃもんをつけるのは筋違いだと思います。けれども何十年も主張していることを一顧だにしないで、歴史小説を書き続けることは、やはり日本国民を誤らせているのじゃないか。彼の歴史小説を読んで古田のはどうだ、と言われるのも、歴史小説と学問との違いを認識されていないのではないですか。

## 質問 2 2

昔神の手を持ったという藤村という考古学者がいました。一緒にやった文化庁の人が最近こうやって捏造したとかいう本を出したそうですが、ああいう人がいると空恐ろしいです。

### 古田

藤村さんという人が一時もてはやされた時期がありました。東北地方を中心に次々と更新し旧石器を発見した。彼が行く所に旧石器が出てくる。という感じでした。ところが何のことはない、それは彼が自分で、前の晩に埋めて発見していたのですね。全くインチキだったわけです。毎日新聞のスクープだったと思いますが。文化庁の役人がそれと協力していて、不幸な方でした。

これは記憶がありましたのは、仙台に古田史学の会で佐々木広堂さんという方がおられて、この方が藤村さんのファンでした。それで藤村さんをいろいろ支援して、バックアップしてこられたわけです。私にも藤村さんという方はすごいですよ。いうことをおっしゃっておられて、私も一回お会いしたことがあります。仙台でその方が講演されたときに私も30分ぐらいの講演に出て、廊下でご挨拶した覚えがあります。

その後佐々木さんから、古田史学の会に呼んで話を聞きたいということになり、古田史学というより、今で言えば多元ですが、高田さんが、藤村さんを呼んで話を聞きたい、と佐々木さんに依頼されました。

私はいいですよ、と言ったのですが、藤村さんの方から「その会は古田さんの関係の会でしょう。」ということで、ウンと言わないのだそうです。何でだろう、と思っていたのですが、結論から言いますと、私は藤村さんに関して、言っていたのは、いわゆる報告書が出ていない、いつも新聞には出るのですが、報告書が出てないわけです。報告書が出てないと、それをこちらが客観的に、把握できないじゃないですか。報告書を出して貰わないといけませんよ、と佐々木さんに何回も言いました。佐々木さんは解りましたと言って、それを藤村さんに何回も言ったと思います。その時藤村さんはピンときたのでしょうか。

あ、古田は自分の偽造が解ったなと思ったのじゃないでしょうか。それで古田さんの会には出ない。これはある意味では本人の一人芝居で、私はそこまで突っ込んで理解した訳じゃないのですが。

佐々木さんは、加害者であると同時に被害者ですと言われていましたが、その通りです。ああいうことが起きるといっているのはいわゆる考古学会や新聞メディアが浮ついていた証拠でしょう。そういうことを防ぐためには、それこそ最近の民俗学でも、私が言ったら私を呼んで聞かないといけません。

## 質問 2 3

八王子四策の中で一番難しいのは造思想だと思います。今の世代はテレビもあり携帯もありDVDもあります。電車の中で携帯を見ている。読書習慣がつかないと、思想を造るはおろか、思想を理解することまで行かないのじゃないでしょうか。

経済の下部構造が思想だというようなこと自体理解できるのかなという感じがします。このままでは地球は破滅するのかなと心配になりました。

## 古田

全くその通りだと思うのですが、その上に立って、だから地球は滅亡するということになるのですが、滅亡してもかまわないと思います。そんなくだらない人類しか成長しなかった地球は、滅んだってたいしたことはない。また新しい地球が生まれるだけの話。それはささやかな事件で、私は何にも困ったことでも、心配することでもないと思います。これは大前提です。

若い人たちがインターネットなんかで考える力がない。これも確かにその通りだと。しかし逆に考えることがある。それは、今まで本に親しんできた時代は本当に独創的にものを考えてきたのだろうか。検事問題でも出てきたように、学校で教えられたストーリーを覚え込んで、それに合わない事実を排除して、それに沿って試験答案を書いて来たから東大にも行けた、司法試験にも通った。本をよく読んだというのはそのレベルです。そうすると、そういうやり方自身が、破滅を来している。飛躍する言い方をしましたが、むしろ逆にいまの若い人は本に煩わされないから、本に書いてあるから、こう見なければいけないとか言うような、しがらみがないから、思い切って、造思想ができるのじゃないか。そういう世代から生まれてくるのじゃないか。私はむしろそう思っている。ということであえて提言をさせて貰った。(東京古田会ニュース137号21頁以下参照)造思想と言うのは今までにない、人類にない思想です。だから今までの人類は全部ダメ。だからあの程度の神様しか生んでない。原爆がダメと言い切れるような完全な神様を生んでいないわけです。むしろ殺人や奴隷化や原爆を合理化するようくならない神様しか生んでいなかった。

そういう時代を乗り越えて我々が本気で自分たちの思想を打ち立てなければいけない。人類のどこからかと言うと、戦勝国ではない国からでなければならない。日本が、かつて経験したみたいに、戦勝国には軍事力がいっぱいある。我々は敗戦国。原爆も落とされた。もう何にも要らないわけです。

だから我々の中で人類を代表する思想ができるかどうか、これから勝負です。今までは思想以前の問題です。本当の思想を人類が作れるかどうかという、これから本番です、

もう一つ言いたかったことは、私はかつて誤解していました。何かと言うと、歴史観の変動というものは政治変動に伴って起きてくるものだ。大化の改新。大化の改新という大変動があつて、8世紀以後の天皇家中心の歴史観が成立した。また、明治維新という大変動があつて、天皇家中心の明治以後の歴史観ができた。敗戦によって戦後史学の教科書のような歴史観が成立した。だから歴史観というものは皆政治変動の後、それに伴って出てくるものではないかと、ひそかにそう考えていた。そうすると私の言う多元史観、正しい歴史観も何か政治変動が起きて、その結果追認されるよりほか無理なのではないか。なかなかそれなしに、賛成もあるわ、反対もある、現在はそういうレベルであるわけで、それは政治変動がないから、あるいは、その前だから、そういう状態ではないか。内心ひそかにそう思ってきていました。

しかし今考えるとその考えはインチキです。なぜか。今までの歴史観は結局政治権力者が自分を正当化するために作ったものでしかない。それは権力を握るためには、さんざんインチキなことをやってきている。それは近畿天皇家にしても白村江の戦いで、敵に、

唐に塩を送って。場合によってはその味方までおそらくして、九州王朝を倒した。義と利の中の利を取って義を失っている。百済に対する支援をしなかった。そういう、いか  
がわしい近畿天皇家が、自分を正当化するために九州王朝はなかったことにし、ずっと  
前から近畿王朝が中心だったという、偽りの歴史観を、古事記日本書紀で打ち立て、そ  
の記憶ロボットを作ろうとしてきた。

明治維新も勿論そうです。薩長が天皇家中心という政治体制を徳川にかわってうちたて  
ようとした。その裏に万世一系と言う大嘘の政治エネルギーを詔勅に何回も織り込まし  
て、それで、国民を洗脳してきた。あれだけ万世一系と詔勅にまで書かれている。学校  
でもしよっちゅう言われる。二代三代のうちに思い込まされているように、ロボットに  
なっちゃった。それはやはり明治維新後の天皇家が自分たちの政権を美化するための歴  
史観です。

同じく敗戦によってマッカーサーが日本に勝った。そうするとマッカーサーに都合の良い  
歴史観。部分的には商取引のように、戦前の日本のやり方を取り入れ、基本的にはア  
メリカが正しかったのだと、日本が悪かったのだと、悪い奴だらけだったから、みな死  
刑にされたり、何百何千と処刑されました。お前たちはその子孫なのだ。それなのに慈  
悲深いアメリカが経済的に潤してやっているのだ、アメリカに感謝するべきだとね。民  
主主義というものは、アメリカがお前たちにもたらしてやったのだと。こんな恩恵を忘  
れるな、そういう教育をやったわけです。アメリカ支配を美化し合理化する教育を戦後  
教育の基本にしていた。それだけのことなのです。

だから、政治変動と対応していると見えたのは、政権力に併せて歴史観を造ったとい  
うことですから、対応しなければおかしいわけです。

私たちが、今やろうとしているのは、そうではありません。我々はどこからも政治権力  
にゴマをすって我々の歴史観を見始めているのではないわけです。そういう政治権力に  
ゴマをする歴史観を止めようと、そんな事を各国家や、各宗派がやっていたら人類は滅  
亡します。

我々は本当の歴史観を打ち建てる。本当の歴史観と合わなければ明治以後何万何億の教  
科書を刷ってやってきてもそれはペケだ。またバイブルがいくら世界中で何兆という最  
大の紙を刷ったって、複数形を単数に変えたり、エホバが全宇宙を造ったなんて、あんなのは大嘘だ。あんなものに絞られているから、ものを正當に思考できない。日本だけが責任なのじゃない。インターネットのせいじゃない。バイブルはインターネット普及以前からあった。

そういうことですから、我々は国家権力や宗派のしがらみを脱した思想を、初めて我々  
の手で造れるかどうかの今出発点にあるわけです。それが造れなかったら人類は滅亡し  
て当たり前です。そんな人類は早く滅んだ方が宇宙のためだ、私の考えではやはり神様  
が我々に挑戦してきている。これだけ、不法、不合理な原水爆などの装置を神が造った。  
これに負けちゃって、人類は滅亡するのか。それともそれを乗り越える力量を収得した  
のか、さあ。お前の方の出番だ。神様が我々を見つめています。

今そういう時期にあると思うのです。それはどっちへ転ぶか解らないけれど、私はそれ  
を人間にかける。神様を造った人間の方に、私はかけるわけです。人間はそれを克服で  
きる、こう私は信じています。

一人できるという人がいれば大成功。一人にできるということは万人にできるというこ

とです。

以上